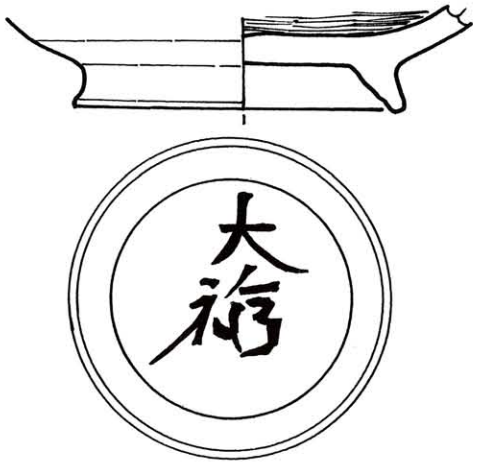
茨城県常陸大宮市

上ノ宿遺跡

発掘調査報告書



平成20年10月
常陸大宮市教育委員会
有限会社　日考研茨城

茨城県常陸大宮市

上ノ宿遺跡

発掘調査報告書

平成20年10月
常陸大宮市教育委員会
有限会社　日考研茨城

ごあいさつ

常陸大宮市は、茨城県の北西部、県都水戸から約２０ｋｍの八溝山地及び阿武隈山地の南端と関東平野周縁大地北端の境界部に位置し、東に久慈川、南に那珂川、中央部に緒川、玉川が流れ、市の６割を山林が占めています。

久慈川と那珂川の二大河川の沿岸には、肥沃な土地が開け、豊かな自然に恵まれ古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねております。そのためこの地域には、古墳・塚・集落跡など多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は、当時の様子を知る手がかりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活をすることができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためにも貴重なことと考えております。このたびの調査は、店舗の建設に伴い、周知の遺跡である上ノ宿遺跡の発掘調査による記録保存を目的に行ったものであります。遺跡内からは、縄文、奈良、平安、中世時代の竪穴住居跡・土坑・柱穴状遺構・溝状遺構・土器等が多数検出されました。この調査報告によって地域の祖先の遺業をしのぶことができるとともに、文化財の対する意識がいっそう深まり、遺跡愛護の精神や郷土の文化を培う上で貴重な資料として役立てていただければ幸いであります。

最後になりますが、発掘調査にあたり格別のご指導を賜りました茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳先生、そしてご協力いただきました地元の関係者、また、一切の経費をご負担いただきました事業所　有限会社東栄建設様、適正かつ慎重な調査をいただいた発掘業者 有限会社日考研茨城様、各位に心から厚く感謝を申し上げます。

平成20年10月

茨城県常陸大宮市教育委員会

例　言

1．本書は、㈲東栄建設の委託を受けて、常陸大宮市教育委員会の指導のもと、有限会社日考研茨城が行った、店舗建設に伴う記録保存調査を目的とした発掘調査報告書である。

2．本書は、下記の遺跡を収録したものである。

遺跡名　上ノ宿（かみのしゅく）遺跡

所在地　常陸大宮市下町4015-1

調査面積　1,９８０㎡

3．掘調査の現地調査及び整理調査は、下記の期間に実施した。

調査期間　平成18年５月25日～平成18年６月27日

整理期間　平成19年９月１日～平成20年３月30日

4．発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当　　大渕　淳志［(有)日考研茨城］　現地・整理

整理担当　　小川　和博［(有)日考研茨城］　現地・整理

調査員　　遠藤　啓子［(有)日考研茨城］　現地・整理

現地調査作業員　井澤良忠、井澤しつい、菊池等、佐藤實、塩澤和紀、相田三郎、沢田すみ江、川崎東功

整理調査作業員　大渕由紀子・大野美佳・小川知美[以上(有)日考研茨城]

事務局　　（有）日考研茨城

調査指導　　常陸大宮市教育委員会生涯学習課

5．本書の編集執筆は、小川和博・大渕淳志が行った。

6．本書では以下のような遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

住居跡：ＳＩ　土坑：ＳＫ　溝状遺構：ＳＤ　柱穴状遺構（ピット）：Ｐ

撹乱：Ｋ　旧石器時代調査地点：ＰＧ

7．本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。

8．書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、標高は海抜高である。

9．本書に掲載した遺物のスクリーントーンについては、いずれも黒色処理が施されていることを示している。

10．遺構および遺物の写真撮影は大渕淳志・小川和博が行った。

11．調査の記録および出土遺物は、常陸大宮市教育委員会が保管している。

12．発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。（敬称略・順不同）

茨城県教育委員会、（財）茨城県教育財団、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、川崎純徳、佐々木義則、金田正志

本　文　目　次

ごあいさつ

例言

第Ⅰ章　序章 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査経過とその概要 …… 1

第３節　調査日誌 …… 1

第４節　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 2

１．遺跡の位置 …… 2

２．周辺の遺跡 …… 3

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物 …… 8

第１節　概要 …… 8

第２節　基本層序 …… 8

第３節　縄文時代の遺構・遺物 …… 9

第４節　竪穴住居跡 …… 12

第５節　柵列 …… 32

第６節　土坑 …… 32

第７節　溝状遺構 …… 36

第８節　柱穴状遺構(ピット群) …… 37

第Ⅲ章　まとめ …… 38

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　グリット配置図 …… 2
第２図　遺跡周辺地形図（１：2,500） …… 4
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡（１：2,500） …… 5
第４図　上ノ宿遺遺構配置図 …… 7
第５図　基本層序 …… 8
第６図　縄文時代の遺物 …… 9
第７図　住居跡ＳＩ01実測図 …… 10
第８図　住居跡ＳＩ01カマド実測図 …… 10
第９図　住居跡ＳＩ01出土遺物 …… 11
第10図　住居跡ＳＩ02実測図 …… 13
第11図　住居跡ＳＩ02カマド実測図 …… 13
第12図　住居跡ＳＩ02出土遺物 …… 14
第13図　住居跡ＳＩ03・04実測図 …… 16
第14図　住居跡ＳＩ03カマド実測図 …… 16
第15図　住居跡ＳＩ03出土遺物 …… 17
第16図　住居跡ＳＩ04実測図 …… 18
第17図　住居跡ＳＩ04カマド実測図 …… 18
第18図　住居跡ＳＩ04出土遺物 …… 19
第19図　住居跡ＳＩ05実測図 …… 21
第20図　住居跡ＳＩ05カマド実測図 …… 21
第21図　住居跡ＳＩ05出土遺物 …… 22
第22図　住居跡ＳＩ06実測図（2） …… 23
第23図　住居跡ＳＩ06カマド実測図 …… 24
第24図　住居跡ＳＩ06実測図（1） …… 24
第25図　住居跡ＳＩ06出土遺物 …… 25
第26図　住居跡ＳＩ07実測図 …… 26
第27図　住居跡ＳＩ07カマド実測図 …… 26
第28図　住居跡ＳＩ07出土遺物 …… 26
第29図　住居跡ＳＩ08実測図 …… 28
第30図　住居跡ＳＩ08カマド実測図 …… 29
第31図　住居跡ＳＩ08出土遺物 …… 30
第32図　柵列ＳＡ01実測図 …… 31
第33図　土坑ＳＫ01・02・03・04・05・06実測図 …… 33
第34図　土坑ＳＫ07・08・09・10実測図 …… 35
第35図　土坑ＳＫ03・04・06・07出土遺物 …… 35
第36図　溝ＳＤ01実測図 …… 36
第37図　柱穴状遺構（Ｐｉｔ）実測図 …… 37

写真図版目次

PL.１　１.遺跡全体景観　２.調査区全体景観　３.基本層序
PL.２　１～５.住居跡ＳＩ01　６～10.住居跡ＳＩ02
PL.３　１.住居ＳＩ03・04全景　２～５.住居跡ＳＩ03、６～８.住居跡ＳＩ04
PL.４　１～４.住居跡ＳＩ05、５～９.住居跡ＳＩ06

PL.5　1・2.住居跡ＳＩ07、3～8.住居跡ＳＩ08
PL.6　1.土坑ＳＫ01、2.土坑ＳＳＫ01・02、3.土坑ＳＫ03、4.土坑ＳＫ04・05、
5.土坑ＳＫ05、6.土坑ＳＫ07、7.土坑ＳＫ08、8.土坑ＳＫ09
PL.7　1.土坑ＳＫ10　2.土坑ＳＫ07・Ｐ－3～5、7～10、15、17　3.Ｐ－1、2、6　11～14
4.溝ＳＤ01　5.縄文時代の遺物
PL.8　住居跡ＳＩ01出土遺物
PL.9　1.住居跡ＳＩ01出土遺物　2.住居跡ＳＩ01出土遺物
PL.10　1.住居跡ＳＩ04出土遺物
PL.11　1.住居跡ＳＩ05出土遺物　2.住居跡ＳＩ06出土遺物
PL.12　1.住居跡ＳＩ07出土遺物　2.住居跡ＳＩ08出土遺物(1)
PL.13　1.住居跡ＳＩ08出土遺物（2）　2.土坑出土遺物

表目次

Tab.1　上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧
Tab.2　管状土錘計測値（ＳＩ06）
Tab.3　管状土錘計測値（ＳＩ08）
Tab.4　柱穴状遺構計測表
Tab.5　管状土錘計測値（ＳＫ07）
Tab.6　柱穴状遺構計測表
Tab.7　住居跡出土土器観測表

第Ⅰ章　序　　章

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、店舗造成に伴う事前調査である。平成18年１月31日に有限会社東栄建設から常陸大宮市教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無の照会が提出され、それに基づき、市教育委員会は同年２月８日に造成予定地内に試掘調査を実施した。調査はトレンチ方式で、試掘の結果竪穴住居跡８軒、土坑10基、柱穴状遺構10基(以上奈良・平安時代)、溝状遺構１条(中世)が検出され、明らかに古代の集落が所在することが判明した。同年２月16日に茨城県教育委員会との協議により、本調査を実施することとなり、有限会社日考研茨城に調査依頼を行なう。承諾後、常陸大宮市教育委員会・有限会社東栄建設・有限会社日考研茨城は三者協議を行い、確認調査の結果に基づき平成18年５月26日から同年６月27日まで本調査を実施した。

（常陸大宮市教育委員会）

第２節　調査経過とその概要

上ノ宿遺跡の本調査は、平成18年5月26日から同年６月27日まで実施した。確認調査の結果に基づき、開発予定区域全面1,980㎡を調査することとなった。まず重機による表土除去から開始し、遺構確認のための精査を人力により行う。確認調査で把握されていた黒色土の落ち込み部はすべて竪穴住居跡であることが判明し、これら住居跡を中心に丁寧な精査を繰り返した。さらに円形を主体となる土坑をはじめ、溝状遺構、柱穴状遺構(ピット)を検出する。竪穴住居跡は調査区の中央から北側に纏まって８軒検出され、いずれも８世紀代前後に比定され、全体的な集落は北側に展開することが予想された。なお重複住居跡は中央に位置する住居跡ＳＩ03と04のみであるが、一辺２ｍから５ｍ前後と幅があり、出土遺物から判断される構築時期に差が見られるにもかかわらず、主軸方位は逆にほぼ一致することが確認された。これら住居跡群の周辺には切り合い関係のない円形土坑を主体とし、その他楕円形もしくは長方形土坑が検出された。これらのうち土師器および須恵器が出土している土坑が３基確認されて、さらに遺物の出土はないものの円形土坑はいずれも古代に比定できる。覆土の状況から判断していわゆる畑地耕作に伴う小型の「イモ穴」類も確認できた。その他、調査区南西に溝状遺構が１条検出された。しかし、覆土の状況からみて中世以降の境溝ではないかと推定している。また柱穴状遺構のうち、間尺に合う一列の柵列が１条検出されている。覆土の状況から古代と判断した。最後に平坦な高位面でしかも遺構密度の薄い調査区の中心軸にあたる南側と北側の２ヶ所に旧石器文化層を確認するため２ｍ×２ｍのグリッドを設定し深掘調査を実施した。上層であるⅡ層七本桜軽石層、Ⅲ層今市軽石層と表土層から1.40m前後の下層にあたるⅨ層鹿沼軽石層が鍵層となっているが、明確な旧石器文化層を検出できず、基本層序のみの観察となった。21日間の発掘調査の結果、住居跡８軒、古代を中心とする土坑10基、古代の柵列１条、中世の溝状遺構１条、柱穴状遺構(ピット)13基を検出し、調査を完了する。

なお、調査区の設定にあたっては、国家座標を基準とし、調査区北西隅のＸ軸＝60,940m、Ｙ軸＝52,440mの交点を基準点する10m×10mのグリッドを設定し、西から東に向かってＡ～Ｆ、北から南に向かって１～７とし、それぞれの区はＡ－１区のように呼称し、遺構の所在および遺構外出土遺物のすべての地点を明確にすることとした(第１図)。

（小川和博）

第３節　調査日誌

2006年５月26日～６月27日

５・26　本日より調査を開始する。重機による表土層除去開始。東側の表土層除去。

５・29～31　重機による表土層除去作業継続。東側から中央部の表土層除去。さらに遺構検出のため精査を開始し、住居跡を検出する（ＳＩ01～08）。

６・２　遺構調査を開始する。住居跡４軒にセクションベルトを設定し床土除去（ＳＩ01～04）。

６・５　住居跡４軒にセクションベルトを設定し床土除去（ＳＩ05～08）。

６・６　旧石器文化層確認のための深掘調査を開始する。住居跡調査の継続。

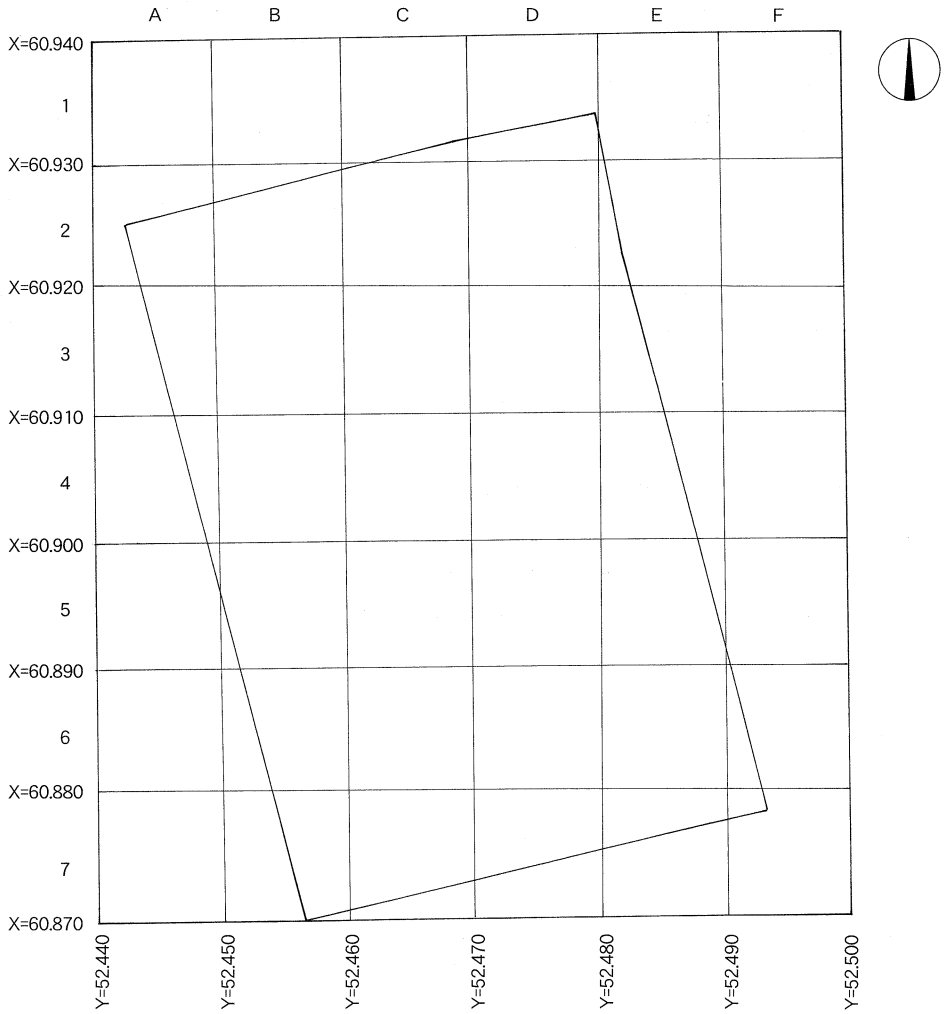
6・7～12　住居跡ＳＩ01～08の土層断面実測作業。
6・13　土坑、ピット調査（ＳＫ01～10・Ｐ01～13)。柵列ＳＡ01の調査。
6・14　住居跡セクションベルト除去作業（ＳＩ01～08)。
6・15～20　住居跡カマド調査（ＳＩ01～08)。
6・21～22　遺構写真撮影（ＳＩ01～06・ＰＧ01)。
6・22　遺構写真撮影（ＳＩ02.07.08・ＳＤ01)。貼床除去作業を開始する（ＳＩ06)。
6・23～24　貼床除去作業（ＳＩ01～06)。
6・27　本日で調査を全て完了する。機材の撤収作業。埋め戻し作業を行う。

（大渕淳志）

第４節　遺跡の位置と周辺遺跡

１．遺跡の位置（第２・３図）

遺跡は、北緯36°33′46″８、東経140°23′24″６の茨城県北部、常陸大宮市下町4015－１に所在する。ここは水郡線常陸大宮駅東わずか600m、旧国道118号線に並行し、市街地の東端に位置する。付近の台地は八溝山系から延びた丘陵の一部が北から西側に突出した洪積世の台地が形成され、東に久慈川、西に那珂川によって大きく分断され、さらに市街地西に流れる玉川によって二分される。遺跡の立地する通称大宮台地は久慈川と玉川に挟まれた南北に細長く延びた舌状台地で、久慈川と玉川が下岩瀬付近で合流することによって収束する。こうした大宮台地は



第１図　グリッド配置図

両河川とその支流によってさらに侵食され複雑な地形を呈している。遺跡は東に流れる久慈川の右岸で、直接影響を受け、より開析された比較的幅広く平坦な台地上に立地していめため、遺跡の範囲が明確に線引きできない。すなわち標高53.5m前後の平坦面が南北800m、東西1500mまで延びており、北は部垂城跡(040)、南は宇留野城跡(038)によって境されるものの、西側は玉川まで達する広さがあり、東端に位置する本遺跡から西側の玉川まで小規模な中富遺跡(062)のわずか１遺跡しか確認されていない。こうした状況のなか本遺跡は南北700m、東西200mという大規模な範囲が遺跡として周知されている。さらに平成15年に発掘調査を実施した「上宿上坪遺跡(094)」とはほぼ同一遺跡と理解してもよいほど遺跡の境は明瞭ではない。なお東側の久慈川低地との比高差は約32.5mを測る。調査前の現況は畑地で、遺跡西側は市街の中心地である。

２．周辺の遺跡（第３図）

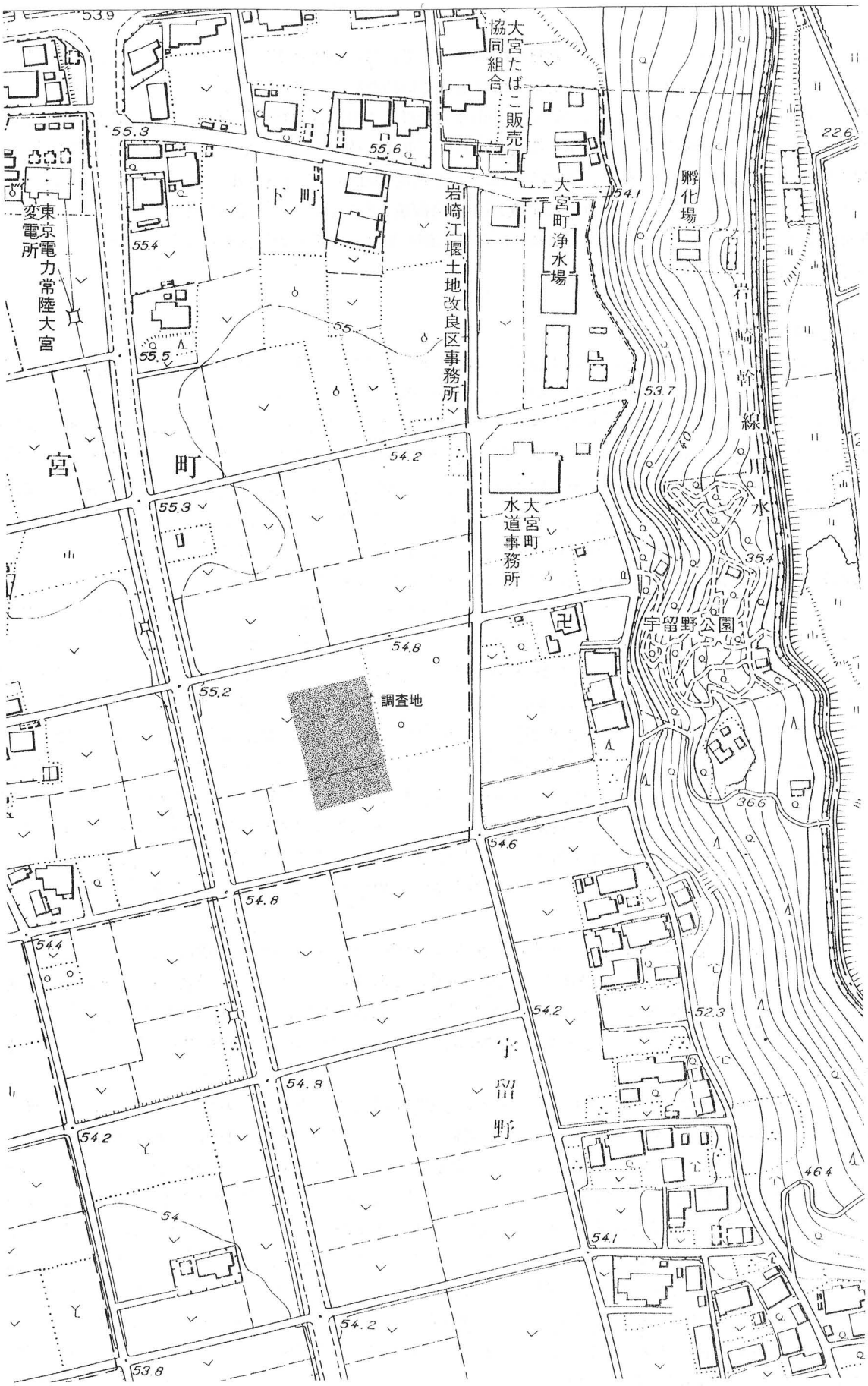
上ノ宿遺跡が立地する常陸大宮市は東に久慈川、西に那珂川と県内を代表する主要河川に挟まれ、さらに中央には玉川が流れ、県北部において水利に恵まれた稀にみる肥沃な環境を呈している。そのため旧石器時代から中近世に至るまで多くの遺跡が周知されており、各時期それぞれ学史的に古くから注目されている遺跡が多いのも特徴である。いま時期ごとに主な遺跡を列挙してみても、旧石器時代の梶巾遺跡、縄文時代の坪井上遺跡、高ノ倉遺跡。弥生時代の小野天神前遺跡、上岩瀬富士山遺跡、小祝梶巾遺跡。古墳時代の下村田一騎山古墳や糠塚古墳。奈良・平安時代の小野源氏平遺跡や鷹巣原遺跡等が知られている。これらはいずれも県内の歴史を語るとき必ず代表的な遺跡のひとつとして挙げられ、しかも全体的にみていずれも数少ない発掘調査によって明らかにされた成果であり、逆にみると市内どの遺跡の調査を実施しても注目度の高い成果が期待できることを示唆している。

さて、ここで本遺跡周辺遺跡の概要について、すでに市教育委員会で報告されている分布調査に基づき簡単に触れていきたい。まず旧石器時代の遺跡については「梶巾遺跡(007)」で調査され、槍先形尖頭器が出土し、「小野天神前遺跡」でも細石核が採集されている。そのほか市内最古といわれている「小野高ノ倉遺跡」および上坪遺跡(033)、鷹巣戸内遺跡(034)が知られている。次ぎの縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺では昭和51、58年に調査された「梶巾遺跡(007)」をはじめ、「諏訪台遺跡(050)」「宮中遺跡(011)」「富士山遺跡(003)」等21遺跡が知られ、また正式な調査は行われていないが、「河井台遺跡(096)」では多量の石鏃が採集されている。そのほか中期の大集落として確認された「坪井上遺跡」「高ノ倉遺跡」があり、縄文早期・中期から弥生時代に営まれた「小野天神前遺跡」は、主となる晩期段階で土偶や亀形土製品をはじめ石剣、石棒、独鈷石等祭祀具が多数出土している。そして当遺跡は県内でも数少ない弥生時代中期前半まで継続され、市内に限らず県内を代表する遺跡のひとつとなっている。そのほか周辺地域では、後期の「富士山遺跡(003)」や「梶巾遺跡(003)」が著名である。以上のほか弥生時代の遺跡は明確ではないものが多い。

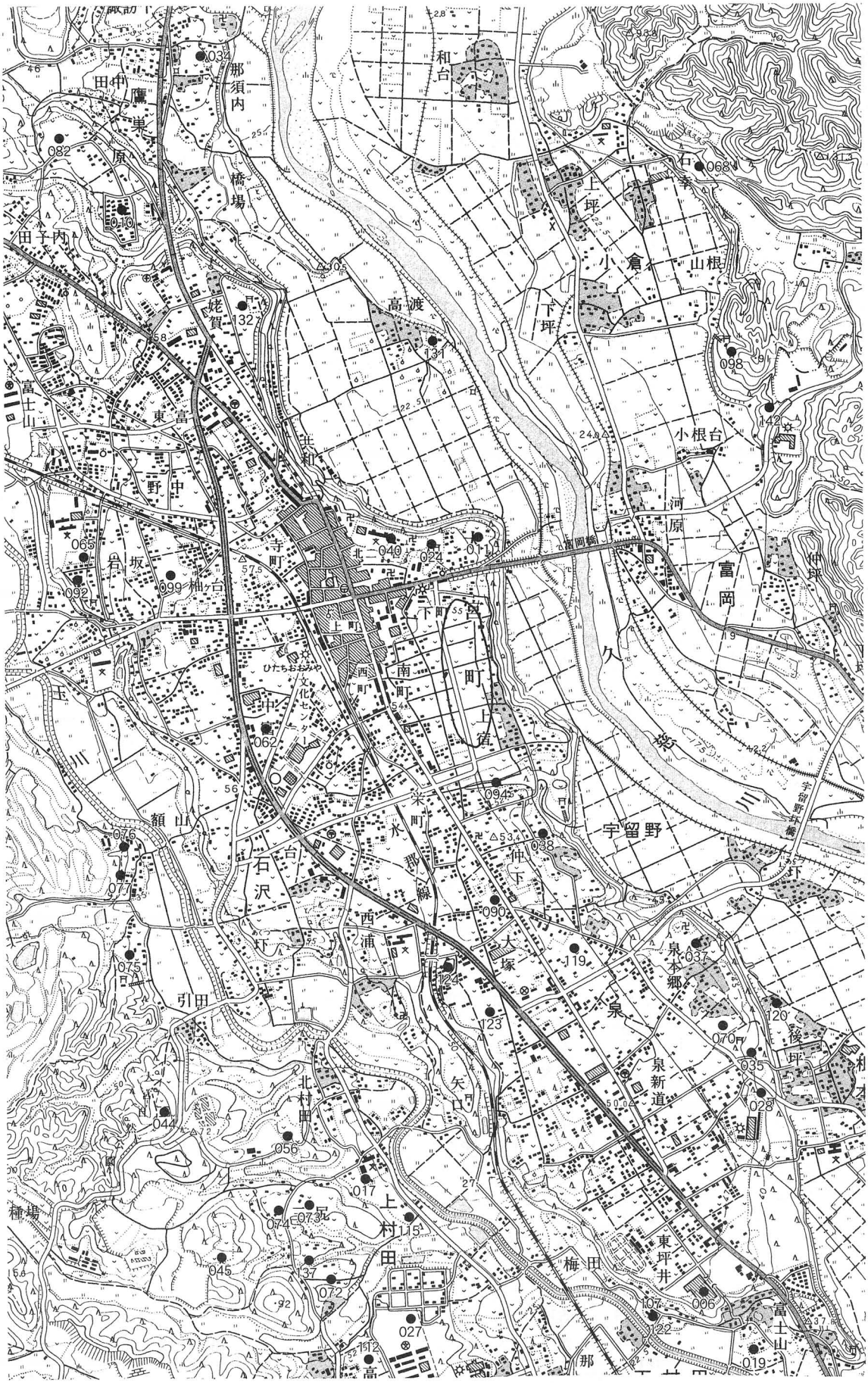
古墳時代では須恵器や形象埴輪を含めた豊富な埴輪の出土が知られている「鷹巣古墳群(023)」のほか、前方後方墳である「富士山４号墳」は墳長38mを測り、県内でも最古の古墳のひとつとして周知されている。また「糠塚古墳(022)」は80mの大形古墳である。また集落跡も数は少ないが報告されている。「梶巾遺跡(007)」では前・中期の住居跡が検出されている。さらに玉川左岸には「雷神山横穴群(091)」と「岩欠横穴群(139)」があり、いずれも５基ずつ確認されている。

次ぎの奈良・平安時代では本遺跡を含め市内の大半の遺跡で確認されており、その数は115遺跡以上にのぼり市内の全体的の実に80％を占めている。そのなかで主要遺跡のひとつが「鷹巣原遺跡(010)」である。８世紀中葉から10世紀にかけて32軒の住居跡が確認されている。さらに隣接して「鷹巣瓦窯跡(042)」が知られており、ここで焼かれた瓦が住居跡のカマド構築材として利用されていた。そのほか最近調査された「上宿上坪遺跡(094)」や「上坪遺跡(033)」でも明確な集落跡として注目されている。これらに本遺跡が加わることで久慈川中流域における８世紀から10世紀にかけての拠点的集落がより鮮明になってきた。最後に中世では城跡として詳細な測量調査を実施した「前小屋城跡(037)」をはじめ「宇留野城跡（038)」や「菅又城跡(100)」が知られているが、平成15年に発掘調査した「上宿上坪遺跡(094)」では宇留野城跡北西側の一郭に位置する集落遺跡であるが、明瞭な郭跡は確認できなかったものの、溝や土坑から古瀬戸の平碗・茶壷、志戸呂の擂鉢、常滑の甕や内耳土器、さらに硯の出土が報告されている。また近世の塚としては「富岡七ツ塚群(142)」確認されている。

（小川和博）



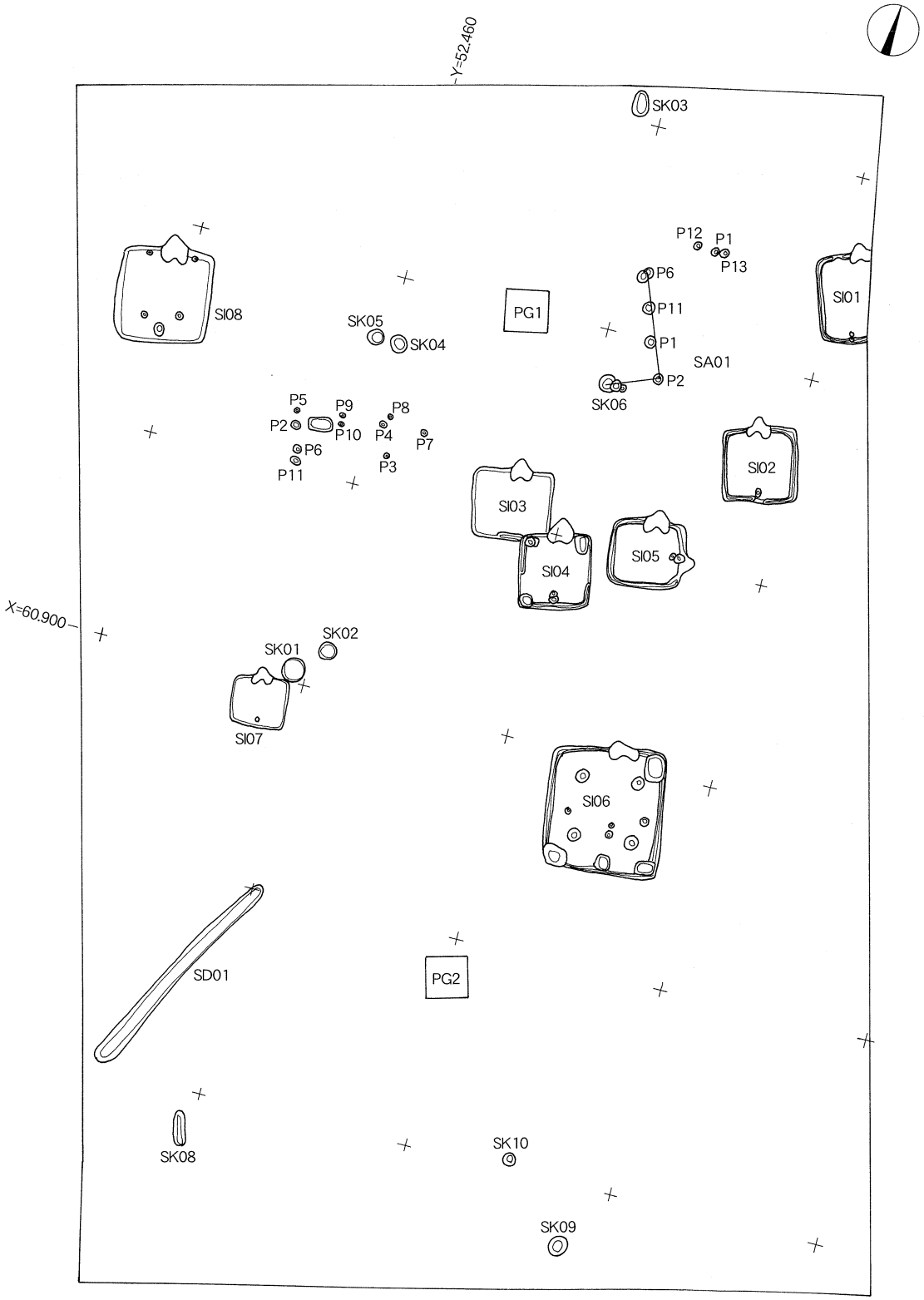
第２図　遺跡周辺地形図（1：2,500）



第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

Tab. 1　上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種　別	時代・時期	備考
117	上ノ宿遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
010	鷹巣原遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	昭和56・59、平成１８年調査
011	宮中遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	平成３年調査
016	引田前遺跡	集落跡	奈良・平安	
017	北村田遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	
019	西坪井遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良・平安	
024	松吟寺古墳	古墳	古墳	
027	一騎山古墳群	古墳群	古墳	昭和48年調査
028	根本古墳群	古墳群	古墳	
034	鷹巣戸内遺跡	集落跡	旧石器、奈良・平安	旧名・鷹巣遺跡
035	根本遺跡	包蔵地	古墳	
037	前小屋館跡	城館跡	奈良・平安、中世	平成12年測量調査
038	宇留野城跡	城館跡	中世	
040	部垂城跡	城館跡	中世	
044	大宮自然公園遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
045	萱峯遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	
056	小中遺跡	集落跡	奈良・平安	
062	中富遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
065	抽ヶ台遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	
068	石幸遺跡	集落跡	奈良・平安	
070	春日神社前遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	
072	前三ケ尻Ａ遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
073	後三ケ尻Ａ遺跡	集落跡	奈良・平安	
074	後三ケ尻Ｂ遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	
075	熊の石遺跡	集落跡	奈良・平安	
076	額山Ａ遺跡	集落跡	奈良・平安	
077	額山Ｂ遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
082	鷹巣原Ｂ遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	
090	大塚遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
092	抽ヶ台古墳	古墳	古墳	
094	上宿上坪遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	平成15年調査
098	山根遺跡	集落跡	不明	
099	見渡遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	
088	馬場先遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	
090	大塚遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
091	雷神山横穴群	横穴群	古墳	５基市指定
092	抽ヶ台古墳	古墳	古墳	
094	上宿上坪遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	平成15年調査
096	河井台遺跡	集落跡	奈良・平安	
097	田子内遺跡	集落跡	奈良・平安	
099	見渡遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	
107	念仏塚	経塚	近世	１基
112	高野Ｂ遺跡	集落跡	奈良・平安	
115	北村田Ｂ遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	
119	駄木所遺跡	集落跡	奈良・平安	
120	泉坂下遺跡	集落跡	弥生	
122	念仏塚遺跡	集落跡	古墳	
123	上高作遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
124	六丁遺跡	集落跡	奈良・平安	
131	高渡遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
132	姥賀東遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	
137	前三ヶ尻Ｂ遺跡	集落跡	奈良・平安	
142	富岡七ツ塚群	塚群	近世	



第４図　上ノ宿遺跡遺構配置図

0　10m
(1/300)

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物

第１節　概要（第４図）

上ノ宿遺跡は南北700m、東西200mという広大な範囲が遺跡として周知されており、東に流れる久慈川の右岸で、標高53.5m前後の平坦面上に立地している。なお、昭和56、59年に隣接する地点が発掘調査され、縄文時代および古代の集落跡が確認されただけではなく、さらに中世では城郭に密接に関連する集落跡として注目されていた遺跡であり、今回の調査でもその集落跡の広がりおよび限界が期待された。しかし、以前調査された地点に隣接しているとはいえ、限られた範囲であったが、ここから奈良・平安時代の竪穴住居跡８軒と柵列１条、古代から近世以降の土坑10基、柱穴状遺構１３本が検出された。現状は畑地であった。

第２節　基本層序（第５図）

今回の調査で、旧石器時代に係る文化層を確認するために、深掘調査を実施した。遺構の希薄である調査区中央北側と南側の２地点に２×２ｍのグリッドを設定して調査した。あいにく明確な旧石器文化層や遺物は検出はできなかったものの、市内の資料蓄積としてローム層の調査を行い、今後の調査の資料に供したい。設定した地点は台地縁辺に近い平坦部である。ここでの鍵層はⅠおよびⅡ層の今市・七本桜軽石層とⅨ層の鹿沼軽石層である。

Ⅰ層　明黄褐色土(10YR7/6)　七本桜軽石層。黄白粒子、赤色粒子を微量に含む。締りがあり、粘性に欠ける。

Ⅱ層　橙色土層(5YR6/8)　今市軽石層。赤褐色粒子、黄白色粒子を微量に含む。締りがあり、粘性はやや弱い。

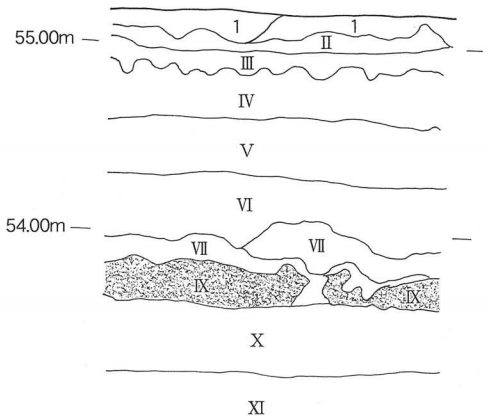
Ⅲ層　にぶい黄橙色軟質ローム層(10YR6/4)　ソフトロームである。軟弱である。層厚は５～15cm前後を測る。締りにやや欠け、粘性は普通である。

Ⅳ層　にぶい黄褐色硬質ローム層(10YR5/4)　やや明るいハードローム層。堅緻で締りがある。層厚は25～32cm前後を測る。

Ⅴ層　にぶい黄褐色硬質ローム層(10YR6/4)　ハードローム層。締りがある。層厚は28～35cmを測る。黒色粒子・白色粒子を少量含む。

Ⅵ層　にぶい黄褐色硬質ローム層(10YR5/3)　全体的に暗いハードローム層で、第２黒色帯に相当するものと思われる。締りがある。層厚は20～38cmを測る。

Ⅶ層　明褐色硬質ローム層(10YR4/6)　上層よりも明るいが全体的に暗いハードローム層。締りがある。層厚は最大28cmを測る。鹿沼パミスを少量、赤色粒子を微量含む。



1　黒色土(10YR2/1)　耕作土
Ⅰ　橙色七本桜軽石層(2.5YR7/8)
Ⅱ　褐色今市軽石層(10YR4/4)
Ⅲ　にぶい黄橙色ローム(10YR6/4)　ソフトローム
Ⅳ　にぶい黄褐色ローム(10YR5/4)　ハードローム
Ⅴ　にぶい黄橙色ローム(10YR6/4)
Ⅵ　にぶい黄褐色ローム(10YR5/3)
Ⅶ　明黄褐色ローム(10YR7/6)
Ⅷ　にぶい黄橙色ローム(10YR6/3)
Ⅸ　黄色鹿沼軽石層(2.5Y8/8)
Ⅹ　暗褐色ローム(10YR3/3)
Ⅺ　褐色ローム(10YR4/4)

第５図　基本層序

0　1m

Ⅷ層　明黄褐色硬質ローム層(10YR4/6)　上層よりも明るいが全体的に暗いハードローム層。締りがある。層厚は最大15cmを測る。鹿沼パミスを多く含む。

Ⅸ層　黄色軽石層(10Y3/3)　鹿沼軽石層。締りがあり、粘性が強い。層厚は25cm前後としっかりした層位を示す。白色粒子を少量含む。

Ⅹ層　暗褐色ローム層(10YR3/3)　締りがあり、粘性が強い。層厚は35cm前後としっかりした層位を示す。白色粒子を少量含む。

Ⅺ層　褐色ローム層(10YR4/4)　締りがあり、粘性が強い。白色粒子を少量含む。

検出された遺構はいずれもⅢ層の上面で確認されている。

(小川和博)

第３節　縄文時代の遺物(第６図)

調査区から小破片であるが縄文土器と石製品として打製石斧と石鏃が検出された。これらはいずれも古代の住居跡および土坑覆土からの出土である。なお。縄文土器は中期後半・加曽利Ｅ式期に比定されることからこれら石製品も中期としてよいであろう。

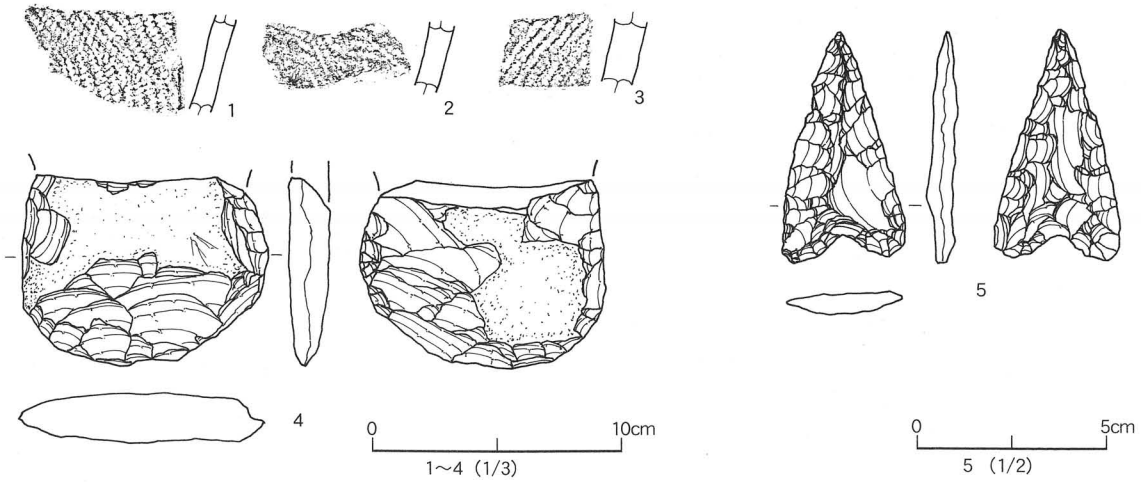
１)縄文土器（第６図１～３）

１～３はいずれも深鉢の胴部破片で縄文施文である。１は単節ＲＬ縄文の縦位回転による施文。胎土に黒色粒子・石英・長石粒を含み、色調は赤橙色(10Ｒ6/8)を呈する。土坑ＳＫ02覆土中より出土。２は単節ＬＲ縄文で斜行回転による施文。胎土に石英・長石粒を含み、色調は灰褐色(7.5ＹＲ6/2)を呈する。土坑ＳＫ09覆土中より出土。３は単節ＲＬ縄文の縦位回転による施文。胎土にチャート・石英・長石粒を含み、色調は浅橙色(7.5ＹＲ8/6)を呈する。土坑ＳＫ10覆土中より出土。いずれも中期終末の加曽利Ｅ３式もしくは加曾利Ｅ４式に比定される。

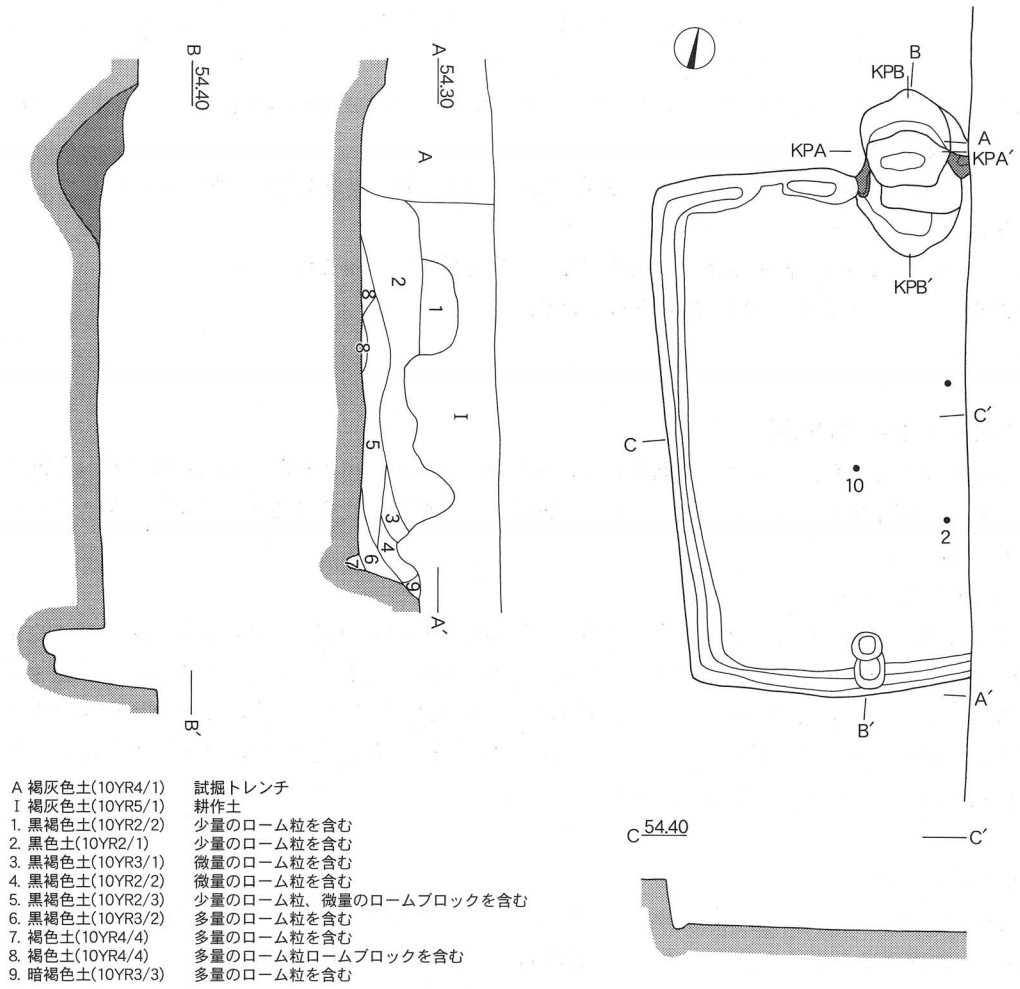
2) 石器（第６図４・５）

４は粘板岩製の打製石斧である。分銅形の半分を欠損している。現存長さ7.173cm、幅9.565cm、厚さ1.927cm、重量181.0gを測る。表面には大きく自然面を残し、刃部側縁のみ調整剥離が施さ、また裏面も自然面がみられ、第一剥離調整痕を大きく残し、やはり刃部作出のための調整剥離が側縁部に集中させている。表土層における表採資料である。

５はチャート製の凹基無茎型の石鏃である。完存品で、大きさは長さ3.074cm、幅1.571cm、厚さ0.296cm、重量1.38gを測る。両側縁はほぼ直線的で、凹基部は半円形状で曲線的な調整が施されている。また表裏面とも細かく丁寧な調整剥離で仕上げているが、表面は平坦であるのに対し、裏面はやや丸みをもつ。住居跡ＳＩ06覆土中より出土している。

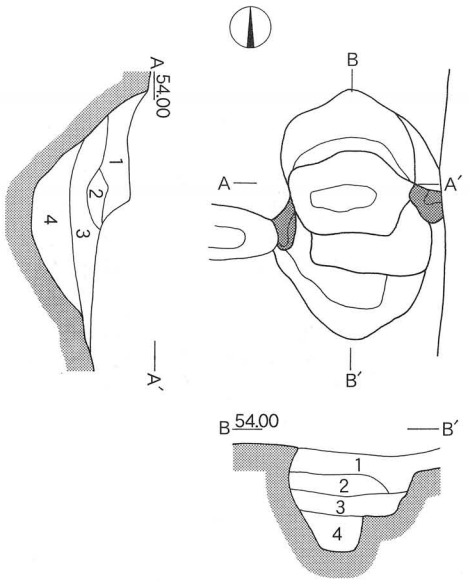


第６図　縄文時代の遺物



A 褐灰色土(10YR4/1)　試掘トレンチ
Ⅰ 褐灰色土(10YR5/1)　耕作土
1. 黒褐色土(10YR2/2)　少量のローム粒を含む
2. 黒色土(10YR2/1)　少量のローム粒を含む
3. 黒褐色土(10YR3/1)　微量のローム粒を含む
4. 黒褐色土(10YR2/2)　微量のローム粒を含む
5. 黒褐色土(10YR2/3)　少量のローム粒、微量のロームブロックを含む
6. 黒褐色土(10YR3/2)　多量のローム粒を含む
7. 褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒を含む
8. 褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒ロームブロックを含む
9. 暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒を含む

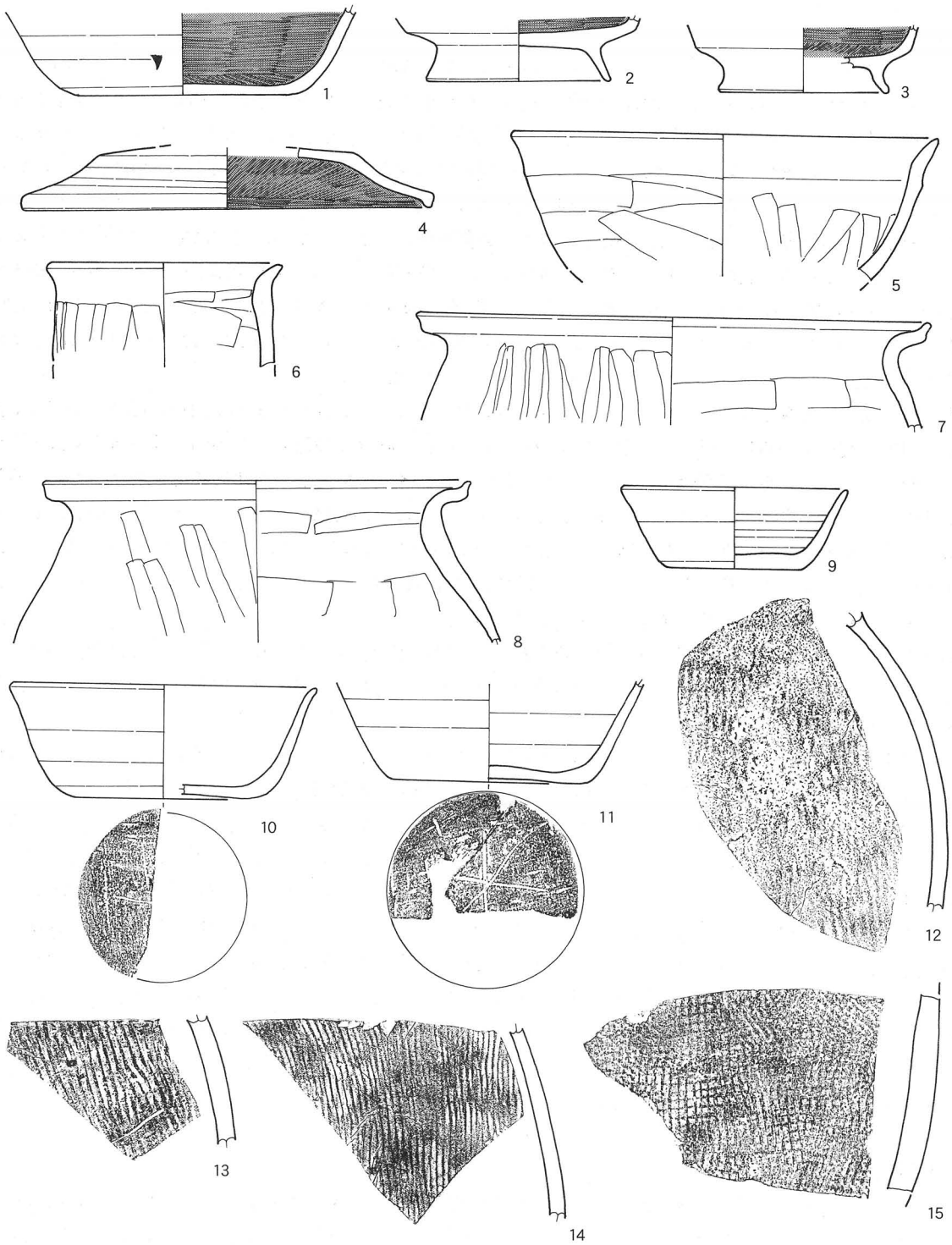
第７図　住居跡ＳＩ01実測図



1. 黒褐色土(10YR2/2)　少量のローム粒、焼土粒、灰色粘土粒を含む
2. にぶい黄色土(2.5Y6/4)　少量のローム粒、多量の灰色粘土粒、少量の焼土粒を含む
3. にぶい褐色土(7.5YR5/4)　少量のローム粒、灰色粘土粒、多量の焼土粒を含む
4. 黒色土(10YR2/1)　多量のローム粒を含む

第８図　住居跡ＳＩ01カマド実測図

0　2m
(1/40)



第９図　住居跡ＳＩ01出土遺物

0　10cm
(1/3)

第４節　竪穴住居跡

1）住居跡ＳＩ01（第７～９図）

調査区の北東側、Ｄ－2、Ｅ－2区に位置する。住居東側は未調査区域に広がっている。立地する標高は53.94～54.13mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長4.17m、検出された東西軸長2.37mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はＮ－14°－Ｗを示す。床面はほぼ平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面はカマド前面から住居の中央部がとくに顕著であった。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は26.0～44.0cmを測る。壁溝は北辺に一部掘削部が欠ける部分がみられるが、検出された西辺および南辺で確認される。規模は上面幅で15.0～28.0cm、深さ3.0～8.0cmの横断面Ｕ字状を呈する。柱穴は梯子穴と思われる南辺際に重複して２本穿ってある。北側Ｐ1は径23.0×23.0cmの円形、深さ45.0cm。南側Ｐ2は径23.0×(22.0)cmの楕円形、深さ39.0cmを測る。覆土は８層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。覆土上層は１層 黒褐色土(10YR2/2)でローム粒を僅かに含む。中層２層 黒色土(10YR2/1)はローム粒を僅かに含む。下層で床面に堆積している５層 黒褐色土(10YR2/3)はローム粒・ロームブロックを僅かに含む。

カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を65.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ132.0cm、検出された両袖間の最大幅97.0cm、袖部溝築材は灰白色粘土で構築されている。火床部は長98.0cm、幅62.0cm、深さ27cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は４層に分層しているが、燃焼部床面には３層にぶい褐色土が堆積し、その上部から煙道部下層にかけて１層黒褐色土が堆積する。なお、火床下層には４層黒色土が堆積しており、埋戻し土層である。

住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されていた。

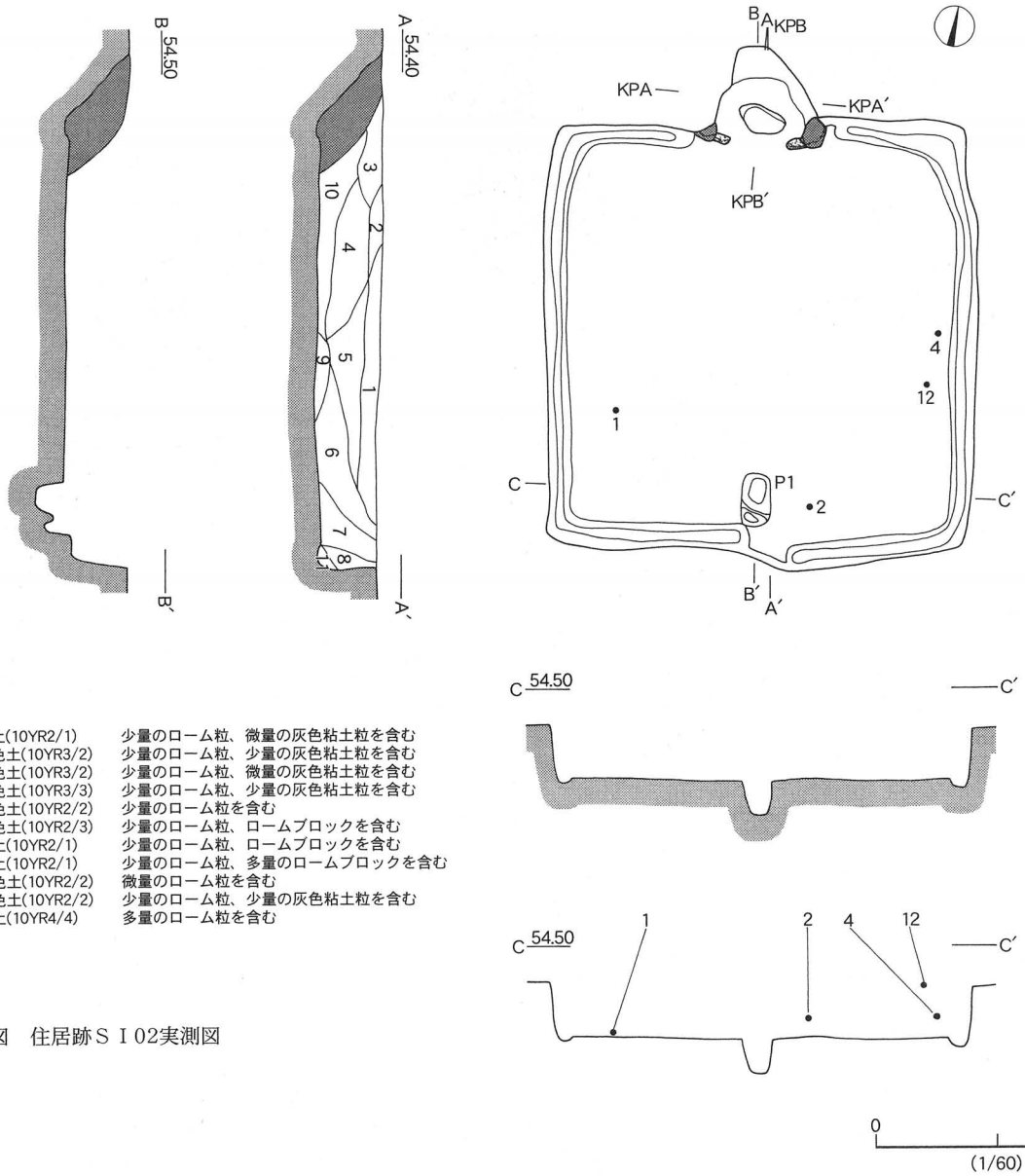
遺物は土師器・坏、高台付坏、蓋、鉢、甕。須恵器・坏、甕が出土している。遺物の出土量は調査面積からみれば全体的に纏まりのある出土を呈している。土師器高台付坏(2)、須恵器坏(9・10)はカマド前面覆土中から、土師器坏(1)、鉢(5)はカマド内で出土している。

１～８は土師器である。１は坏の体部下半部の破片である。ロクロ成形で、底部は二次底部面を有し、二次底部面および底部は回転ヘラケズリである。また内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。外面に判読できないが墨書されている。２・３は高台付坏の高台部の破片。ロクロ成形で、高台は貼付け、内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。４は蓋である。ロクロ成形で天井部は回転ヘラケズリ。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。５は鉢で、外面口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデで調整している。６～８は甕である。６は体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。７・８は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げされている。９～15は須恵器である。９～11は坏。ロクロ成形で、底部はいずれも手持ちヘラケズリ。９は口径10.6cmを測るやや小型の坏である。11はヘラ記号がみられる。12～15は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。12～14は平行タタキ。15は平行タタキにより格子目状を呈する。

これら出土遺物は９世紀前葉に比定される。

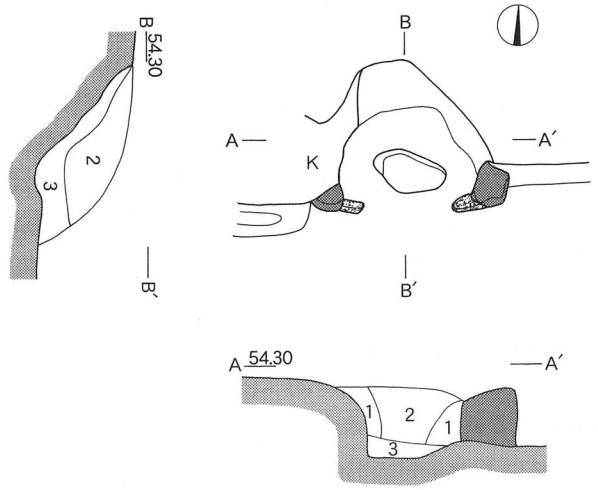
2）住居跡ＳＩ02（第10～12図）

調査区の北東側、Ｄ－3、Ｅ－3区に位置する。立地する標高は54.16～54.24mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長3.65m、東西軸長3.53mを測り、平面形は正方形を呈する。カマドが北側に設置されており、主軸方位はＮ－13°－Ｗを示す。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した明黄褐色土を３cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著であったが、ほぼ全面硬化面が確認できる。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は42.0～57.0cmを測る。壁溝はカマド設置部分および南辺中央出入口部を除き全周する。規模は上面幅で16.0～38.0cm、深さ3.0～6.0cmの横断面Ｕ字状を呈する。柱穴は、南壁際の梯子穴１本で、規模は径41.0×25.0　cmの楕円形、深さ21.0cmを測る。覆土は11層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。覆土上層は１層黒色土(10YR2/2)と２層黒褐色土(10YR3/2)でローム粒を僅かに含む。中層４層暗褐色土(10YR3/3)と５層黒褐色土(10YR2/2)はローム粒を僅かに含む。下層で床面上には６層黒褐色土(10YR2/3)９層黒褐色土



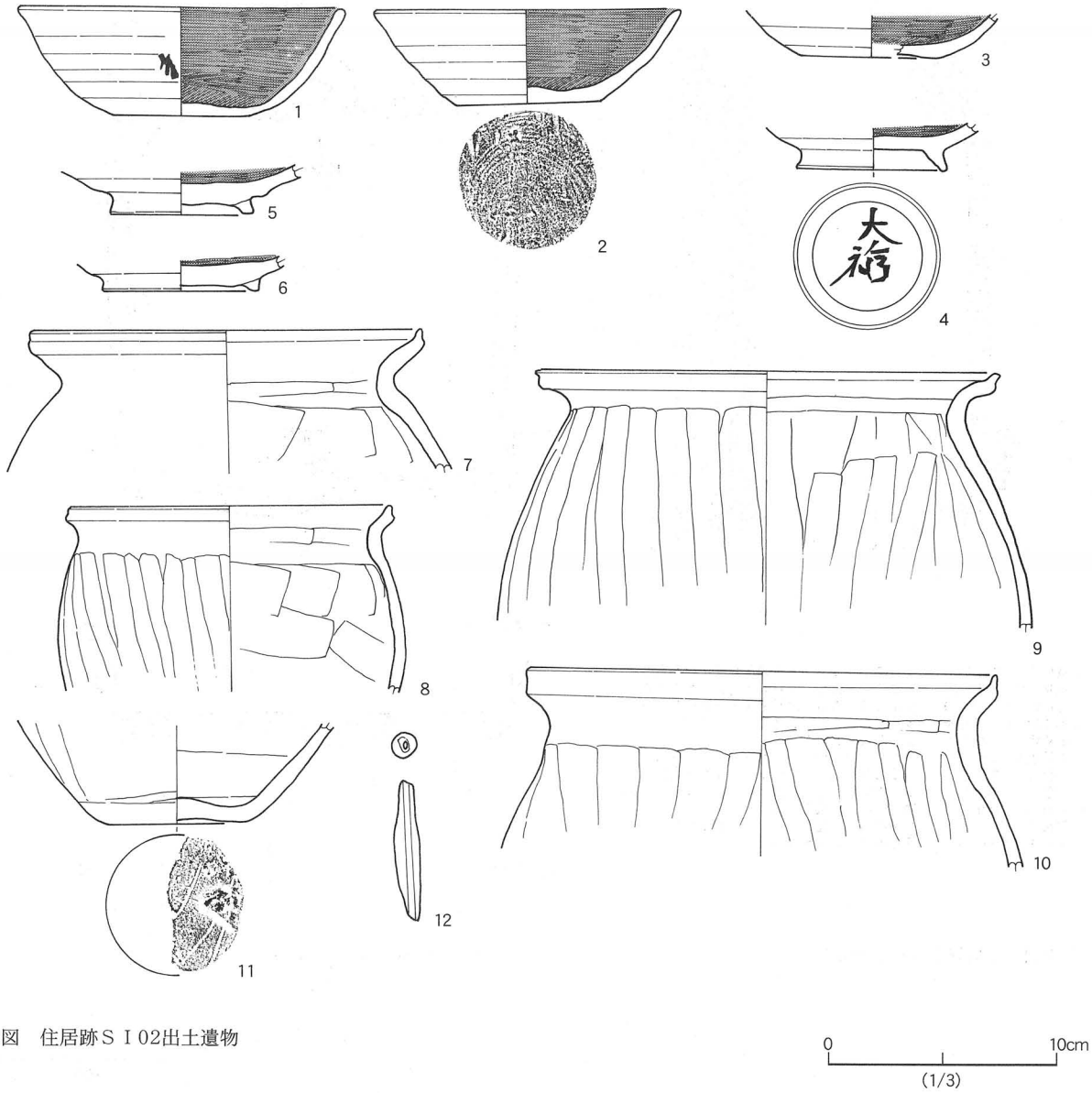
1. 黒色土(10YR2/1)　少量のローム粒、微量の灰色粘土粒を含む
2. 黒褐色土(10YR3/2)　少量のローム粒、少量の灰色粘土粒を含む
3. 黒褐色土(10YR3/2)　少量のローム粒、微量の灰色粘土粒を含む
4. 暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒、少量の灰色粘土粒を含む
5. 黒褐色土(10YR2/2)　少量のローム粒を含む
6. 黒褐色土(10YR2/3)　少量のローム粒、ロームブロックを含む
7. 黒色土(10YR2/1)　少量のローム粒、ロームブロックを含む
8. 黒色土(10YR2/1)　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む
9. 黒褐色土(10YR2/2)　微量のローム粒を含む
10. 黒褐色土(10YR2/2)　少量のローム粒、少量の灰色粘土粒を含む
11. 褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒を含む

第10図　住居跡ＳＩ02実測図



1. にぶい黄色土(2.5Y6/4)　少量のローム粒、焼土粒、多量の灰色粘土粒を含む
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　少量のローム粒、焼土粒、少量の灰色粘土粒を含む
3. 黒褐色土(10YR3/2)　少量のローム粒、焼土粒を含む

第11図　住居跡ＳＩ02カマド実測図



第12図　住居跡ＳＩ02出土遺物

(10YR2/2)、10層黒褐色土(10YR2/2)が堆積している。

カマドは北壁のほぼ中央に設置され、遺存状況はやや良好である。北壁面中央を50.0m半円形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ82.0m、検出された両袖間の最大幅102.0m、袖部溝築材は焚口部に角柱に切り石された凝灰質泥岩(長さ20.0cm、幅8.0cm、高さ15.0cm)を両袖部前面に設置し、補強材として、さらに両袖部には灰白色粘土を用いて構築されている。火床部は長さ55.0cm、幅72.0cm、深さ10.0cmの楕円形を呈し、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は３層に分層しているが、燃焼部床面には３層黒褐色土が堆積し、その上部から煙道部にかけて２層にぶい黄褐色土が堆積する。

住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ３cm前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されていた。

遺物はいずれも土師器で、器種は坏、高台付埦、高台付皿、甕である。その他土製品である管状土錘が出土している。住居南側壁際に万遍なく出土している。大半は床面上もしくは床面直上であり、土師器坏(4)の墨書土器は東壁際中央覆土中、管状土錘(12)も隣接して出土している。

１～３は内黒の土師器・坏。1は口径の比較的大きな坏で、体部は内彎気味に立ち上がる。ロクロ成形。１・２の底部は二次底部面を有し、二次底部面および底部は回転ヘラケズリである。２は回転糸切り。いずれも内面ヘラミガキの後黒色処理が施されている。１の外面に墨書が施されている。判読は不可能である。４は高台付埦の高台部のみの破片。底部は回転ヘラ切り。底面に「大福」と墨書が施されている。５・６は高台付皿である。内面ヘラミガキの後、黒色処理。７～11は土師器・甕である。11の底部を除き、７～10は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。11はやや上げ底気味の底部破片である。外面はヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部に木葉痕を残置している。12は管状土錘である。両端部の一部を欠損している。細長い紡錘状を呈し、現存長さ6.09㎝、最大径1.02㎝、重量5.70ｇを測る。径2.3mmの断面円形を呈する棒を軸にして粘土帯を巻き付け、指頭による成形であるが、手捏状のため滑らかではなく、明瞭な指紋が残置している。胎土に黒色粒子、石英、長石粒を含み、色調は橙色(7.5ＹＲ6/6)である。

これら出土遺物は９世紀後葉に比定される。

3）住居跡ＳＩ03（第13～15図）

調査区の中央、C-３・4区に位置する。住居南東隅で住居跡ＳＩ04によって切られている。立地する標高は54.21～54.26mのほぼ平坦部で、規模は検出された南北軸長3.32m、東西軸長3.78mを測り、平面形は正方形を呈する。カマドは北壁辺中央に設置されており、主軸方位はＮ－1°－Ｗを示す。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した明黄褐色土を３㎝の厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、住居の中央から南部が顕著であったが、ほぼ全面硬化面が確認できる。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は29.0～35.0㎝を測る。壁溝は南辺中央のみ検出され、規模は上面幅で18.0～28.0㎝、深さ6.0㎝の横断面Ｕ字状を呈し、柱穴はなく、無柱穴住居である。覆土は７層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。覆土上層の１層 黒色土(10YR2/2)は床面まで達している。また２層黒褐色土(10YR2/2)および３層黒褐色土(10YR2/2)はローム粒・ロームブロックを僅かに含む。下層4層黒褐色土(10YR3/1)はローム粒子を多量に含み、５層 黒褐色土(10YR3/2)はローム粒・ロームブロックを僅かに含み、6層 黒褐色土(10YR2/2)はローム粒子を僅かに含み、床面上に堆積している。

カマドは北壁辺中央に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を55.0㎝三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ112.0㎝、検出された両袖間の最大幅98.0㎝、袖部溝築材は灰白色粘土で構築されている。火床部は長さ74.0㎝、幅45.0㎝、深さ21.0㎝の楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は4層に分層しているが、燃焼部床面には３層黒褐色土が堆積し、その上部から煙道部下層にかけて４層浅黄色土が堆積する。住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ３㎝前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されていた。

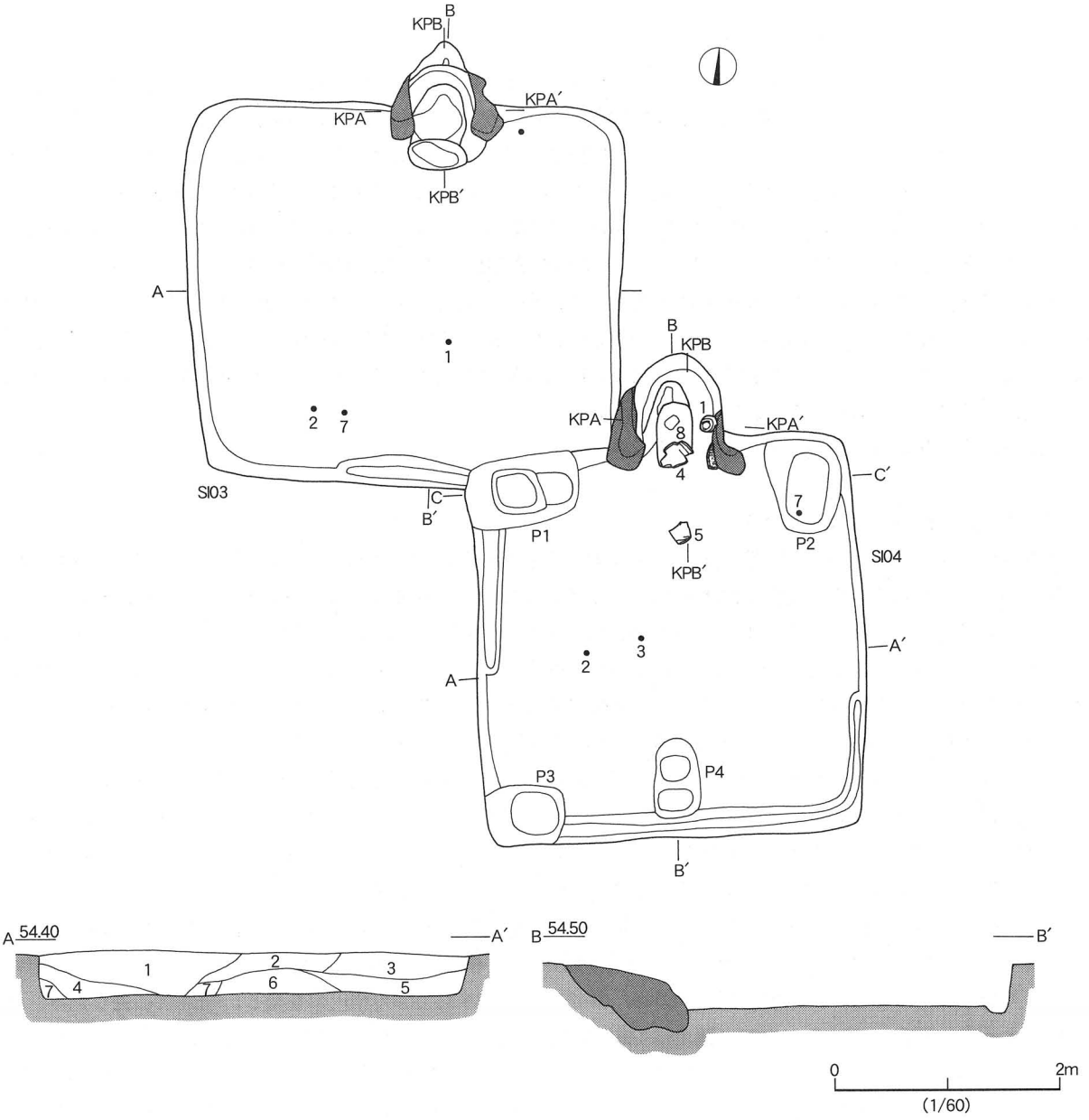
遺物は須恵器のみ図示した。器種は坏、蓋、甕と石製品である紡錘車が出土している。遺物は坏(1)が住居跡中央、蓋(5)がカマド東脇の床面直上より、紡錘車(7)は南壁際の床面上から出土している。

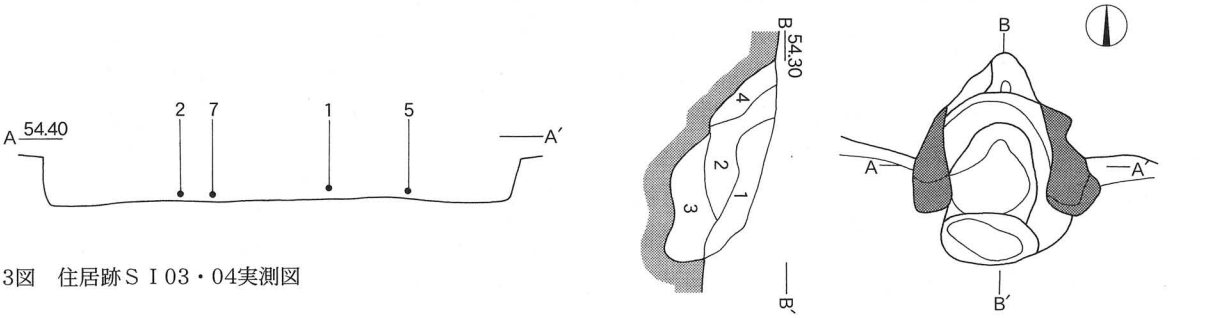
１・２は坏で、ロクロ成形。底部は二次底部面を有し、二次底部面および底部は回転ヘラケズリである。１の底面に十文字状のヘラ記号が施されている。３～５は蓋である。いずれもロクロ成形で、３のツマミは扁平なボタン状で上面中央が僅かに突出し、口縁端部は外側に屈曲する。４は無ツマミ蓋で天井部が回転ヘラケズリで調整され、平坦部でやや高く、外端部は内傾する。６は甕の口縁部破片である。口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。沈線区画内に櫛歯字波状文を施文する。７はは粘板岩製の紡錘車で完存品である。上面径5.35㎝、下面径3.59㎝、孔径0.768㎝、高さ1.683㎝、重量65.0gを測る。上面および下面はほぼ平坦で、側面は断面がやや膨らむカーブを描き、側面には縦位の浅い沈線が６本刻まれ、全体的に丁寧な仕上がりで、上・下面ともに使用痕がみられる。

これら出土遺物は８世紀中葉に比定される。

4）住居跡ＳＩ04（第13・16～18図）

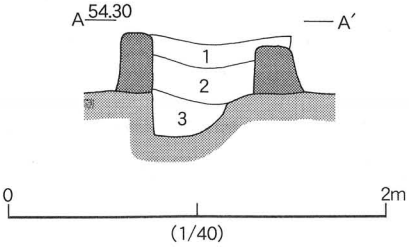
調査区の中央、C－３・4、D－３・4区に位置し、北西隅で住居跡ＳＩ03を切って構築している。立地する標高は54.15～54.23mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長3.53m、東西軸長3.41mを測り、平面形は南北にやや長い長方形を呈する。カマドが北壁辺中央に設置されており、主軸方位はＮ－8°－Ｗを示す。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロ



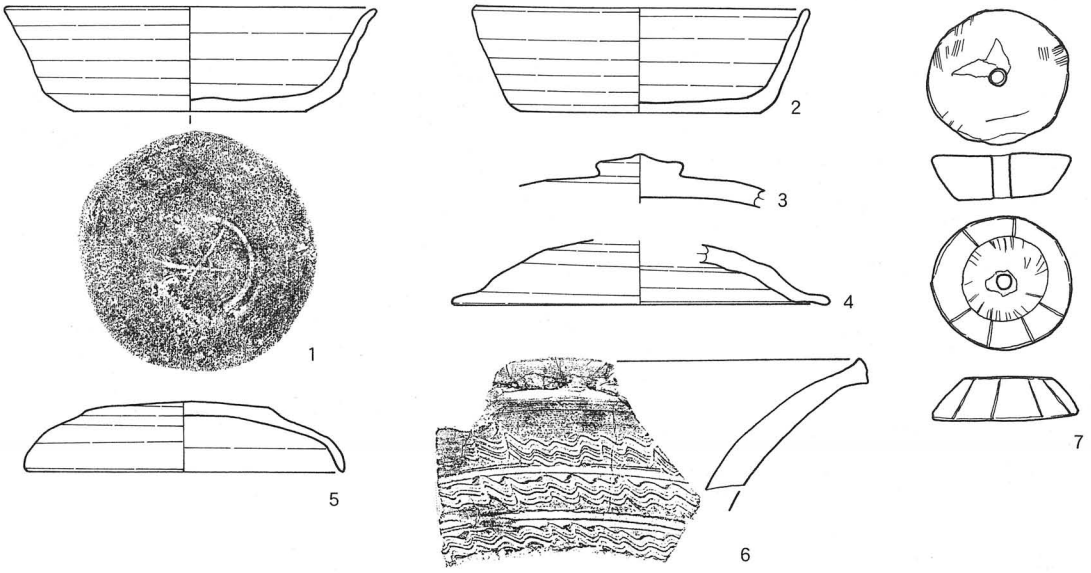


第13図　住居跡ＳＩ03・04実測図

1. 黒褐色土(10YR2/2)　少量のローム粒、灰色粘土粒を含む
2. 褐色土(7.5YR4/6)　少量のローム粒、多量の焼土粒、灰色粘土粒を含む
3. 黒褐色土(10YR2/2)　少量のローム粒、多量の焼土粒、少量の灰色粘土粒を含む
4. 浅黄色土(2.5Y7/4)　少量のローム粒、多量の灰色粘土粒を含む



第14図　住居跡ＳＩ03カマド実測図



第15図　住居跡ＳＩ03出土遺物

0　10cm
(1/3)

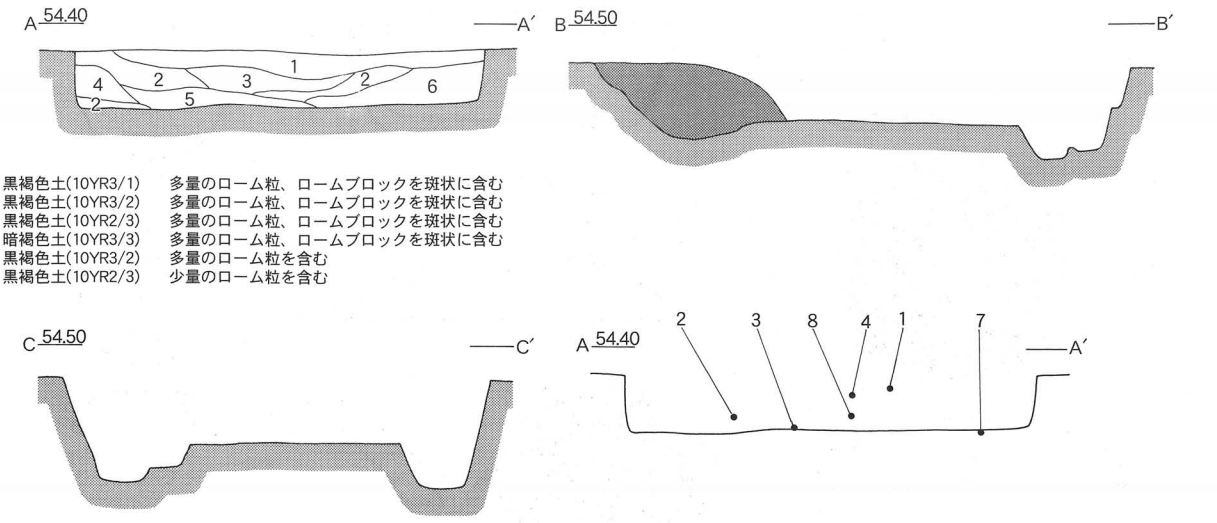
ームブロックを混入した明黄褐色土を２cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著であったが、ほぼ全面硬化面が確認できる。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は29.0～35.0cmを測る。壁溝はカマド設置部分および南辺、西辺南側、東辺南側を除き掘削されている。規模は上面幅で18.0～28.0cm、深さ6.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴を含め４本検出されているが、主柱穴は南東隅を除く各隅に長方形を呈したいわゆる隅柱穴３本である。まず北西隅のＰ１は一辺99.0×60.0cm、深さ53.0cmの東西に長い長方形で、東側に抜き取り痕がみられる。北東隅のＰ２は一辺82.0×62.0cm、深さ49.0cmの南北に長い長方形を呈する。南西隅のＰ３は一辺70.0×53.0cm、深さ46.0cmの東西に長い長方形である。梯子穴Ｐ4は南壁中央に位置し、70.0×40.0cm、深さ49.0cmの南北に長い隅丸長方形を呈する。覆土は６層に分層できるが、各層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む埋戻し土層である。覆土上層は１層 黒褐色土(10YR3/1)でローム粒子・ロームブロックを多量に含む。中層は２層黒褐色土(10YR3/2)および３層黒褐色土(10YR2/3)でローム粒子・ロームブロックを多量に含み、締りにやや欠け、粘性がある。床面上の下層５層 黒褐色土(10YR3/2)はローム粒を多量に含み、6層 黒褐色土(10YR2/3)はローム粒子を僅かに含む。

カマドは北壁のほぼ中央に設置され、遺存状況は良好である。北壁面を79.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ104.0cm、検出された両袖間の最大幅119.0cm、袖部溝築材は灰白色粘土を用い、壁面掘り込み部に貼り付けて構築している。火床部は長75.0cm、幅61.0cm、深さ10.0cmの楕円形の摺鉢状を呈し、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は５層に分層しているが、燃焼部床面には３層黒褐色土が堆積し、その上部から煙道部下層にかけて５層黒褐色土が堆積する。

住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ２cm前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されていた。

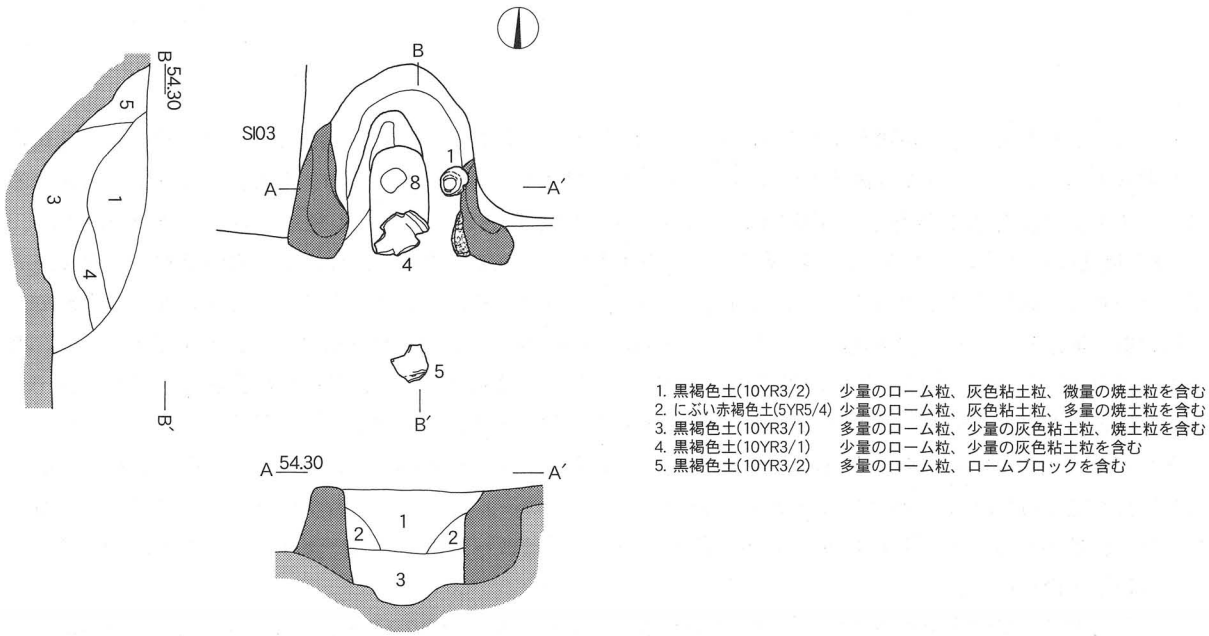
遺物はいずれも土師器で、器種として高台付坏、甕が出土している。高台付坏(2・3)が住居跡中央部、甕(5)はカマド前面の床面上より、また高台付坏(1)、甕(4・8)はカマド内から出土している。

１～３はロクロ成形で、内面ヘラミガキの後黒色処理が施されている。１は外面体部に「少澤」と墨書され、３の底部にも墨書されているが、判読不明である。４～８甕である。いずれも内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。



第16図　住居跡ＳＩ04実測図

0　2m
(1/60)



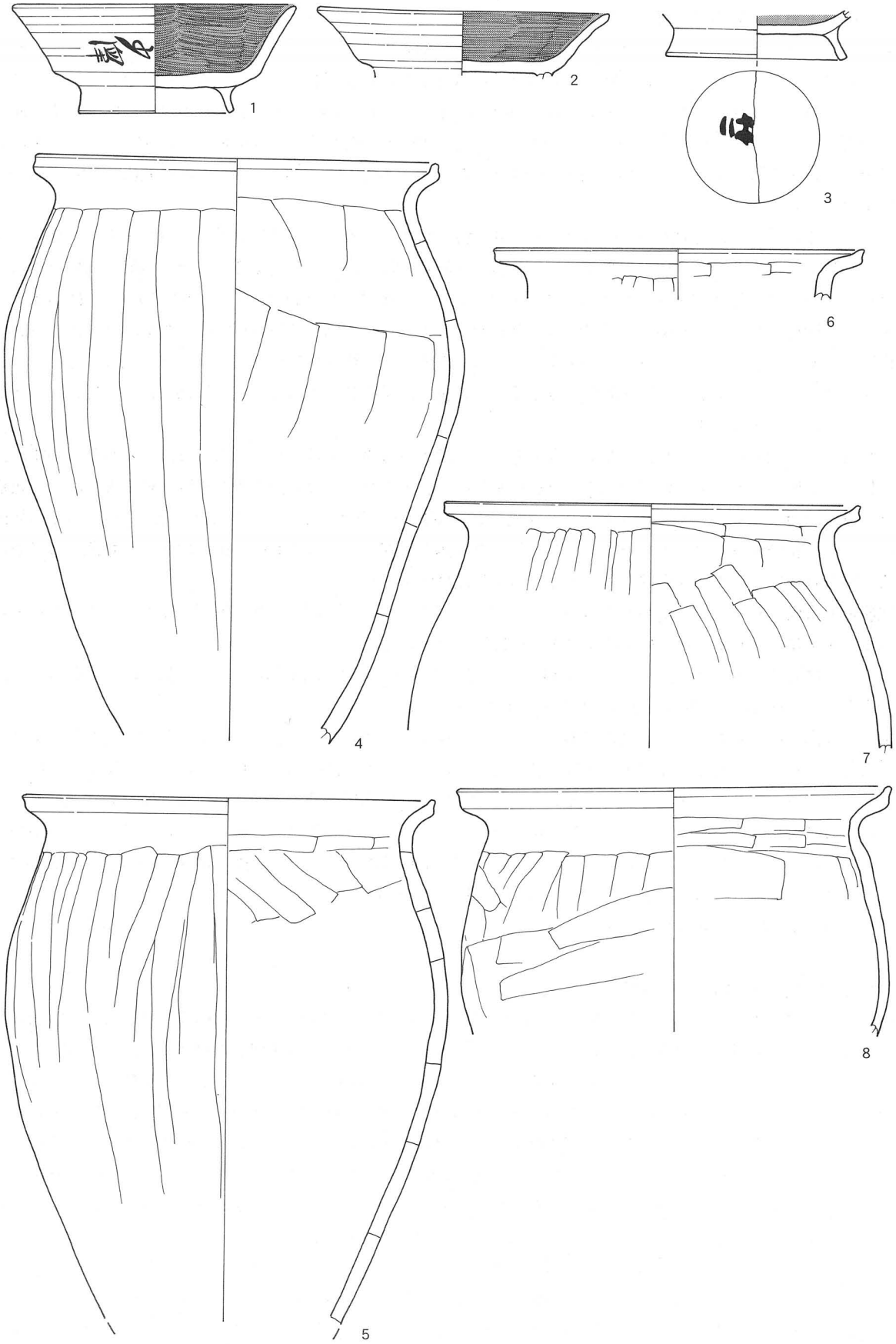
第17図　住居跡ＳＩ04カマド実測図

0　2m
(1/40)

これら出土遺物は９世紀前葉に比定される。

5）住居跡ＳＩ05（第19～21図）

調査区の中央、Ｄ－３・４区に位置する。立地する標高は54.17～54.22mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長3.38m、東西軸長3.45mを測り、平面形は正方形を呈する。カマドは新旧２基検出されており、新期が北壁東寄りに設置されており、新期の主軸方位はＮ－１°－Ｗを示す。また旧カマドは東壁辺南寄りに位置していたが、既に撤去され、掘



第18図　住居跡ＳＩ04出土遺物

0　10cm
(1/3)

形のみ確認できる。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した明黄褐色土を３cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著であったが、ほぼ全面硬化面が確認できる。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は18.0～29.0cmを測る。壁溝は東壁辺および北カマド設置部分を除き、各辺で掘削されており、上面幅で15.0～39.0cm、深さ1.0～10.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴はなく無柱穴住居である。覆土は５層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。。覆土上層は2層の黒褐色土(10YR2/2)と１層黒褐色土(10YR2/3)は床面まで達し、３層黒褐色土(10YR3/1)はローム粒を僅かに含む。下層4層黒褐色土(10YR3/2)もローム粒を僅かに含む。

カマドは北壁辺の新期と東壁辺の旧カマドの２基が検出されているが、すでに旧カマドは撤去され、掘形のみ確認できる。まず北壁辺東寄りの新期カマドは遺存状況が比較的良好である。北壁面を60.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ125.0cm、検出された両袖間の最大幅129.0cm、袖部溝築材は灰白色粘土で構築され、高さ25.0cm、幅20.0cmほどが残存している。火床部は長さ89.0cm、幅96.0cm、深さ26.0cmの不整楕円形を呈し、柱穴状のピットを２ヶ所穿ってある。底面は浅い摺鉢状で被熱による赤化硬化している。カマド覆土は４層に分層しているが、燃焼部床面には２層灰黄褐色土が堆積し、その上部に１層褐灰色土が堆積し、煙道部下層に４層明褐色土が堆積する。

また東壁辺に設置されていた旧カマドは掘形のみで、粘土等の構築材は検出できなかった。しかし、わずかに火床部に相当する掘り込みの底面には被熱による赤化硬化面が認められた。なお掘形の規模は北壁面を22.0cm三角形状に掘り込み、煙道部としていたものであろう。また全体の掘形の規模は長さ65.0cm、幅25.0cm、深さ8.0cmの楕円形を呈し、ピット状の掘り込みがみられる。またこれら掘り込みは埋め戻されており、覆土はそれぞれ焼土粒子を含む貼壁状に塞がれていた。また火床部に相当する床面は堅緻な貼床されていた。

住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ２～４cm前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されていた。

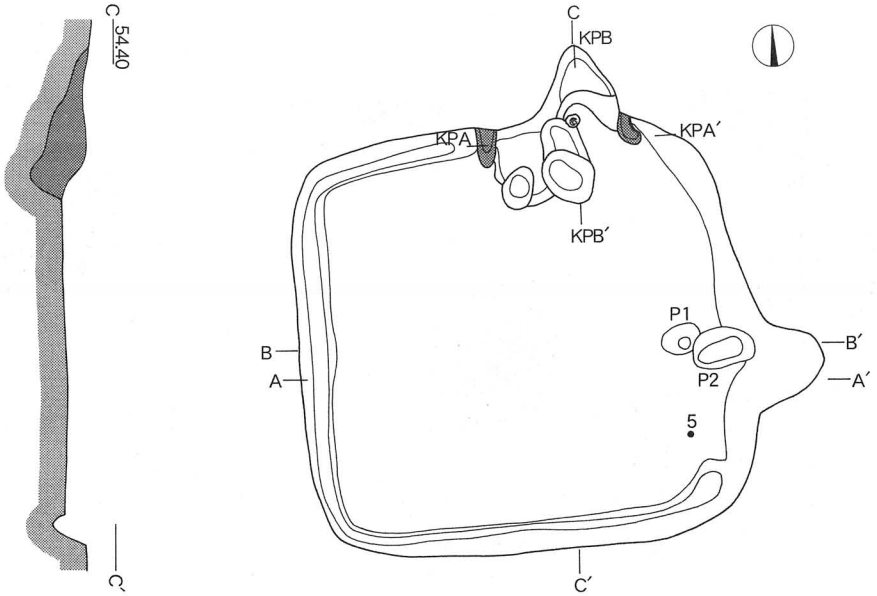
遺物は土師器であり、器種として坏、高台付坏、甕と鉄製品である刀子が出土している。甕(5)は旧カマド南脇の床面直上から、坏(1)、刀子(7)が新カマド内から出土している。

１～３は内黒の土師器・坏。ロクロ成形で、１・２の底部は二次底部面を有し、二次底部面手持ちヘラケズリである。また内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。１・３の底部は回転糸切りである。４は高台付坏の高台部破片。ロクロ成形。高台は削り出しである。５・６は甕で、５は内湾気味の体部から口縁部はくの字状に外反し、６の口縁部は緩く立ち上がる。７は刃先と柄尻部を折損しており、刃先が先細りとなり、また茎部も茎尻部が細くなる刀子で、現存の長さ5.437cm、刃幅0.85cm、背の厚さ0.293cm、茎部幅1.429cm、背の厚さ0.51cm、腹の厚さ0.384cm、現存の重量7.82gを測る。関は刃に付けられているが明瞭ではない。

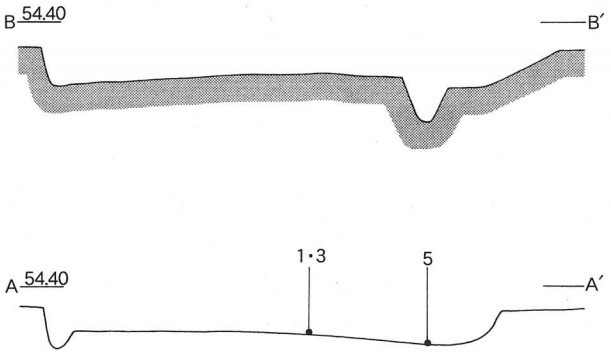
これら出土遺物は９世紀後葉に比定される。

６）住居跡ＳＩ06（第22～25図）

調査区の中央、Ｄ－４・５区に位置する。立地する標高は54.14～54.24mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長5.84m、東西軸長5.56mを測り、平面形は南北にやや長い長方形を呈する。カマドは北壁辺の東寄りに設置されており、主軸方位はＮ－2°－Ｗを示す。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した明黄褐色土を５cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著であったが、全面硬化面が確認できる。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は28.0～43.0cmを測る。壁溝は北東隅および南東隅の一部を除きほぼ全周する。規模は上面幅で15.0～40.0cm、深さ6.0～10.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は８本検出され、主柱穴はＰ１～Ｐ４の住居内柱穴と北西隅を除く三隅部に設置された隅柱穴があり、さらに梯子穴として南壁際に穿ってある。主柱穴Ｐ１～Ｐ４は住居対角線上に設けられている。規模として北西側Ｐ1は径71.0×56.0cm、深さ72.0cmの南北に長い楕円形で、抜き取り痕がみられる。北東側Ｐ2は径64.0×55.0cm、深さ88.0cmの南北にやや長い楕円形。南東側Ｐ3は径76.0×61.0cm、深さ77.0cmの南北にやや長い楕円形。南西側Ｐ4は133.0×104.0cm、深さ36.0cmの南北にやや長い方形。南東隅のＰ６は一辺82.0×55.0cm、深さ41.0cmの東西に長い長方形。南西隅のＰ７は一辺136.0×101.0cm、深さ52.0cmの東西に長い長方形を呈する。梯子穴Ｐ８は南壁中央に位置し、75.0×65.0cm、深さ15.0cmの南北にやや長

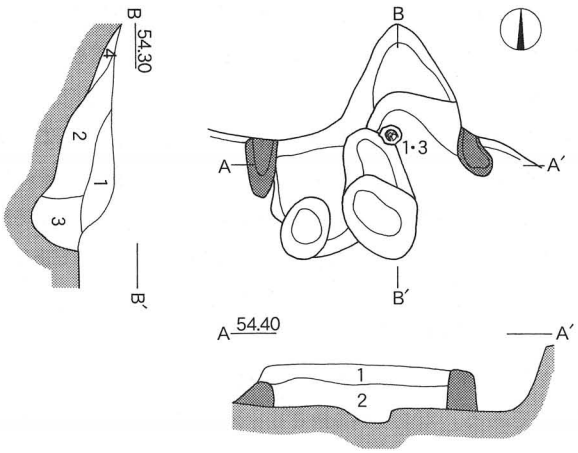


1. 黒褐色土(10YR2/3)　少量のローム粒、ロームブロックを含む
2. 黒褐色土(10YR2/2)　少量のローム粒を含む
3. 黒褐色土(10YR3/1)　少量のローム粒を含む
4. 黒褐色土(10YR3/2)　少量のローム粒を含む
5. 暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒を含む



第19図　住居跡ＳＩ05実測図

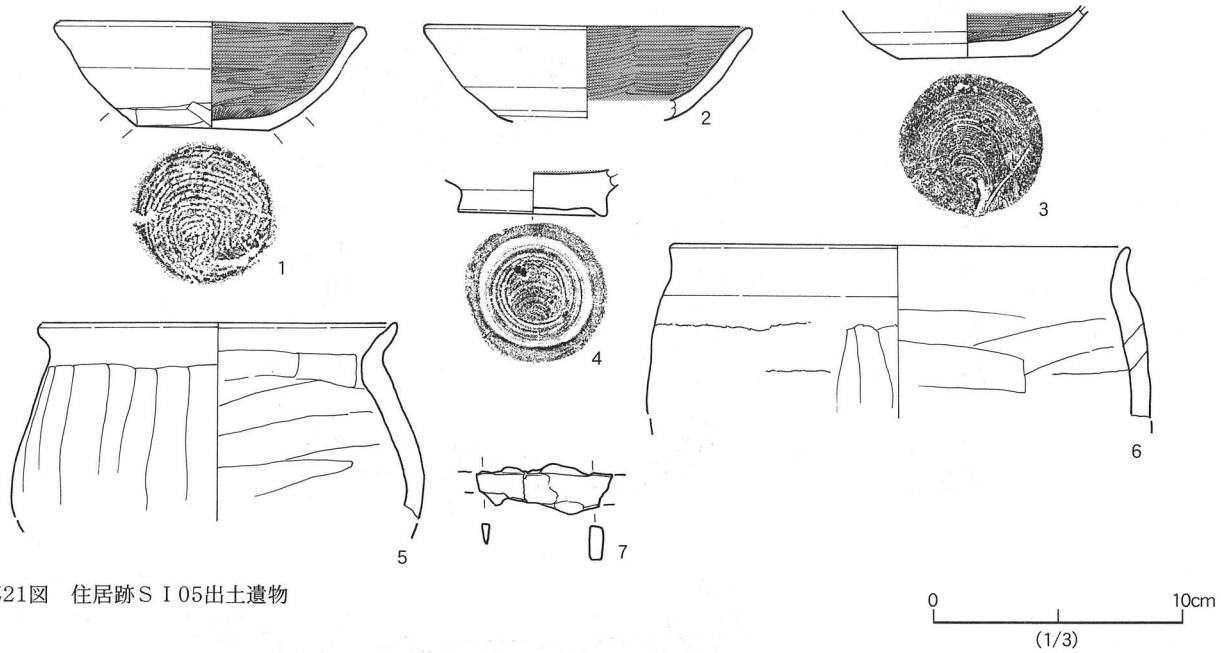
0　2m
(1/60)



1. 褐灰色土(10YR4/1)　少量のローム粒、焼土粒を含む
2. 灰黄褐色土(10YR5/2)　少量のローム粒、焼土粒、灰、粘土粒を含む
3. 黒褐色土(10YR3/1)　少量のローム粒、焼土粒を含む
4. 明褐色土(7.5YR5/8)　多量のローム粒を含む

第20図　住居跡ＳＩ05カマド実測図

0　2m
(1/40)



第21図　住居跡ＳＩ05出土遺物

い隅丸長方形を呈し、底面には２本のピットが穿ってある。北側ピットは径45×28cm、深さ21.0cmの楕円形。南側ピットは 径40×32cm、深さ10.0cmの 楕円形を呈する。この２本のピットは新旧あるものと推定されるが、時期差については不明である。

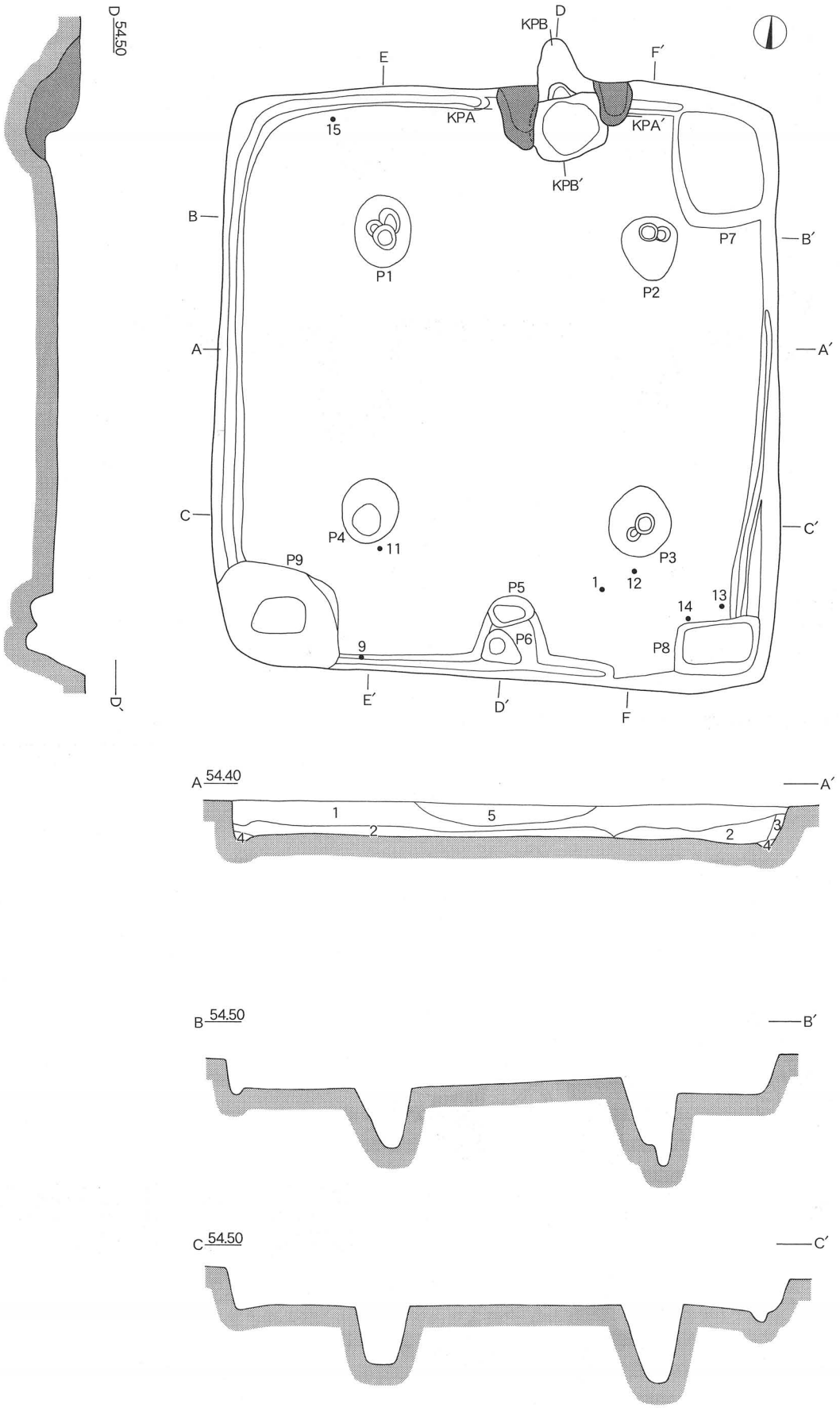
覆土は５層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。。覆土上層は５層 黒褐色土(10YR2/3)でローム粒を僅かに含む。中層１層黒色土(10YR2/1)はローム粒を僅かに含む。下層で床面上には2層 黒褐色土(10YR2/3)が堆積し、ローム粒子を僅かに含む。

カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を43.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ120.0cm、検出された両袖間の最大幅131.0cm、袖部溝築材は灰白色粘土で構築されている。火床部は長さ81.0cm、幅75.0cm、深さ18.0cmの隅丸方形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は５層に分層しているが、燃焼部床面には４層褐色土、その上層に５層黒褐色土が堆積し、その上部から煙道部下層にかけて３層暗褐色土が堆積する。

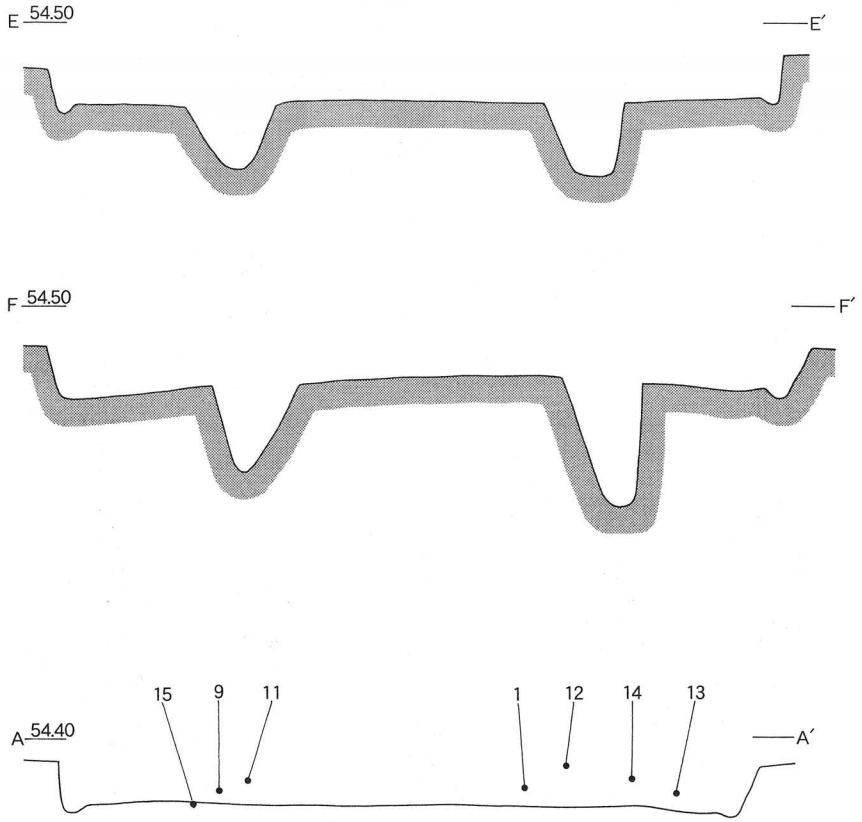
住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されていた。

遺物は土師器と須恵器があり、土師器器種は小型鉢、甕。須恵器は坏、蓋である。その他土製品である管状土錘４点と鉄製品である刀子が１点出土している。カマド出土の土師器甕(4)を除き、壁際の床面上に散在し、管状土錘は南側主柱穴および南東隅柱穴脇から、刀子は北西隅の床面直上である。

１は土師器・小型鉢である。巻き上げ成形で、内面整形がやや粗い。底部に木葉痕を残置している。２～５は土師器・甕である。２は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。３の口縁部は緩く外反する。４・５は底部破片で、いずれも木葉痕を残置している。６・７は須恵器・坏の底部破片である。ロクロ成形で、６の底部は二次底部面を有し、二次底部面および底部は回転ヘラケズリである。８～10は須恵器・蓋である。８はツマミ部破片。扁平のボタン状を呈し、中央上面が突出している。９・10はツマミを欠損し、端部は短く内傾している。11～14は管状土錘で４点出土している。11は端部の一部を欠損しているものの12と伴に完存品、13・14は一方を半分近く欠損している。いずれも細長い紡錘状を呈し、断面円形を呈する棒を軸にして粘土帯を巻き付け、指頭による成形であるが、器面の磨耗が目立ち外面は滑らかである。なお11は長さ6.82cmを測り、本遺跡出土の土錘のなかで最も長い細長形を呈する。胎土は11に海綿骨針、12・13には金雲母が含有している。各土錘の計測

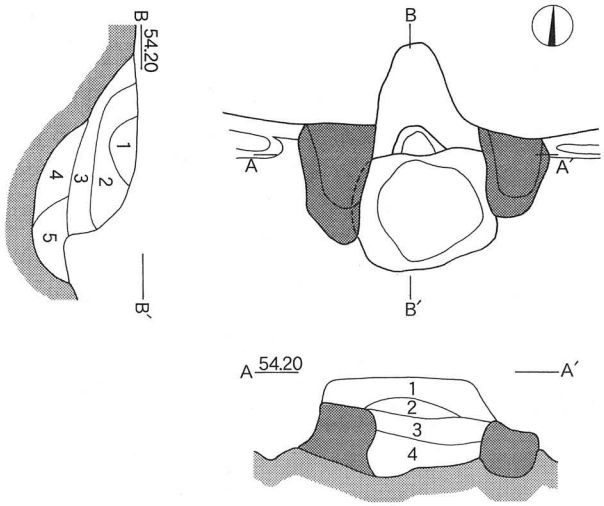


第22図　住居跡ＳＩ06実測図（1）



第23図　住居跡ＳＩ06実測図（2）

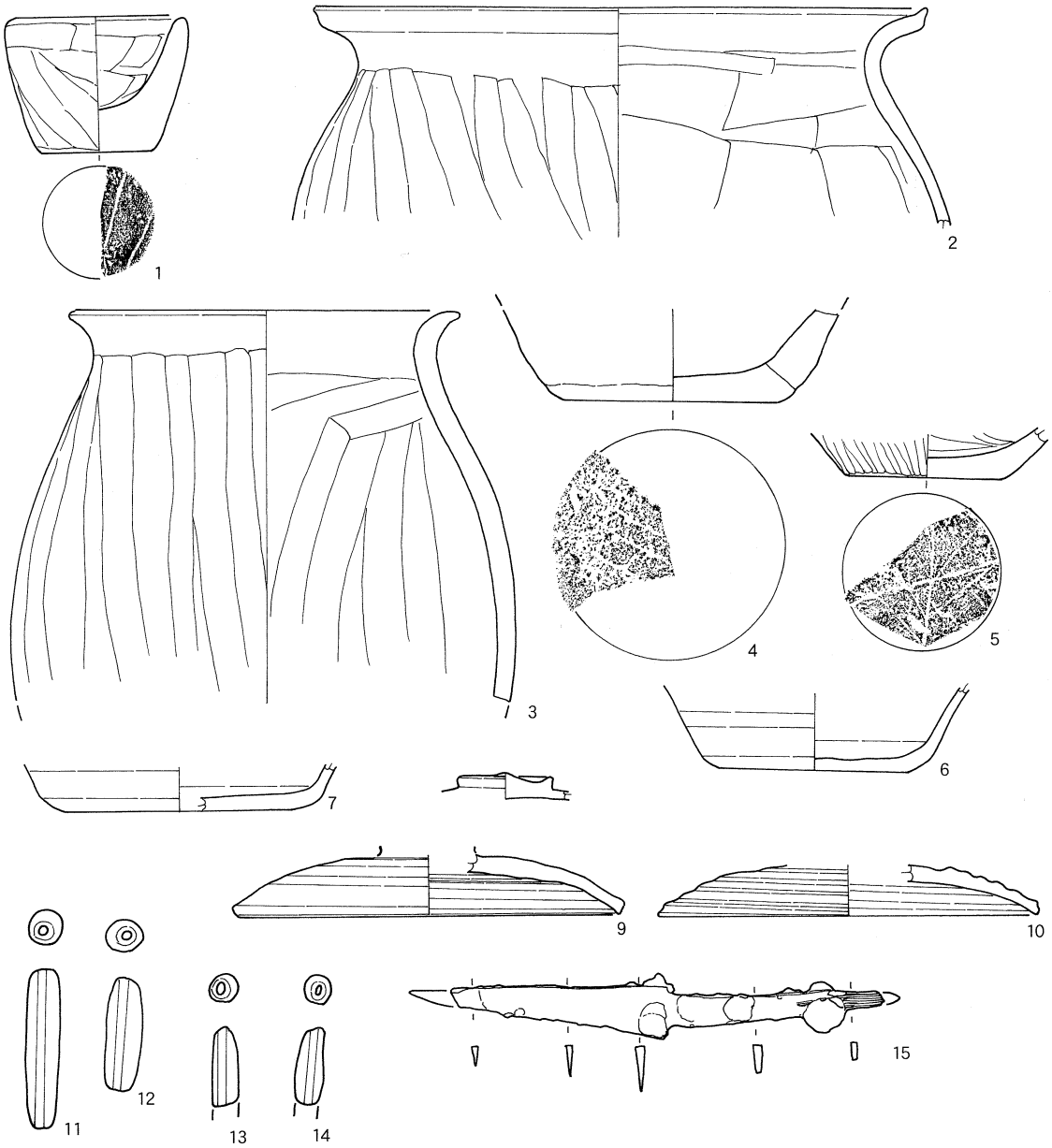
0　2m
(1/60)



1. 黒褐色土(10YR3/1)　少量のローム粒、多量の灰色粘土粒を含む
2. 褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒、多量の灰色粘土粒、焼土粒を含む
3. 暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒、多量の焼土粒を含む
4. 褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒、少量の焼土粒を含む
5. 黒褐色土(10YR3/2)　多量のローム粒を含む

第24図　住居跡ＳＩ06カマド実測図

0　2m
(1/40)

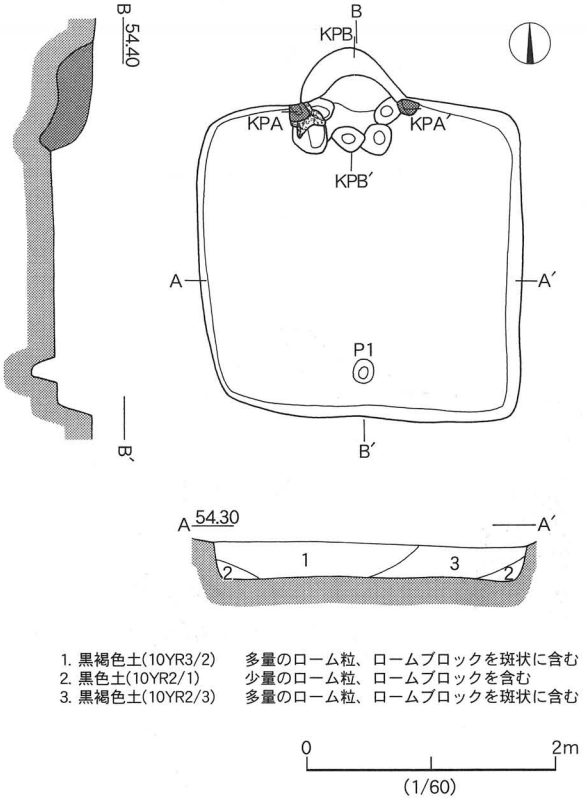


第25図　住居跡ＳＩ06出土遺物

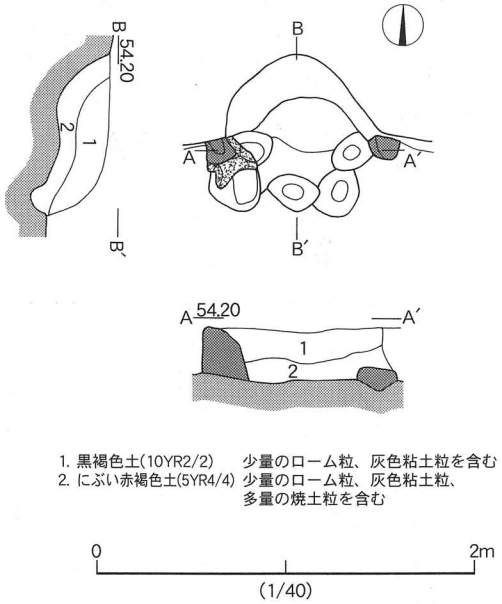
0　10cm
(1/3)

値については下記のとおりである。15は鉄製品・刀子である。銹化がかなり進んでおり形状が明瞭でない部位もみられるが、刃先と柄尻部をわずかに欠損するもののほぼ完存品に近い良品である。刃先が先細りとなり、また茎部も茎尻部が細くなる刀子で、現存の長さ18.35cm、刃先幅0.902cm、刃幅の最大幅となる刃尻幅2.294cm、背の厚さは刃先0.29cm、刃尻0.41cmである。茎部も最大幅1.422cm、背の厚さ最大0.94cm、腹の厚さ最大0.275cm、茎尻幅0.764cm茎尻背の厚さ0.273cm、同腹の厚さ0.273cm、現存の重量36.88gを測る。関は背・刃それぞれ直角に付けられている。

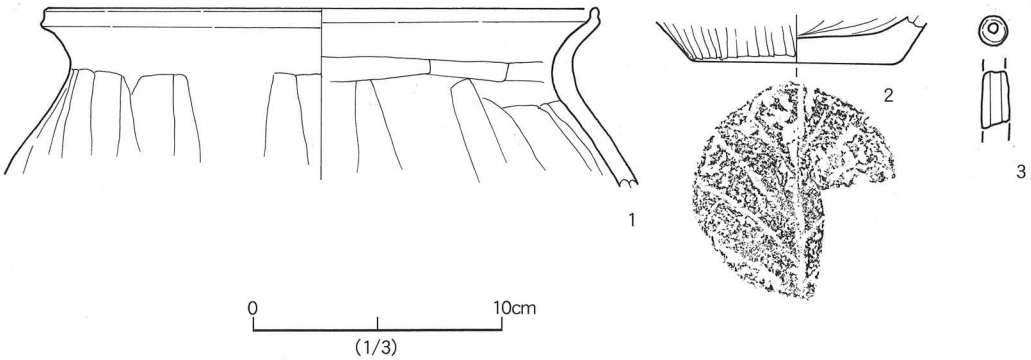
時期は出土遺物から判断して８世紀中葉に比定される。



第26図　住居跡ＳＩ07実測図



第27図　住居跡ＳＩ07カマド実測図



第28図　住居跡ＳＩ07出土遺物

Tab. 2　管状土錘計測値（ＳＩ06）

挿図番号	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	胎土
11	6.82	1.42	1.84	12.86	にぶい黄橙色10YR7/2	海綿骨針・石英・長石
12	4.88	1.47	1.38	7.50	灰白色2.5Y8/2	雲母・石英・長石
13	(3.41)	1.21	4.03	3.96	灰白色2.5Y8/2	雲母・石英・長石
14	(3.36)	(1.19)	3.65	3.56	淡黄色5Y8/3	石英・長石

7）住居跡ＳＩ07（第26～28図）

調査区の西側、Ｂ－４・5区に位置する。立地する標高は54.15～54.18mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長2.51m、東西軸長2.56mを測り、平面形は正方形を呈する。カマドは北壁辺やや西寄りに設置されており、主軸方位はＮ－3°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した明黄褐色土を３cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著であったが、ほぼ全面硬化面が確認できる。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は27.0cmを測る。壁溝は検出できなかった。柱穴は南壁際中央に梯子穴１本が穿ってある。大きさは径18.0×15.0cmの円形で、深さ19.0cmを測る。覆土は３層に分層でき、覆土中の２層が多量のローム粒子・ロームブロックを含む埋戻し土層である。まず覆土上層１層 黒褐色土(10YR3/2)はローム粒子・ロームブロックを多量に含み、締りにやや欠ける。３層黒褐色土(10YR2/3)も同様にローム粒子・ロームブロックを多量に含む。なお壁際の２層黒色土(10YR2/1)は自然堆積層である。

カマドは北壁辺やや西寄りに設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を41.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ82.0cm、検出された両袖間の最大幅103.0cmを測る。袖部溝築材は灰白色粘土で構築されている。火床部は長さ60.0cm、幅60.0cm、深さ16.0cmの不正形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は２層に分層しているが、燃焼部床面には２層にぶい赤褐色土が堆積し、その上部には１層黒褐色土が堆積する。

住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ３cm前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されている。

遺物は土師器・甕と土製品である管状土錘が１点出土している。いずれもカマド内の出土である。

１・２は土師器・甕である。１は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。２は底部破片で、底部に木葉痕が残置している。３は管状土錘の欠損品である。上端部の一部と下端部の大半を欠損している。細長い紡錘状を呈し、現存長さ2.33cm、最大径1.11cm、重量2.0ｇを測る。径3.87mmの断面円形を呈する棒を軸にして粘土帯を巻き付け、指頭による成形であるが、器面の磨耗が目立ち外面は滑らかである。胎土に海綿骨針、石英、長石粒を含み、色調はにぶい黄橙色(10ＹＲ7/3)である。

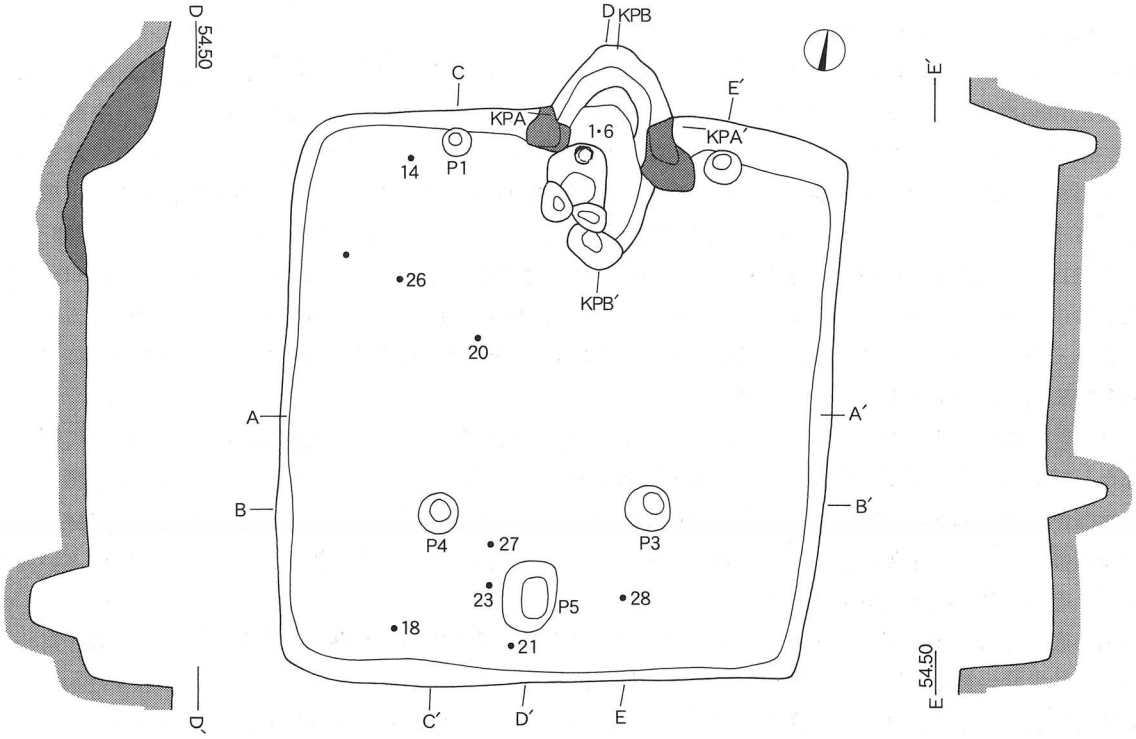
出土遺物から判断して８世紀後半から９世紀前葉に比定される。

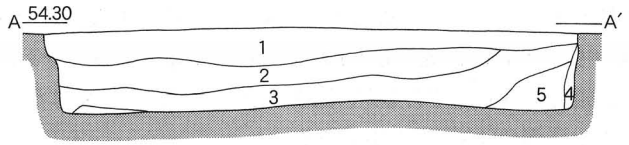
8）住居跡ＳＩ08（第29～31図）

調査区の北西側、Ａ－3、Ｂ－3区に位置する。立地する標高は54.22～54.30mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長4.55m、東西軸長4.37mを測り、平面形は正方形を呈する。カマドは北壁中央に設置されており、主軸方位はＮ－2°－Ｗを示す。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した明黄褐色土を３cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著であったが、ほぼ全面硬化面が確認できる。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は57.0～70.0cmを測る。壁溝は検出できなかった。柱穴は主柱穴と梯子穴の５本検出され、主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本である。北側主柱穴は北壁に接し、ちょうどカマドを挟むように２本穿ってある。まず北西側のＰ1は径23.0×21.0cmの円形で、深さ55.0cm。北東側のＰ2は径30.0×26.0cm、深さ36.0cmの円形を呈する。南側の２本は壁から離れ一般的な位置に設置されており、南東側のＰ３は径36.0×35.0cmの円形で深さ48.0cm。南西側のＰ４は径31.0×31.0cmの円形で、深さは52.0cmである。また南壁際の梯子穴Ｐ5は一辺55×42cmの南北に長い隅丸長方形を呈し、深さ41.0cmを測る。

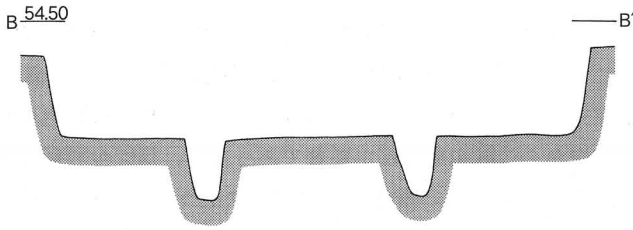
覆土は５層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。覆土上層は１層 黒褐色土(10YR3/1)でローム粒・ロームブロック・焼土粒を僅かに含む。中層２層黒色土(10YR2/1)はローム粒・ロームブロック・焼土粒を僅かに含む。下層で床面上には３層 黒褐色土(10YR2/2)が堆積し、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒を僅かに含む。

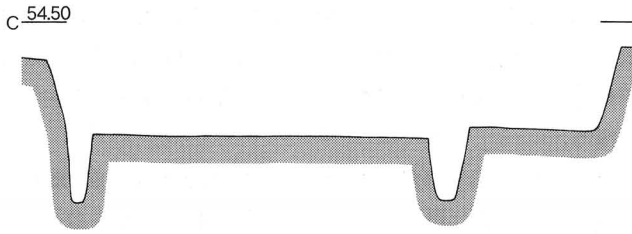
カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を55.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ178.0cm、検出された両袖間の最大幅77.0cmを測り、袖部溝築材は灰白色粘土で構築されている。火床部は長さ130.0cm、幅75.0cm、深さ15.0cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は４層に分層しているが、燃焼部床面には４層褐色土、その上層に３層褐色土が堆積し、その上部から煙道部下層にかけて２層黒褐色土が堆積する。

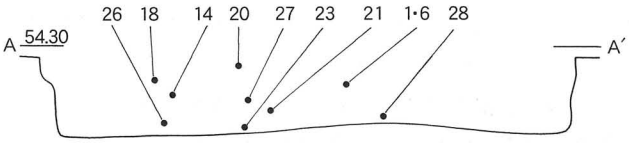




1. 黒褐色土(10YR3/1)　少量のローム粒、微量のロームブロック、焼土粒を含む
2. 黒色土(10YR2/1)　少量のローム粒、微量のロームブロック、焼土粒を含む
3. 黒色土(10YR2/2)　少量のローム粒、微量のロームブロック、焼土粒を含む
4. 黄褐色土(10YR5/6)　多量のローム粒、ロームブロックを含む
5. 黒褐色土(10YR2/3)　少量のローム粒を含む

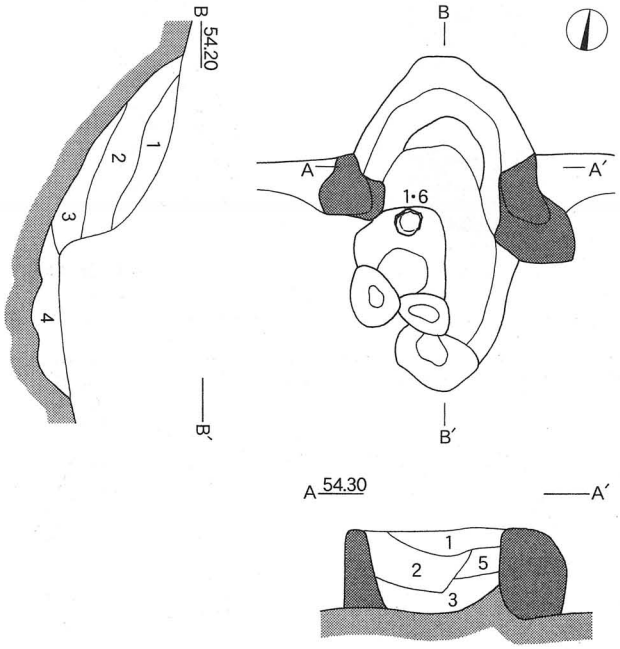






第29図　住居跡ＳＩ08実測図

0　2m
(1/60)



1. にぶい黄色土(2.5Y6/4) 少量のローム粒、多量の灰色粘土粒を含む
2. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒、多量の灰色粘土粒を含む
3. 褐色土(10YR4/4) 少量のローム粒、多量の焼土粒を含む
4. 褐色土(10YR4/6) 少量のローム粒、多量の焼土粒を含む
5. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒を含む

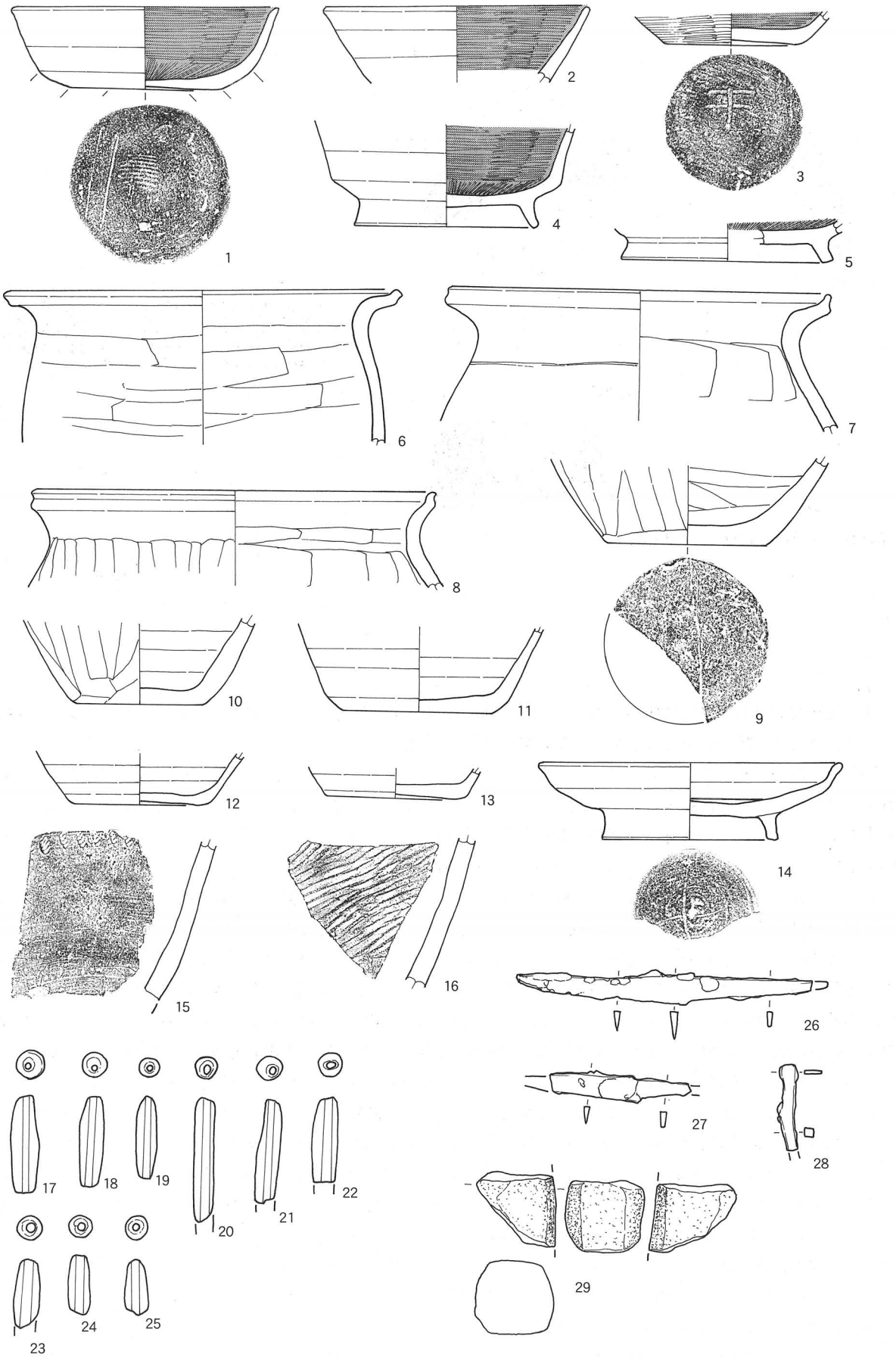
第30図　住居跡ＳＩ08カマド実測図

0　2m
(1/40)

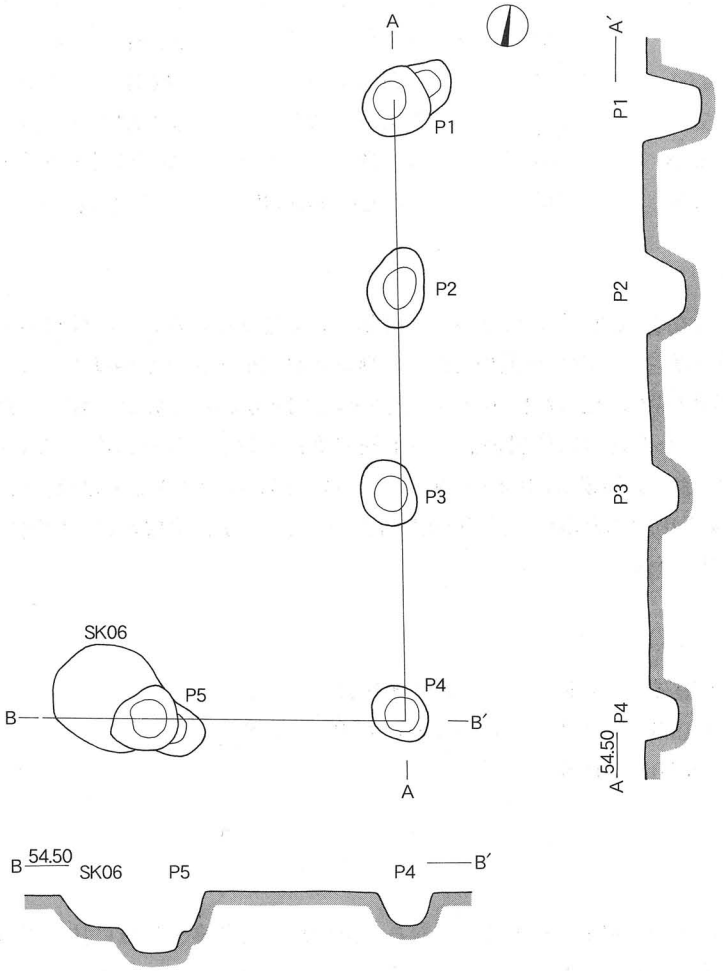
住居掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削しており、ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を覆い構築されていた。

遺物は土師器・坏、高台付坏、甕。須恵器・坏、盤、甕と土製品である管状土錘が９点、鉄製品である刀子２点、釘１点。石製品である砥石１点が出土している。遺物は住居内に万遍なく出土している。須恵器盤(14)はカマド西脇の床面上から、管状土錘は住居跡西側に散在的に、刀子(26)は住居北西側と刀子(27)は南壁際に、砥石も刀子(27)に隣接していた。また土師器坏(1)、甕(6)はカマド内から出土している。

１～３は内黒の土師器坏である。１の底部は二次底部面を有し、二次底部面は回転ヘラケズリで、底部は静止糸切りの後、周縁を手持ちヘラケズリで調整する。３の底部は二次底部面を有し、二次底部面および底部はヘラミガキであり、底部に「キ」字状のヘラ記号をもつ。４・５は内黒の土師器・高台付坏。ロクロ成形で、高台はハの字状に開き、体部は外傾して立ち上がる。６～10は土師器・甕である。６～８は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。９・10は底部破片で、9は底部に木葉痕が残置している。11～13は須恵器・坏。ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り。７は外面体部基部が回転ヘラケズリ。底部回転ヘラ切りの後一部手持ちヘラケズリ、ヘラナデ。14は盤である。高台はハの字状に開き、体部は大きく開き、口縁部は外傾して立て上がる。底部に「十」字状のヘラ記号。15・16は須恵器・甕の胴部破片。15は櫛歯状工具による刺突文が左に傾いて施されている。また16は平行タタキにより器面調整を施している。17～25は管状土錘で９点出土している。17～19は完存品、20～23は一方を欠損している。いずれも細長い紡錘状を呈し、断面円形を呈する棒を軸にして粘土帯を巻き付け、指頭による成形であるが、器面の磨耗が目立ち外面は比較的滑らかである。なお17・21・24・25には指頭痕がみら、17・18は端部に面取りされている。大きさについてはバラつきがあり、19は本遺跡出土では最も小形である。また胎土は海綿骨針を含有しているものが多く、17・19・20・22～24で確認されている。また計測値については下記のとおりである。26・27は鉄製の刀子である。26は銹化がかなり進んでおり形状が明瞭でない部位もみられるが、柄尻部をわずかに欠損するもののほぼ完存品に近い。刃先が先細りとなり、また茎部も茎尻部が細くなる刀子で、現存の長さ15.31cm、刃先幅1.172cm、刃幅が最大となる刃尻幅1.60cm、背の厚さは0.397cmである。茎部も最大幅1.169



第31図　住居跡ＳＩ08出土遺物



第32図　柵列ＳＡ01実測図

cm、背の厚さ0.369cm、腹の厚さ0.232cm、重量23.88gを測る。関は背・刃それぞれ直角に付けられている。27は刃先と柄尻部を折損しており、刃先が先細りとなり、また茎部も茎尻部が細くなる刀子で、現存の長さ7.55cm、刃先幅1.08cm、背の厚さ0.37cmである。茎部も最大幅0.897cm、背の厚さ0.404cm、腹の厚さ0.303cm、現存の重量7.98gを測る。関は背・刃それぞれ直角に付けられている。28は鉄製の釘で途中折損している。現存長4.496cm、軸部の断面は方形を呈し、最大0.57×0.52cm、重量4.66gである。頭部は扁平に延ばしているが、それほど叩かれた形跡がない。29は砂岩製の砥石である。大きく欠損しており、長方体の自然石を利用している。現存長3.74cm、幅4.295cm、厚さ4.112cm、重量80.1ｇを測る。平面形は表面が平坦で長方形を呈し、断面形は隅丸方形である。表面と両側面の3面に研磨面がみられ、いずれの砥面も丁寧に研磨されている。

時期は出土遺物から判断して８世紀後葉に比定される。

Tab.3　管状土錘計測値（ＳＩ08）

挿図番号	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	胎土
第31図17	4.02	1.44	3.12	9.02	淡黄色2.5Y8/3	海綿骨針・石英・長石
18	4.68	1.29	2.94	6.64	淡黄色2.5Y8/3	黒色粒子・石英・長石
19	4.34	1.94	2.79	3.32	浅黄橙色10YR8/3	海綿骨針・石英・長石

20	(6.54)	1.12	4.94	6.52	浅黄橙色10YR8/4	海綿骨針・石英・長石
21	(5.61)	1.31	4.53	6.02	淡黄色2.5Y8/3	黒色粒子・石英・長石
22	(4.54)	1.24	4.01	5.140	淡黄色2.5Y8/3	海綿骨針・石英・長石
23	(3.57)	1.22	5.51	3.36	褐灰色7.5Y6/1	海綿骨針・石英・長石
24	(3.01)	1.13	4.13	2.76	灰白色2.5Y8/2	海綿骨針・石英・長石
25	(2.86)	1.21	3.74	2.96	灰白色10YR8/2	石英・長石

第５節　柵列ＳＡ01（第32図）

調査区の北東側Ｄ－３区に位置し、立地する標高は54.20mを測る。南北方向に延びた柱穴列で、間尺の合った明瞭な配列構造をもつことから当初掘立柱建物跡として調査を進めたが、西側および北側の柱列が明確ではないため柵列とした。なお、南西側に位置する土坑ＳＫ06内に柱穴が検出され、当遺構と関連があるものと理解し、Ｐ５として直角に曲がる柵列を想定した。また確認された柱穴は住居跡群との主軸方位と一致し、Ｎ－13°－ＷＥを指す。柱通りは整然とし、柱間が1.8－1.7－1.5mであり、規模は5.35mを測る。また柱の形状は円形もしくは楕円形を呈し、抜き取り痕がみられるＰ１・５が深く、他は20cm代と浅い。遺物の出土はみられないが、位置および周囲の住居跡から判断して８世紀後半から９世紀代と推定される。

Tab.4　柱穴計測値（単位cm）

	長径×短径	深さ		長径×短径	深さ		長径×短径	深さ
P1	75.0×50.0	42.0	P2	63.0×45.0	28.3	P3	55.0×43.0	21.8
P4	48.0×41.0	22.5	P5	70.0×47.0	46.5			

第６節　土坑（第33～35図）

１）土坑ＳＫ01（第33図）

調査区の西側Ｂ－４区に位置し、立地する標高は54.11～54.20mを測る。南西側で住居跡ＳＩ01に接している。平面形は確認面で長径1.20m、短径1.06mを測り、東西にやや長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大15.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は西側が深いがほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、覆土の締りの状況から判断して古代と推定する。

２）土坑ＳＫ02（第６・33図）

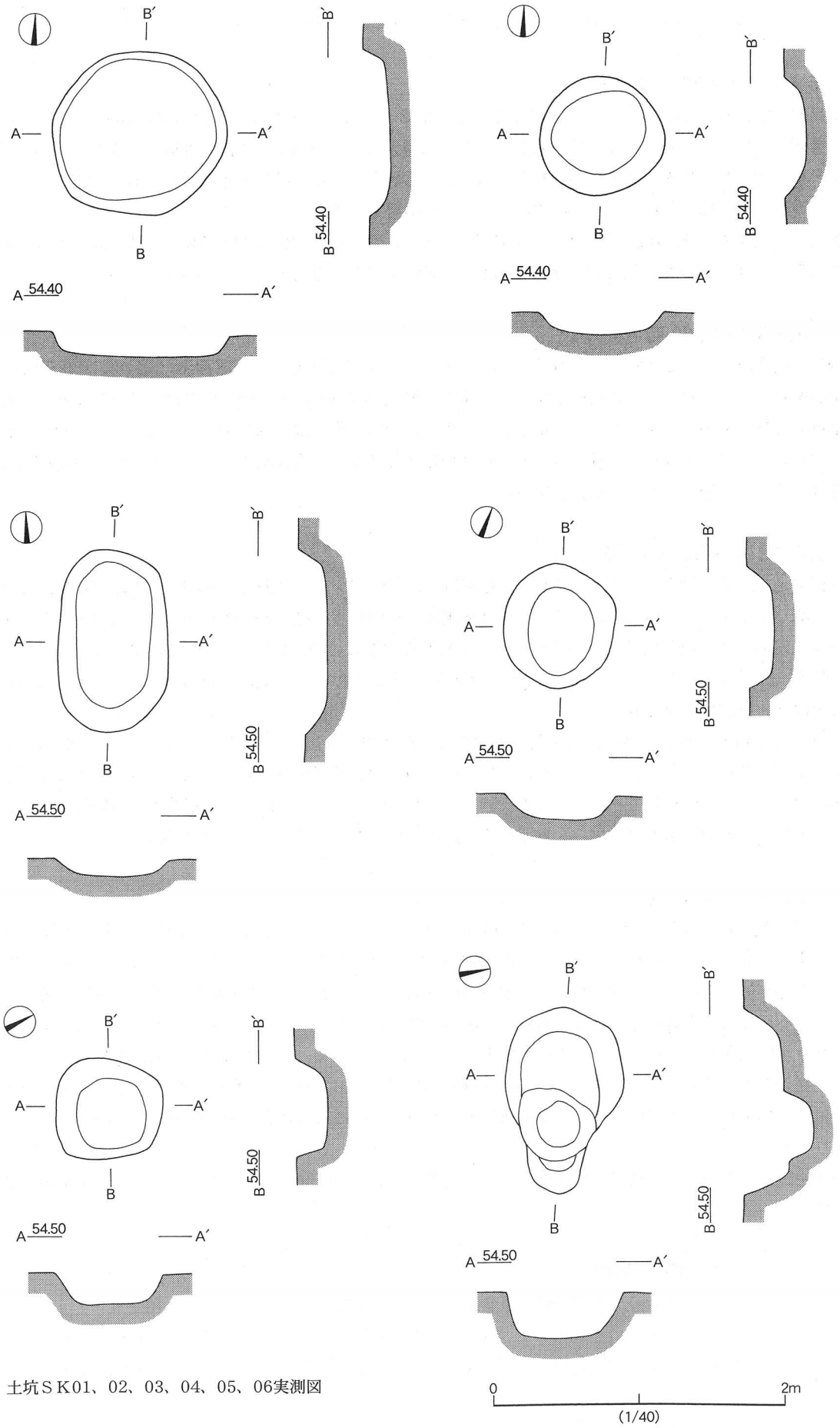
調査区の西側Ｃ－４区に位置し、立地する標高は54.16～54.18mを測る。平面形は確認面で長径0.86m、短径0.80mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。

遺物として覆土中から縄文土器の深鉢胴部破片(第６図１)が１点出土しているが、覆土の締りの状況から判断して、縄文時代ではなく、古代と推定する。

３）土坑ＳＫ03（第33・35図）

調査区の北側Ｃ－１区に位置し、立地する標高は54.18～54.22mを測る。平面形は確認面で長径1.25m、短径0.75mを測り、東西に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大17.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部がわずかに高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。

遺物として須恵器・甑の口縁部破片が覆土中より出土している。第35図１体部の把手は欠落している。口径21.0cmを測る。



第33図　土坑ＳＫ01、02、03、04、05、06実測図

出土した須恵器が10世紀代に比定されており、土坑廃棄の段階も同じと推定する。

4）土坑ＳＫ04（第33・35図）

調査区の北側Ｃ－3区に位置し、立地する標高は54.22～54.24mを測る。平面形は確認面で長径0.85m、短径0.75mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。

遺物として土師器・埦の破片が覆土中より出土している。第35図２はロクロ成形で、口径は14.0cmを測り、内黒土器である。時期は10世紀代に比定でき、土坑廃棄の段階も同じと推定する。

5）土坑ＳＫ05（第33図）

調査区の北側Ｂ－3区に位置し、立地する標高は54.24～54.25mを測る。平面形は確認面で長径0.73m、短径0.68mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大19.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、全体的に軟弱であり、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、覆土の締りの状況から判断して古代と推定する。

6）土坑ＳＫ06（第33・35図）

調査区の北側、Ｄ－3区に位置し、立地する標高は54.27～54.29mを測る。平面形は確認面で長径1.28m、短径0.80mを測り、東西に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大28.0cmを測り、底面は平坦で、全体的に軟弱であり、踏み固められた痕跡は認められない。また底面東側には径52×52cm、深さ18.0cmの円形ピットが穿ってある。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。

遺物として土師器・甕および須恵器・蓋、甕の破片が覆土中より出土している。第35図３は土師器・甕の口縁部破片である。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。同図４は須恵器蓋のツマミ部は破片。ボタン状のツマミが貼付けられている。天井部は回転ヘラケズリである。同図５は須恵器甕の口縁部破片。櫛歯波状文が施されている。時期は出土遺物から８世紀前葉に比定され、土坑廃棄も同じと推定される。

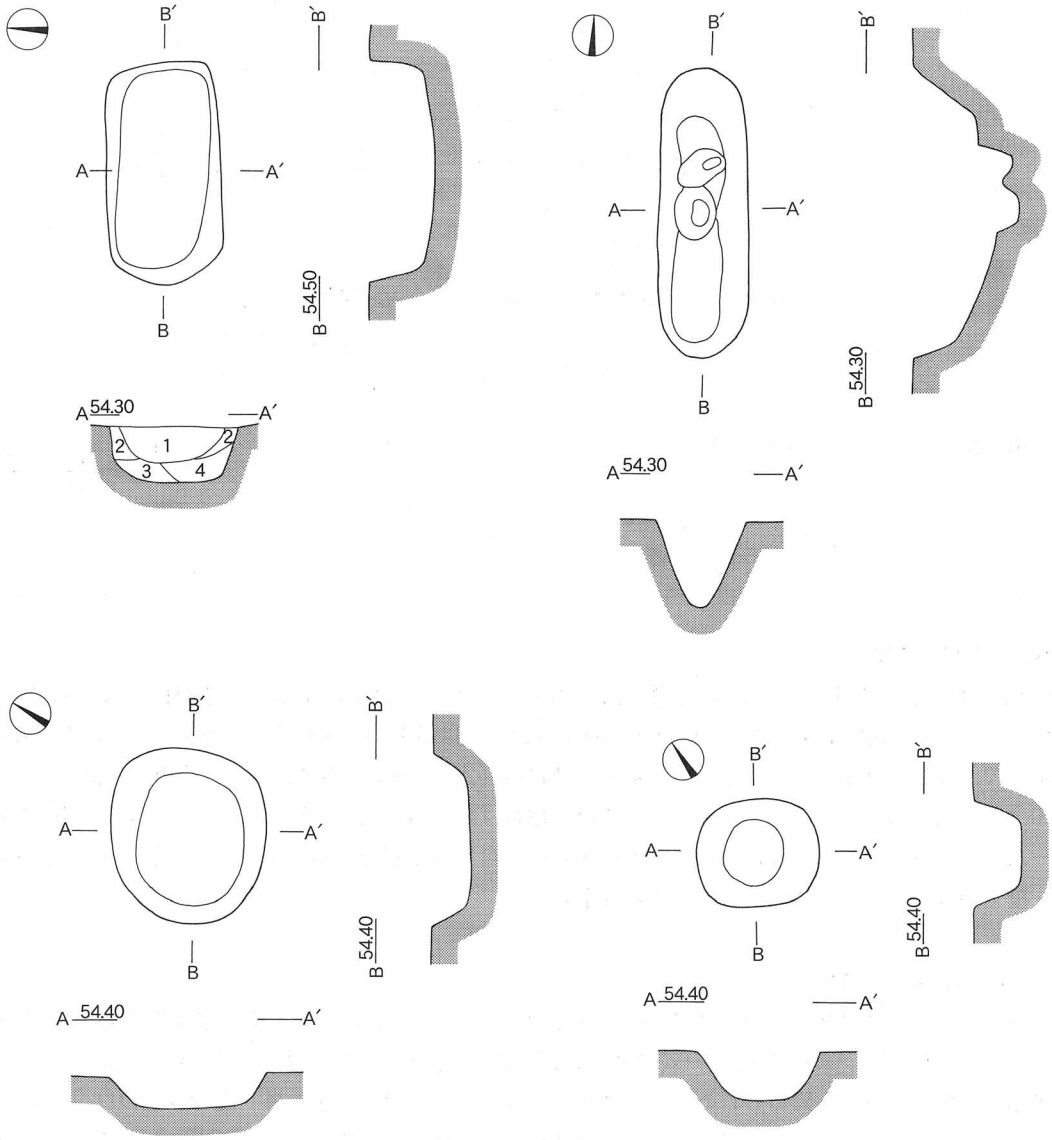
7）土坑ＳＫ07（第34・35図）

調査区の北側。Ｂ－3区に位置し、立地する標高は54.23～54.25mを測る。平面形は確認面で長径1.17m、短径0.60mを測り、東西に長い長方形を呈する。また検出面からの深度は最大34.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部が低く、わずかに起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は４層に分層可能である。上層の１層黒色土はローム粒子、灰白色粘土粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。下層の３層褐色土および４層灰白色土もローム粒子、灰白色粘土を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物として管状土錘が２点出土している。第35図６・７はいずれも完存品である。細長い紡錘状を呈し、断面円形を呈する棒を軸にして粘土帯を巻き付け、指頭による成形であるが、磨耗により表面は滑らかである。計測値については下記のとおりである。

時期は明瞭ではないが、各住居跡から出土している管状土錘とほぼ同じであることから８世紀後半から９世紀前半と推定される。

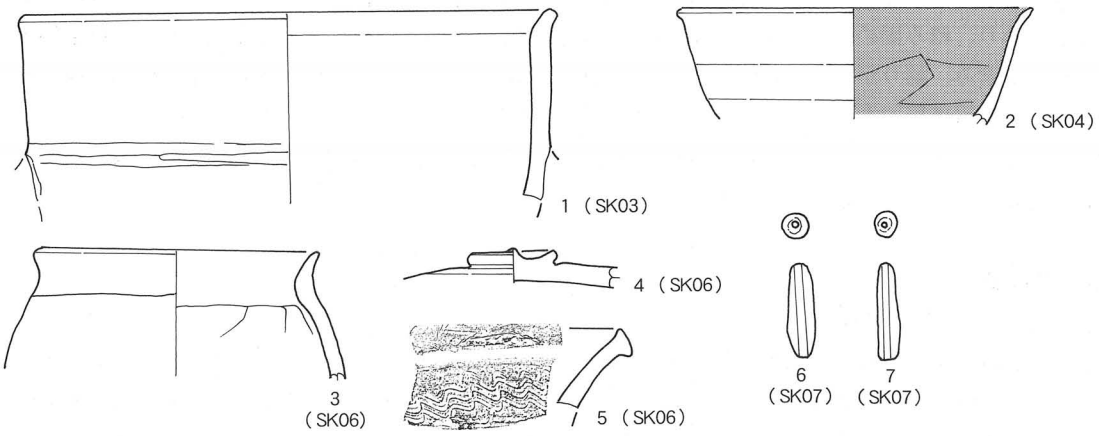
Tab.5　管状土錘計測値（ＳＫ07）

挿図番号	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	胎土
35－6	3.82	1.01	1.96	3.52	浅黄橙色10YR8/3	海綿骨針・石英・長石
35－7	3.92	1.01	1.89	2.96	橙色2.5Y7/6	チャート・石英・長石



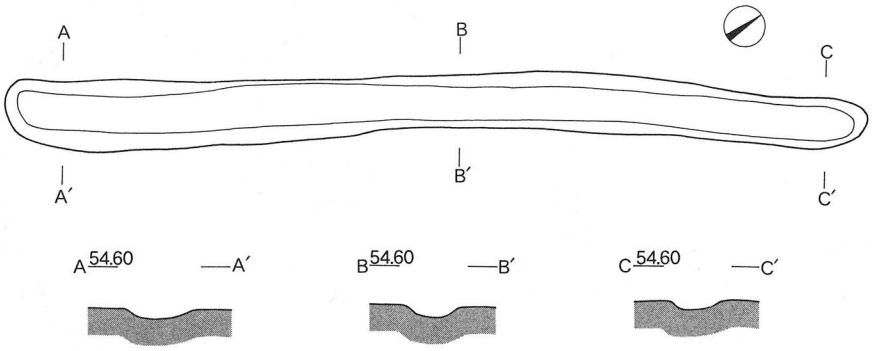
第34図　土坑ＳＫ07、08、09、10実測図

0　2m
(1/40)



第35図　土坑ＳＫ03、04、06、07出土遺物

0　10cm
(1/3)



第36図　溝ＳＤ01実測図

0　2m
(1/100)

8）土坑ＳＫ08（第34図）

調査区の南側、Ｂ－7区に位置し、立地する標高は54.05～54.06mを測る。平面形は確認面で長径1.53m、短径0.46mを測り、南北に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大44.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北側で２本のピットが穿ってある。北側は径27×20cm、深さ19.0cmの楕円形。南側は径28×22cm、深さ11.0cmを測る。全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、覆土の締りの状況から判断して古代と推定する。

2）土坑ＳＫ09（第６・34図）

調査区の南側、Ｄ－7 区に位置し、立地する標高は54.10～54.12mを測る。平面形は確認面で長径0.92m、短径0.83mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。人為的な埋め戻し土である。遺物として覆土中から縄文土器の深鉢胴部破片(第６図２)が１点出土しているが、覆土の締りの状況から判断して、縄文時代ではなく、古代と推定する。

3）土坑ＳＫ10（第６・34図）

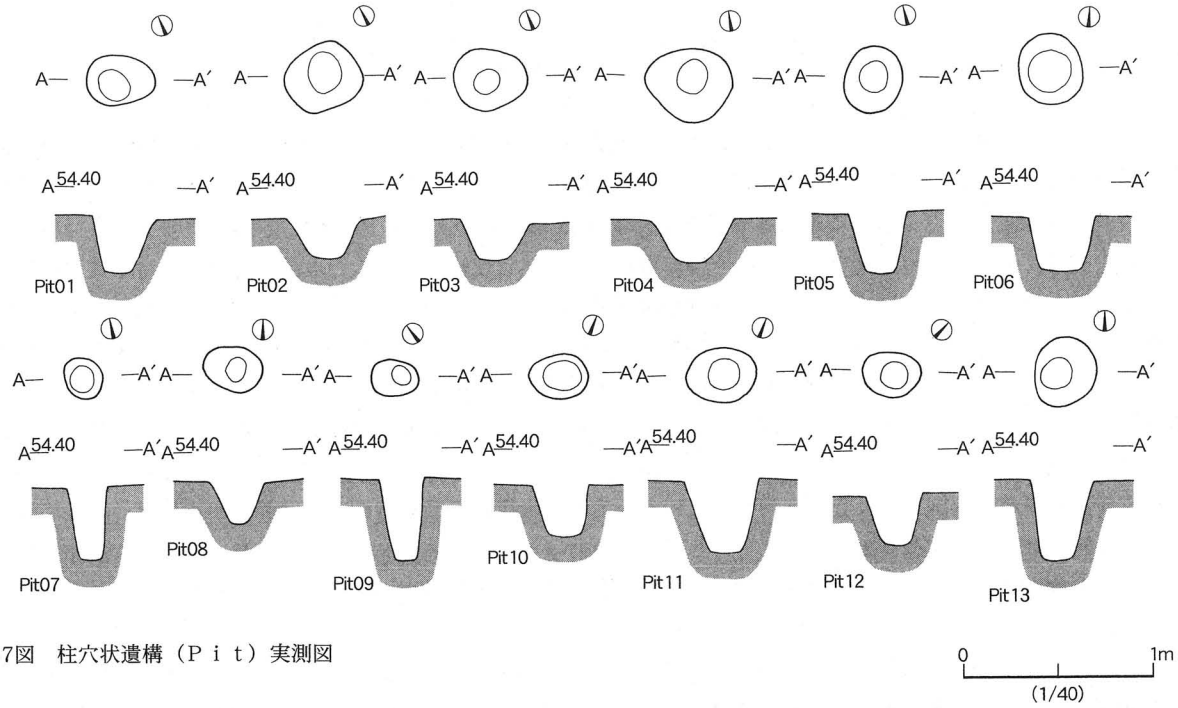
調査区の南側、Ｄ－6区に位置し、立地する標高は54.14mを測る。平面形は確認面で長径0.65m、短径0.57mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大24.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は２層に分層可能である。下層の２層暗褐色土は多量のローム粒子を含み、締りがなく、粘性に欠ける。上層の１層黒褐色土は少量のローム粒子を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。

遺物として覆土中から縄文土器の深鉢胴部破片(第６図３)が１点出土しているが、覆土の締りの状況から判断して、縄文時代ではなく、古代と推定する。

第７節　溝状遺構

1）溝状遺構ＳＤ01（第36図）

調査区の南西側Ｂ－6、Ｃ－6区に位置し、ほぼ直線的に南北に走る浅い溝である。検出された長さ11.50m、幅60.0～70.0cm、深さ11.0cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形は箱形を呈する。底面はほぼ平坦で、北側が高く、南側が低くその比高差は10.0cmである。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土



第37図　柱穴状遺構（Ｐｉｔ）実測図

の状態から古代で扱うべきと判断した。

第８節　柱穴状遺構（ピット）（第37図）

本調査区北側を中心にいわゆるピットと呼称される柱穴状遺構（以下ピットと呼ぶ）が検出された。調査されたピットの総数は13基で、形状からみるといずれも円形もしくは楕円形を呈している。また規模についてみると全体的にかなり纏まりがみられ径45cmを最大径、径20cmを最小径とし、また深さについても最大深度44.5cm、最小深度19.5cmである。これらの平均値は径35.2cm、深さ29.9cmとなり、その±５cm幅に収まるピットが全体の60％を占め、結果的に径30～40cm、深さ25～35cmの円形ピットが最も多いということになる。なお、これらはいずれも間尺に合うものはなく、しかも覆土中より遺物の出土はなかったため、その性格については明瞭ではない。少なくとも埋土は黒色土で覆われていたこと、円形もしくは楕円形でほぼ垂直気味に落ち込んでいたことから単独もしくは複数が組み合わさって何らかの機能をもった構造物の存在が想定される。小屋や物置などの粗雑で貧弱な柱構造の建物あるいは棚状構造物、物干し杭などの柱あるいは杭跡等が考えられるがいずれもこれといった決定的な痕跡を検証することができなかった。そこで、今回検出されたすべてのピットを計測し、一覧表に掲げた。

Tab. 6　柱穴計測値（単位cm）

	長径×短径	深さ		長径×短径	深さ		長径×短径	深さ
P1	45.0×27.0	28.5	P2	40.0×34.0	19.5	P3	38.0×34.0	20.0
P4	47.0×38.0	23.0	P5	36.0×30.0	31.0	P6	37.0×34.0	27.0
P7	22.0×20.0	39.5	P8	32.0×24.0	22.0	P9	25.0×20.0	44.5
P10	31.0×24.0	26.0	P11	37.0×30.0	38.5	P12	31.0×22.0	26.5
P13	37.0×32.0	42.5						

（小川和博）

第Ⅲ章　まとめ

今回実施した上ノ宿遺跡は、久慈川の右岸、玉川に挟まれた舌状台地上に立地しており、平成15年7月に発掘調査した上宿上坪遺跡(小川・大渕他2004)の北側に位置し、さらに平成20年度には本調査区に西側に展開する広大な平坦部が調査対象地となるなど、ここにきて８世紀から11世紀における古代の拠点的な大集落跡が明らかになりつつある注目の遺跡である。その意味では今回はその前触れというべき性格を有している調査といっても過言ではない。

ここは常陸大宮市下町4015-1番地にあたる1,980㎡が対象なっているが、先に調査した上宿上坪遺跡はここから南へ300m先の地点である。８世紀前半から９世紀後半における住居跡５軒が明らかにされており、当遺跡との関連は明白である。一応市が行った文化財分布調査ではこの二遺跡は明確な離間をもって線引きされている。しかし、その境の根拠が明確にできないほど台地平坦面が拡がっているのである。しかも、道路を境に西側に隣接している広大な区域は遺跡の範囲から外されている。こうした二遺跡を包括して、さらに隣接する平坦部は同一遺跡としたほうが全体的な古代集落構成の展開を考えた場合理解し易いであろう。今後遺跡名を含めた遺跡範囲・規模そしてその在り方について検討の余地を残すこととなった。

さて今回の調査で、奈良・平安時代における竪穴住居跡８軒、柵列１条、土坑10基、溝１条。柱穴状遺構13基が検出された。

検出された８軒の住居跡より出土している土器の年代により判断すると８世紀中葉から９世紀後葉にかけてのもので、北側半分が未調査区域に延びて全体像が把握できないＳＩ01を除き、他７軒の全貌が明らかになっている。また、ＳＩ03とＳＩ04がわずかであるが、重複している以外に切り合い関係はみられない。ここでまず改めて検出された８軒の住居跡をならべてみると、時期差がみられながらカマドの位置を主軸方位とすると真北から西方向に15度以内という、いずれも小幅な範囲内に収まるという共通性を持ちながら、平面形およびその規模、あるいは柱穴の有無および配置、さらに梯子穴、壁溝等の付帯施設に至るまでそれぞれ各個バラエティーに富み、個性豊な形態を呈していることがわかる。簡単に概観のため下記のとおり一覧表を掲げた。

住居跡番号	平面形	規模(南北×東西m)	主軸方位	カマド位置	柱穴数	時期
ＳＩ01	正方形	4.18×－	Ｎ－14°　－Ｗ	北壁	梯１	９c前
ＳＩ02	正方形	3.65×3.53	Ｎ－13°　－Ｗ	北壁	梯１	９c後
ＳＩ03	正方形	3.32×3.78	Ｎ－01°　－Ｗ	北壁	0	８c中
ＳＩ04	正方形	3.53×3.41	Ｎ－08°　－Ｗ	北壁	隅3・梯1	９c前
ＳＩ05	正方形	3.38×3.45	Ｎ－０１－Ｗ	北(新)・東(旧)	0	９c後
ＳＩ06	正方形	5.84×5.56	Ｎ－02°　－Ｗ	北壁	主４・隅柱３	８c中
ＳＩ07	正方形	2.51×2.56	Ｎ－03°　－Ｗ	北壁	梯１	９c前
ＳＩ08	正方形	4.55×4.37	Ｎ－02°　－Ｗ	北壁	主４・梯１	８c終

従来から検討されてきた住居跡の属性として、出土遺物だけではなく、住居形態・構造・規模・主軸方位・カマド構造など多くの属性の類似性が認められれば、同時存在の可能性は高まるはずといわれて久しい(土井・渋江1987等)。しかし、土器編年が精緻にわたる今日、しかも検出例の多さから居住形態のみかけの類似性だけの状況証拠だけでは解決できない問題も多出していることもまた確かであろう。今回検出された８軒の住居跡をみると、まず柱穴についてであるが、一般に主柱穴の数は竪穴の規模に比例するといわれており、今回一辺５ｍを超える規模をもつ中型住居ＳＩ06が４本の主柱穴と三隅に隅柱穴が３本穿ってある。この竪穴内柱穴と隅柱穴の設置には構築時における時期差があるものと考え、隅柱穴が新期と推定した。これは竪穴内柱穴に抜き取り跡が確認されたことによる。なお隅柱穴のうち北西隅に掘り込みが確認できなかったが、これは掘形をもたない柱の設置が想定される。この隅柱穴の存在は９世紀前半のＳＩ04で設置されており、一辺３ｍ台の小型住居でも無柱穴住居と同じような竪穴内の有効活用可能な柱位置であったことを表している。また同じ４本柱構造でも８世紀終末のＳＩ08ではカマド側の北壁際に配置

されている。南側の２本と梯子穴の位置は一般的な配列であるが、カマド側の上屋構造になんらかの工夫が施されていたのであろう。また５軒は無柱穴住居であるが、うちＳＩ01・02・07は南壁際に梯子穴をもつ。これに対してＳＩ03と05は完全な無柱穴住居であった。いずれも９世紀代であり、この時期竪穴の小型化と同時に無柱穴住居の例が増加することはよく知られており、大きな問題ではない。

しかし、その中でＳＩ05は一辺３ｍの小型住居でありながらカマドの移動が行われている。カマド移築については既に触れたことがある(小川2007)。このＳＩ05は正方形を呈する小型住居で、住居本体の建替えは確認できなかったが、カマドが新旧２ヶ所あることが判明した。カマドはまず東壁に設置されていたものが北壁へ造り替えられている。カマド方位は旧がＮ－88°－Ｅで、新がＮ－01°－Ｗを指し、北へ91°、ちょうど直角に移動している。すなわち東カマドから北カマドへの移設となる。なお、旧カマドの部材は完全に撤去され、煙道部にあたる壁部の掘り込みも貼壁として塞がれており、さらに火床部に相当する床面は堅緻な貼床されていた。

こうしたカマドの造り替えは、家を支える主柱の建替えあるいは住居の拡張などと異なり、新たなカマド造り作業は比較的容易なものであったと推定される。問題はその必要性である。一辺3.4mの小型住居跡内で直角に振っているだけで、少なくとも旧カマドに残された煙道部の掘形をみる限り使用できなくなったという形跡をみることができない。すなわち、壁面には火熱による硬化面がそのまま残存しており、人為的あるいは自然的要因にしろ崩落した痕跡を確認できないからである。カマドは廃棄の際「壊される(堤1995)」とされている。この廃棄とは、使用不可能になった段階が想定されるが、既述したように旧カマドの煙道部の掘形はそれを示していない。まだ十分に使用可能なのである。直接要因として、住居の改築に伴うこと、すなわち拡張や柱の建替えによる改築であるが、ここでは明確には確認できなかった。そこで考えられることはいわゆる「カマド祭祀」に伴う造り替えではないか思われる。それはカマド本体の使用に係わる廃棄ではなく、そこに住むあるいは係わる居住民の入れ替え等によって、旧カマドを封鎖する必要性から廃棄したものと推定されるからである。すでに奈良・平安時代におけるカマド祭祀については、「竈神」といった墨書土器などによりカマド神の存在は明確である。既存のカマドを封じ込める＝カマド破壊から新たなカマド設置は、ＳＩ05にみたように、角度（＝方角・方位）を替えることによってその役割が完了できたものである。本来東に設置していたものを上ノ宿集落全体に合わせるように北方向に移動させている。時間的には短期間の移築であったであろう。こうしたカマドの解体→構築にあたっては確実に「竈神」信仰の存在は否定できない。しかも崩落等によるカマド使用不可能＝廃棄＝解体ではなく、使用可能なカマドの解体＝封鎖であることは明確である。これはどのような小規模な竪穴であっても必ずカマドを設置することにも通じる。カマドの普及は、同時に「竈神」信仰が隅々にわたり浸透していること意味し、東国における掘立柱建物への移行をひたすら拒んだ理由がここにあったかも知れない。

最後にいわゆる文字資料として墨書土器が５点出土している。そのなかで判読できるものが２点ある。ＳＩ02より出土した土師器の底部に墨書されたもので、「大福」と判読できる。またＳＩ04の土師器高台付坏の外面体部に右横位に墨書された「少澤」である。これら墨書土器を含め文字資料については(財)茨城県教育財団が詳細な調査を実施しており、大きな成果をあげているが、この「大福」および「少澤」についての類例を確認することができなかった。その集成のなかで「大」もしくは「福」の単独文字あるいは「大□」「福□」といったものはいくつかみられ、「大」や「福」の文字は一般的な使用文字であるであることが解かる。なお、他県であるが千葉県大網白里町宮台遺跡出土の土師器坏に「大福寺ヵ」と読める墨書の報告がある。短絡的に本遺跡が寺に関わるとは考えられないが、少なくとも拠点的な集落跡であることは確信できる。因みに「大福」墨書が９世紀中葉、「少澤」墨書が９世紀前葉に比定されており、墨書土器の盛行期に掛かる段階の資料である。

（小川和博）

参考文献

石野　博信1990　「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館
小川　和博2007　「河原子古墳群第2次発掘調査報告書」日立市文化財調査報告第75集
川井正一他2000　「茨城県域における文字資料集成1」研究ノート９号(財)茨城県教育財団
川井正一他2001　「茨城県域における文字資料集成2」研究ノート10号(財)茨城県教育財団
川井正一他2002　「茨城県域における文字資料集成3」研究ノート11号(財)茨城県教育財団

川井正一他2003　「茨城県域における文字資料集成4」研究ノート12号(財)茨城県教育財団
川井正一他2004　「茨城県域における文字資料集成5」年報23 (財)茨城県教育財団
川井正一他2005　「茨城県域における文字資料集成6」年報24 (財)茨城県教育財団
川井正一他2006　「茨城県域における文字資料集成7」年報25 (財)茨城県教育財団
川井正一他2007　「茨城県域における文字資料集成8」年報26 (財)茨城県教育財団
千　葉　県1996　「千葉県の歴史　資料編　古代」(財)千葉県史料研究財団
堤　　隆1995　「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨懸考古学協会誌第７号』山梨県考古学協会
土井義夫・渋江芳浩1987　「平安時代の居住形態」『物質文化49』物質文化研究会

Tab. 7　上ノ宿遺跡出土土器一覧表

遺構	図版番号	器種	法量(cm)		器形および調整の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
SI01	第9図1	土師器 坏	口径 器高 底径	- (3.9) 9.4	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。底部回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	底部のみ	墨書土器
	第9図2	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	- (2.9) 8.6	ロクロ成形。高台貼付。底部回転ヘラ切り。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	スコリア・黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	高台のみ残存	内黒
	第9図3	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	- (3.2) 8.0	ロクロ成形。高台貼付。内面ヘラミガキの後黒色処理。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁部欠損 体部1/4残存	内黒
	第9図4	土師器 蓋	口径 器高 底径	19.0 (2.9) -	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	灰褐色 (7.5YR4/2)	体部1/4残	内黒
	第9図5	土師器 鉢	口径 器高 底径	20.0 (6.7) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ。	チャート・海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	体部上半部残	
	第9図6	土師器 甕	口径 器高 底径	11.0 (4.8) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・チャート・石英・長石粒を含む	良好	赤褐色 (2.5YR4/8)	口縁部1/4残存	
	第9図7	土師器 甕	口径 器高 底径	24.0 (5.0) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・雲母・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (7.5YR6/6)	口縁部1/8残	
	第9図8	土師器 甕	口径 器高 底径	20.0 (7.7) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・雲母・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (2.5YR6/8)	口縁部1/5残	
	第9図9	須恵器 坏	口径 器高 底径	10.6 3.8 6.2	ロクロ成形。底部回転ヘラ切りの後ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	にぶい橙色 (5YR7/4)	体部1/2欠損	
	第9図10	須恵器 坏	口径 器高 底径	12.4 5.3 8.0	ロクロ成形。底部手持ヘラケズリ。ヘラ記号。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	灰色 (10Y6/1)	体部1/2欠損	ヘラ記号
	第9図11	須恵器 坏	口径 器高 底径	- (4.8) 7.0	ロクロ成形。底部手持ヘラ切り。「米」印ヘラ記号。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	灰色 (10Y7/1)	体部1/2残	ヘラ記号
	第9図12	須恵器 甕	口径 器高 底径	- - -	外面平行タタキ。自然釉。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	灰オリーブ色 (5Y5/2)	胴部破片	
	第9図13	須恵器 甕	口径 器高 底径	- - -	外面平行タタキ。自然釉。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	灰色 (7.5YR4/1)	胴部破片	
	第9図14	須恵器 甕	口径 器高 底径	- - -	外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	灰色 (5Y6/1)	胴部破片	
	第9図15	須恵器 甕	口径 器高 底径	- - -	外面平行タタキ。内面ヘラナデ、ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	胴部破片	
SI02	第12図1	土師器 坏	口径 器高 底径	14.0 4.7 5.9	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。底部回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	体部1/2欠損	墨書土器 内黒
	第12図2	土師器 坏	口径 器高 底径	13.0 4.1 6.0	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。底部回転糸切り。	スコリア・石英・長石粒を含む	良好	黒褐色 (10YR3/1)	完形	内黒
	第12図3	土師器 坏	口径 器高 底径	- (2.9) 3.0	ロクロ成形。外面ロクロナデ、下端部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。底部回転ヘラケズリ。	黒色粒子・海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	明赤褐色 (2.5YR5/8)	底部1/2残	内黒
	第12図4	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	- (2.2) 6.5	ロクロ成形。高台貼付。底部回転ヘラ切り。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	高台部のみ	墨書土器 「大福」
	第12図5	土師器 高台付皿	口径 器高 底径	- (2.3) 6.2	ロクロ成形。高台貼付。底部回転ヘラ切り。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	灰黄褐色 (10YR6/2)	高台部のみ	内黒
	第12図6	土師器 高台付皿	口径 器高 底径	- (1.5) 6.6	ロクロ成形。高台貼付。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	高台部のみ	内黒

遺構	図版番号	器種	法量(cm)		器形および調整の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
SI02	第12図7	土師器 甕	口径 器高 底径	17.0 (6.0) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	浅橙色 (5YR8/3)	口縁部1/5残	
	第12図8	土師器 甕	口径 器高 底径	14.0 (8.1) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	暗赤灰色 (2.5YR3/1)	口縁部1/2残	
	第12図9	土師器 甕	口径 器高 底径	20.2 (11.0) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	口縁部1/2残	
	第12図10	土師器 甕	口径 器高 底径	20.0 (8.0) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (2.5YR6/8)	口縁部1/5残	
	第12図11	土師器 甕	口径 器高 底径	- (4.4) 6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラ記号。	石英・長石粒を含む	良好	黒褐色 (10YR3/1)	底部のみ	スス付着
SI03	第15図1	須恵器 坏	口径 器高 底径	14.8 4.1 9.0	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラ切り。「十」ヘラ記号。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (5Y8/1)	体部1/8残	木葉下産 ヘラ記号
	第15図2	須恵器 坏	口径 器高 底径	13.0 4.1 9.4	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (7.5Y7/1)	体部1/2残	
	第15図3	須恵器 蓋	口径 器高 底径	10.0 1.8 -	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。ツマミ貼付。	海綿骨針・チャート・石英・長石粒を含む	良好	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	天井部のみ	木葉下産
	第15図4	須恵器 蓋	口径 器高 底径	15.0 2.5 -	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	体部1/5残	スス付着
	第15図5	須恵器 蓋	口径 器高 底径	12.6 2.8 -	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	灰色 (10Y4/1)	体部1/3欠損	
	第15図6	須恵器 甕	口径 器高 底径	- - -	外面口縁部、櫛描没状文	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (10YR7/1)	口縁部破片のみ	
SI04	第18図1	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	14.6 5.6 7.8	ロクロ成形。高台貼付。内面ヘラミガキの後黒色処理。底部回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	赤褐色 (2.5YR4/8)	口縁部一部欠損	墨書土器 「少澤」 内黒
	第18図2	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	15.0 (3.4) 9.1	ロクロ成形。高台貼付。底部回転ヘラ切り。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	スコリア・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	体部1/2	内黒
	第18図3	土師器 高台付坑	口径 器高 底径	- (2.5) 9.1	ロクロ成形。高台貼付。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (2.5YR7/8)	底部1/2残	墨書土器 内黒
	第18図4	土師器 甕	口径 器高 底径	21.0 (29.8) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・チャート・石英・長石粒を含む	良好	黒褐色 (7.5YR2/2)	口縁部1/4残 胴部1/4残	
	第18図5	土師器 甕	口径 器高 底径	21.4 (27.1) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色7.5YR6/6 褐色7.5YR4/3	口縁部 胴部1/6残	
	第18図6	土師器 甕	口径 器高 底径	19.0 (2.5) 0.0	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色7.5YR6/6 黒色7.5YR2/1	口縁部破片	
	第18図7	土師器 甕	口径 器高 底径	21.4 (12.4) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色(5YR7/6)	口縁部1/6残	
	第18図8	土師器 甕	口径 器高 底径	22.3 (12.6) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色5YR6/6 褐色7.5YR4/3	口縁部1/4残	
SI05	第21図1	土師器 坏	口径 器高 底径	12.0 4.3 5.2	ロクロ成形。外面体部下端手持ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。底部回転糸切り。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	体部1/4欠損	内黒
	第21図2	土師器 坏	口径 器高 底径	13.0 (3.8) -	ロクロ成形。外面体部下端手持ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (2.5YR6/6)	体部1/8残	内黒
	第21図3	土師器 坏	口径 器高 底径	- (1.9) 5.2	ロクロ成形。外面ヘラナデ。内面ヘラミガキ。底部回転糸切り。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	底部のみ	内黒
	第21図4	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	- (1.6) 5.9	ロクロ成形。高台削り出し。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (2.5YR6/6)	底部のみ	内黒
	第21図5	土師器 甕	口径 器高 底径	14.2 (7.7) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (7.5YR7/6)	口縁部1/4残	
	第 21図6	土師器 甕	口径 器高 底径	18.0 (7.0) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	石英・長石粒を含む	良好	黒褐色 (10YR3/1)	口縁部1/10残	
SI06	第25図1	土師器 手捏土器	口径 器高 底径	7.0 5.8 4.6	巻上げ成形。外面体部ナデ。内面ナデ。底部木葉痕	雲母・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	体部1/2残	木葉痕
	第25図2	土師器 甕	口径 器高 底径	26.0 (9.3) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	石英・長石粒を含む	良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁部1/6残	

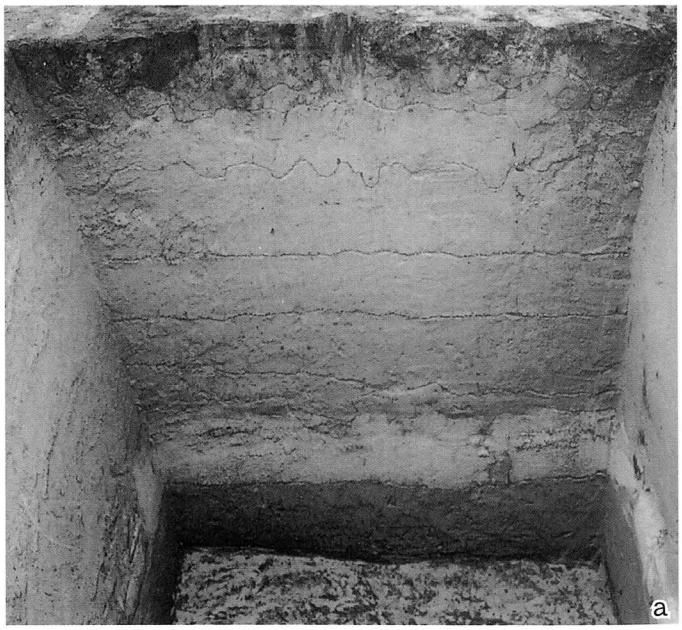
遺構	図版番号	器種	法量(cm)		器形および調整の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
SI06	第25図3	土師器 甕	口径 器高 底径	16.6 (16.5) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (7.5YR7/6)	体部1/4残	
	第25図4	土師器 甕	口径 器高 底径	- (3.9) 10.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	石英・長石粒を含む	良好	灰褐色 (5Y R4/2)	底部1/4残	木葉痕
	第25図5	土師器 甕	口径 器高 底径	- (2.2) 6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	雲母・石英・長石粒を含む	良好	赤褐色 (2.5YR4/8)	底部1/2残	
	第25図6	須恵器 坏	口径 器高 底径	- (3.7) 8.0	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	体部1/4残	
	第25図7	須恵器 坏	口径 器高 底径	- (2.0) 9.0	ロクロ成形。底部回転ヘラケズリ。	海綿骨針・チャート・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	底部1/4残	
	第25図8	須恵器 蓋	口径 器高 底径	- (1,1) -	ロクロ成形。ツマミ貼付け。	石英・長石粒を含む	良好	灰色 (5Y5/1)	ツマミのみ	
	第25図9	須恵器 蓋	口径 器高 底径	16.6 12.7 -	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	灰色 (5Y4/1)	天井中心部 欠損　1/4残	
	第25図10	須恵器 蓋	口径 器高 底径	16.0 (2.1) -	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (N7/)	体部1/3残	
SI07	第28図1	土師器 甕	口径 器高 底径	22.0 (6.9) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	海綿骨針・黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	にぶい橙色 (5YR6/4)	口縁部1/10残	
	第28図2	土師器 甕	口径 器高 底径	- (1.8) 8.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	スコリア・石英・長石粒を含む	良好	黒褐色 (5YR3/1)	底部1/4欠損	木葉痕
SI08	第31図1	土師器 坏	口径 器高 底径	13.8 4.3 7.8	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。底部静止糸切りの後、周縁手持ちヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	口縁部一部 欠損	
	第31図2	土師器 坏	口径 器高 底径	14.0 (4.0) -	ロクロ成形。外面ロクロナデ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	海綿骨針・黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	体部1/4残	内黒
	第 31図3	土師器 坏	口径 器高 底径	- (1.8) 6.8	ロクロ成形。外面体部下端ヘラミガキ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。底部回転ヘラ切りの後、ヘラミガキ。	石英・長石粒を含む	良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	底部のみ	内黒
	第 31図4	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	- (5.5) 9.6	ロクロ成形。高台貼付。外面体部下端回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。底部回転ヘラ切り。	海綿骨針・黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (5YR7/6)	底部1/3残	内黒・ ヘラ記号
	第 31図5	土師器 高台付坏	口径 器高 底径	- (2.0) 11.0	ロクロ成形。高台貼付。外面体部ロクロナデ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。底部回転ヘラ切り。	雲母・石英・長石粒を含む	良好	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	底部1/6残	内黒
	第 31図6	土師器 甕	口径 器高 底径	21.0 (8.0) -	外面口縁部ヨコナデ、体部横位のヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (7.5YR6/6)	口縁部1/8残	内黒
	第 31図7	土師器 甕	口径 器高 底径	20.0 (7.3) -	外面口縁部ヨコナデ、体部横位のヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	暗赤褐色 (5YR3/2)	口縁部1/5残	
	第 31図8	土師器 甕	口径 器高 底径	21.0 (5.0) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む	良好	黒褐色 (10YR2/3)	口縁部1/10残	
	第 31図9	土師器 甕	口径 器高 底径	- (4.6) 8.4	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。底部木葉痕の後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	橙色 (5YR7/6)	底部3/4残	木葉痕
	第 31図10	土師器 甕	口径 器高 底径	- (4.5) 6.4	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。底部ヘラナデ。	石英・長石粒を含む	良好	赤褐色 (5YR4/6)	底部3/4残	
	第 31図11	須恵器 坏	口径 器高 底径	- (4.5) 8.0	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (10Y8/1)	体部1/3残	
	第 31図12	須恵器 坏	口径 器高 底径	- (2.7) 7.0	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	石英・長石粒を含む	良好	灰色 (10Y5/1)	体部1/4残	
	第 31図13	須恵器 坏	口径 器高 底径	- (1.6) 7.0	ロクロ成形。底部回転ヘラ切りの後。ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	底部1/2残	
	第 31図14	須恵器 盤	口径 器高 底径	16.0 4.0 9.2	ロクロ成形。高台貼付。外面体部下半回転ヘラ切り。ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。「十」字状のヘラ記号。	海綿骨針・石英・長石粒を含む	良好	灰色 (10YR4/1)	1/4残	ヘラ記号
	第 31図15	須恵器 甕	口径 器高 底径	- - -	外面タタキ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (10Y8/1)	胴部破片	
	第 31図16	須恵器 甕	口径 器高 底径	- - -	外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	灰色 (10Y4/1)	胴部破片	
SK03	第34図1	須恵器 甑	口径 器高 底径	21.0 (7.4) -	ロクロ成形。外面ロクロナデ・ヘラケズリ。内面ロクロナデ。把手欠損。	黒色粒子・石英・長石粒を含む	良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁部1/8残	

遺構	図版番号	器種	法量(cm)		器形および調整の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
SK04	第34図2	土師器 坏	口径 器高 底径	14.0 (4.5) -	ロクロ成形。外面ロクロナデ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	石英・長石粒を含む	良好	褐灰色 (10YR4/1)	口縁部1/8残	内黒
SK06	第34図3	土師器 甕	口径 器高 底径	11.0 (4.9) -	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	石英・長石粒を含む	良好	橙色 (2.5YR7/6)	口縁部1/10残	
	第34図4	須恵器 蓋	口径 器高 底径	- (1.4) -	ロクロ成形。ツマミ貼付け。天井部ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む	良好	褐灰色 (7.5YR6/1)	ツマミのみ	
	第34図5	須恵器 甕	口径 器高 底径	- (3.0) -	巻上げ成形。櫛歯波状文。	石英・長石粒を含む	良好	灰白色 (5Y7/1)	口縁部破片	

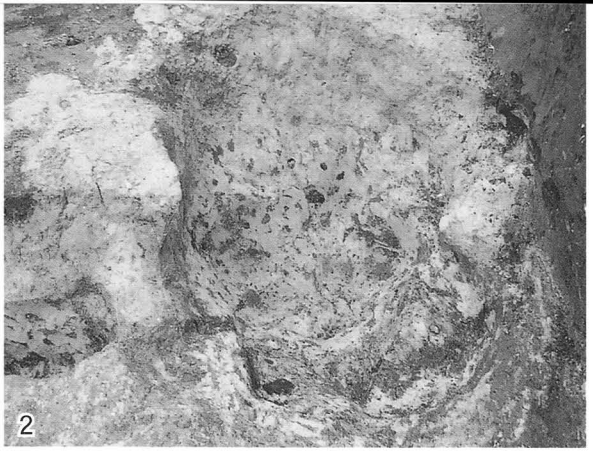
写 真 図 版

1. 遺跡全体景観

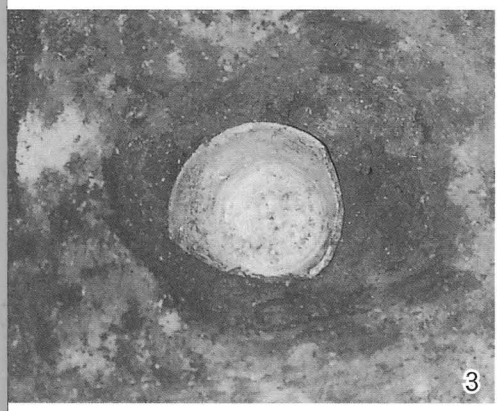
2. 調査区全体景観

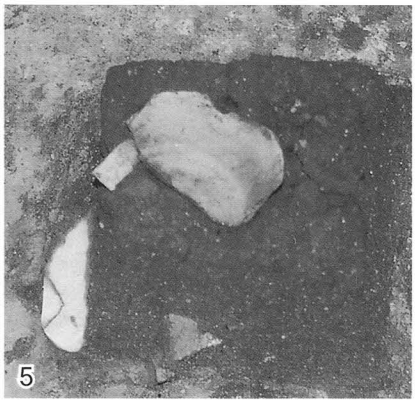


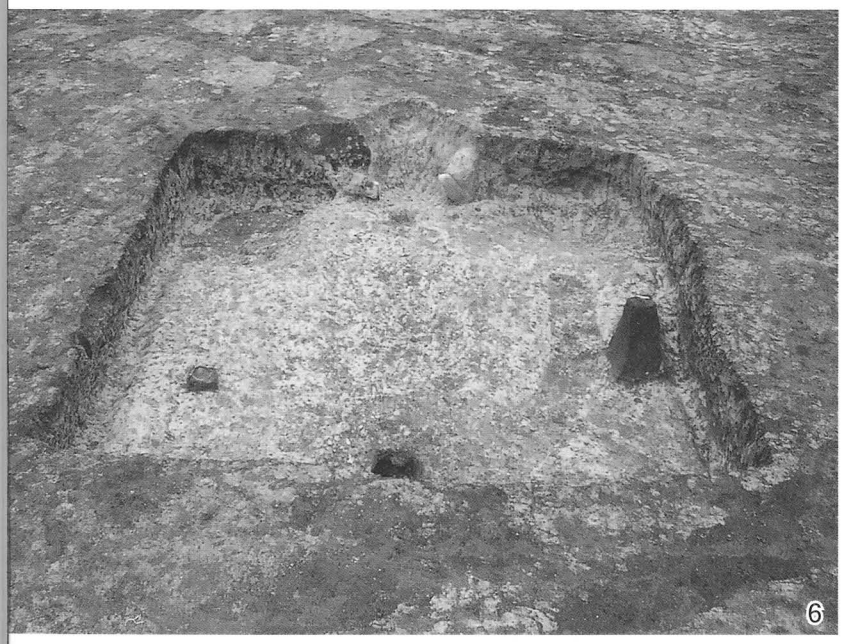
3. 基本層序（a：ＰＧ1、ｂ：ＰＧ2）



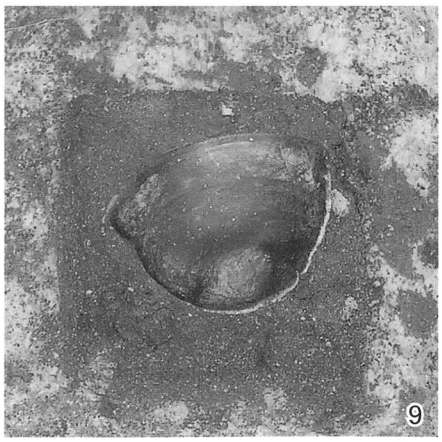
1～5：住居跡ＳＩ01
（1：全景、2：カマド址、3～5：遺物出土状況）

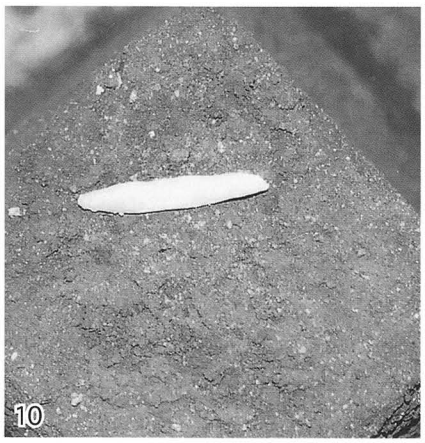




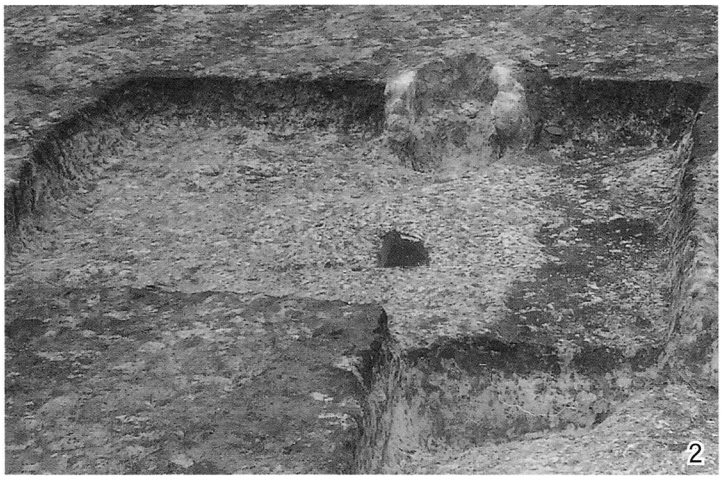


6～10：住居跡ＳＩ02
（6：全景、7：カマド址、8～10：遺物出土状況）

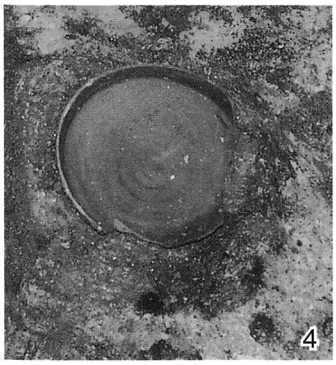


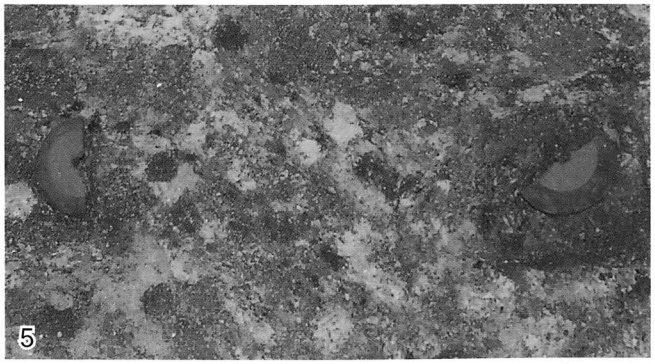


1：住居跡ＳＩ03・04全景
2～5：住居跡ＳＩ03
6～8：住居跡ＳＩ04



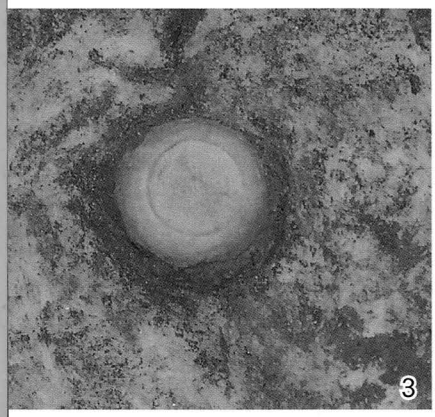
2：全景
3：カマド址
4・5：遺物出土状況
6：全景
7：カマド址
8：遺物出土状況

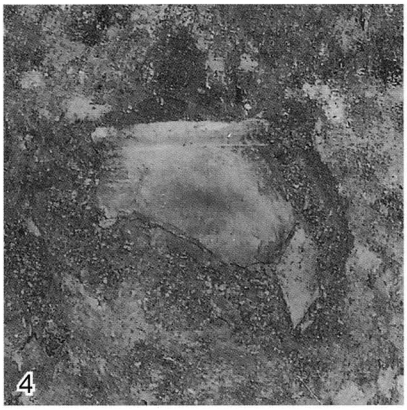


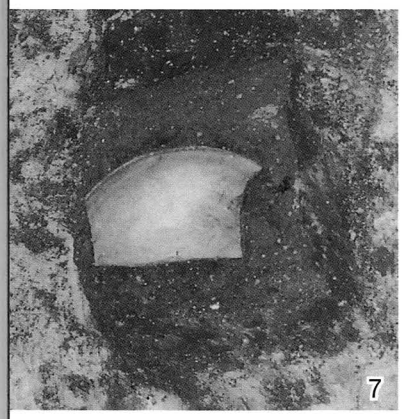


1～4：住居跡ＳＩ05
（1：全景、2：カマド址、3・4：遺物出土状況）

5～9：住居跡ＳＩ06
（1：全景、2：カマド址、。7～9：遺物出土状況）

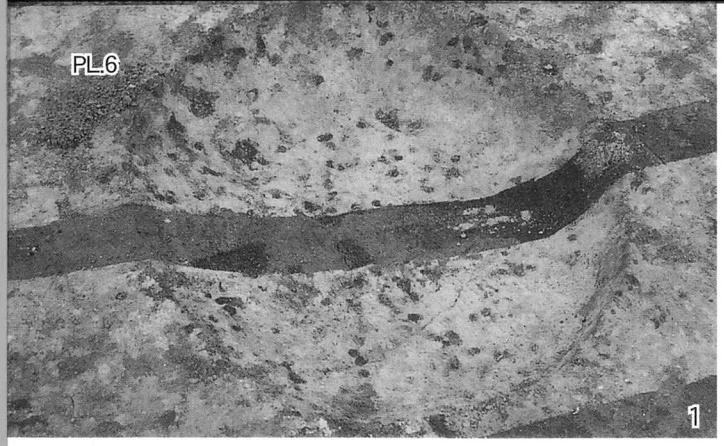


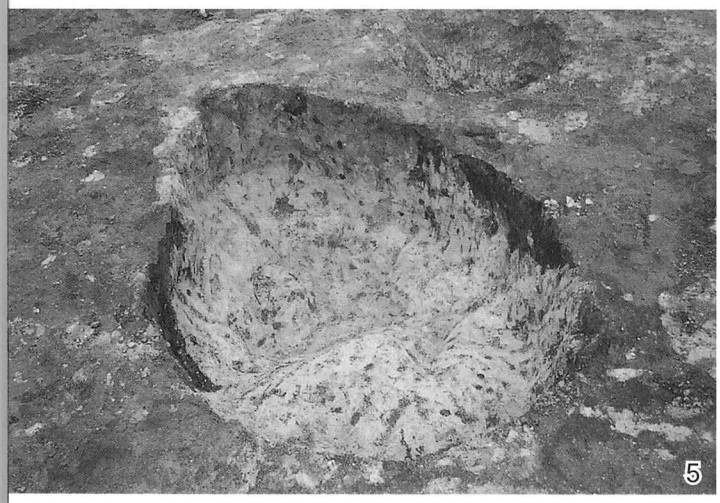




1～2：住居跡ＳＩ07
（1：全景、2：カマド址）

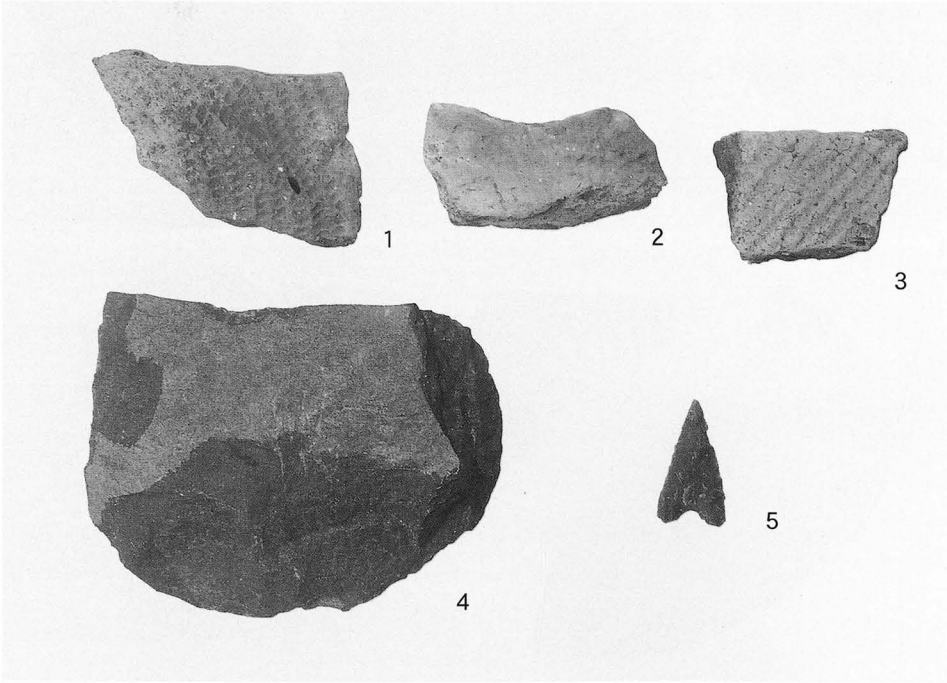
3～8：住居跡ＳＩ08
（3：全景、4：カマド址、5～8：遺物出土状況）





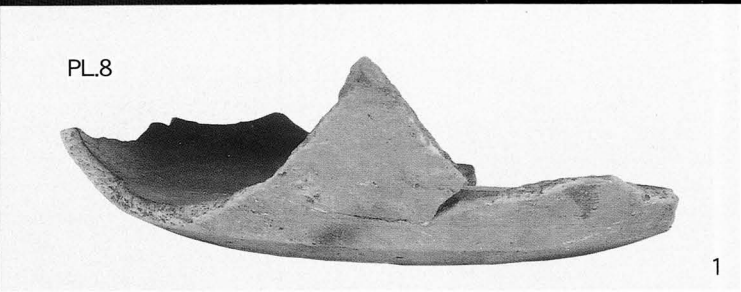
1：土坑ＳＫ01　2：土坑ＳＫ01（後）、ＳＫ02（前）　3：土坑ＳＫ03　4：土坑ＳＫ04（前）、（後）
5：土坑ＳＫ06　6：土坑ＳＫ07　7：土坑ＳＫ08　8：土坑ＳＫ09

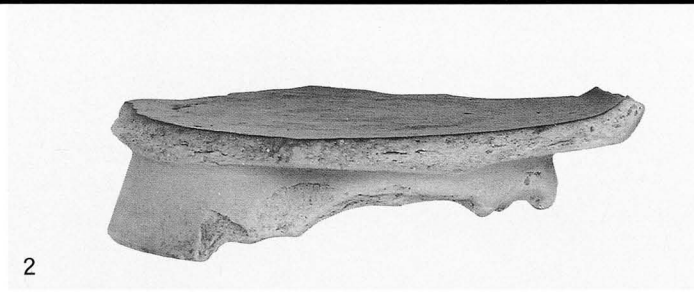
1：土坑ＳＫ10　2：土坑ＳＫ07、Ｐ-3～5、7～10、15、17　3：Ｐ-1・2、6、11～14　4：溝ＳＤ01

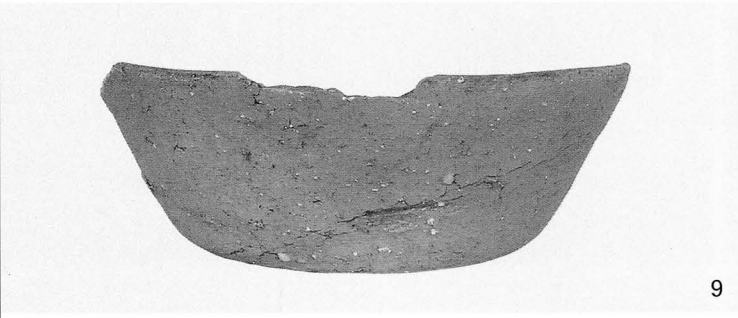


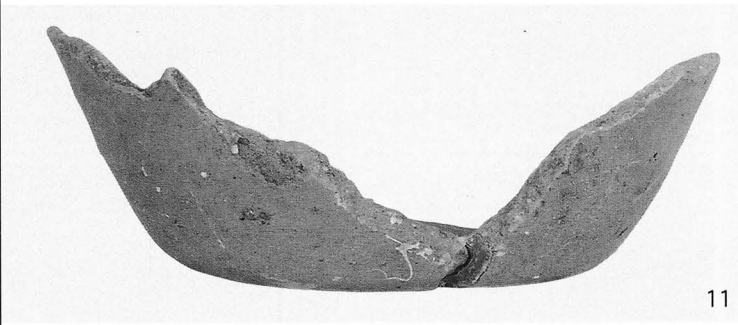
5：縄文時代の遺物（1：ＳＫ02、2：ＳＫ09、3：ＳＫ10、4・5：ＳＤ01）

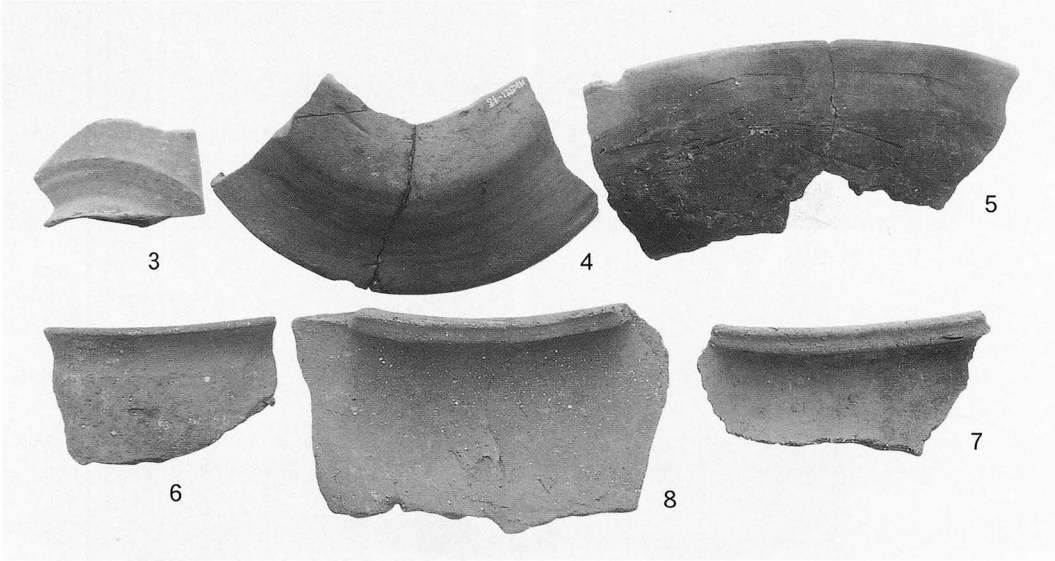
PL.8

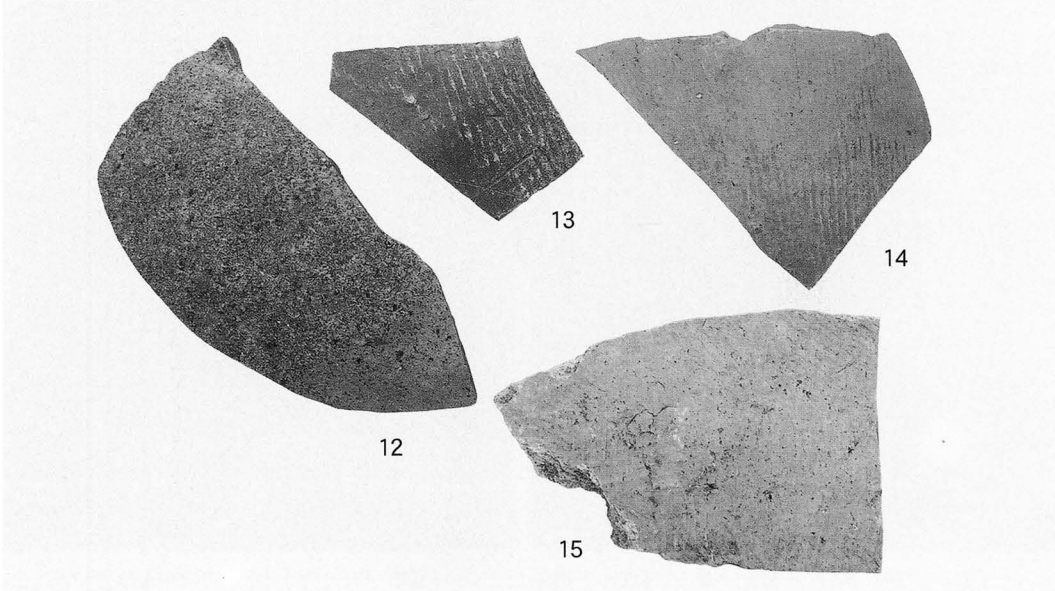




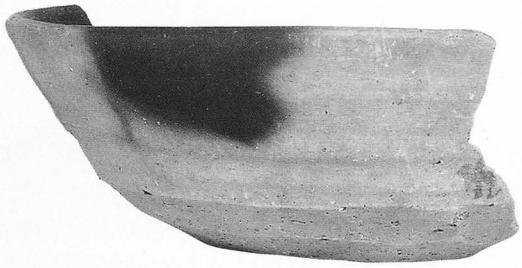






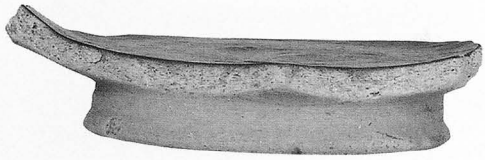


1. 住居跡ＳＩ01出土遺物



1

2



4-1

5

12

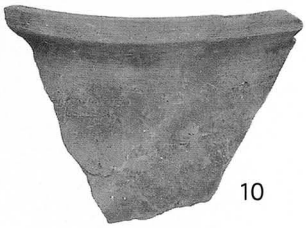
4-2

3

6

7

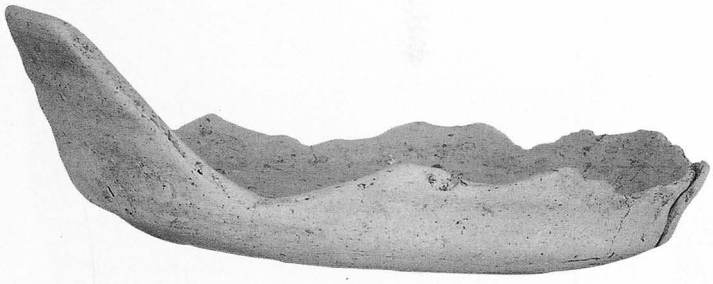
8



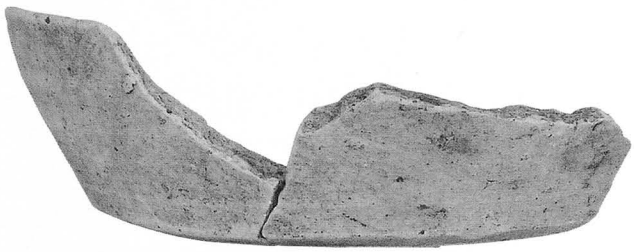
10

11

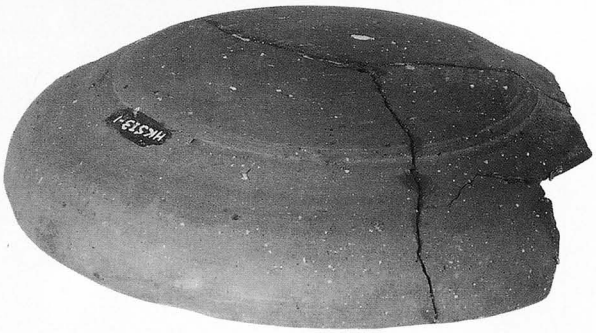
1. 住居跡ＳＩ02出土遺物



1



2



5

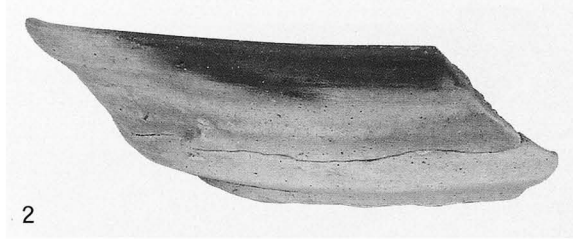
3

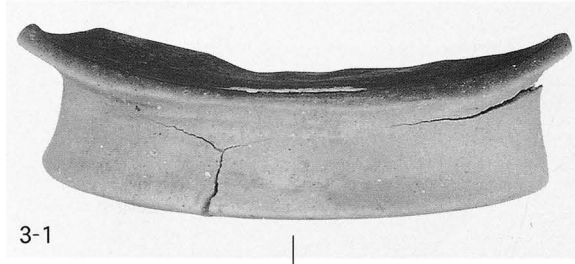
4

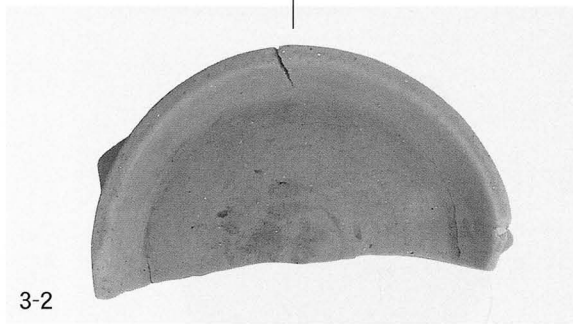
6

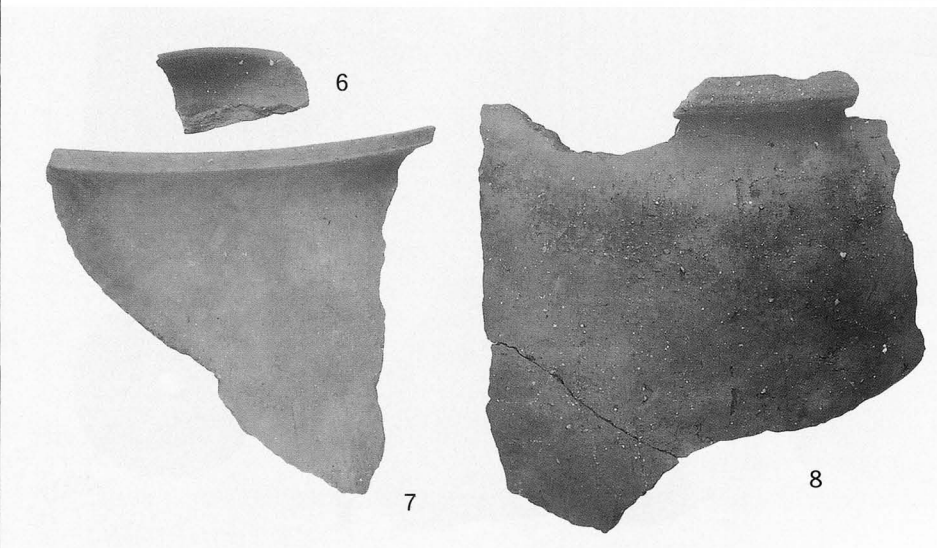
7

2. 住居跡ＳＩ03出土遺物

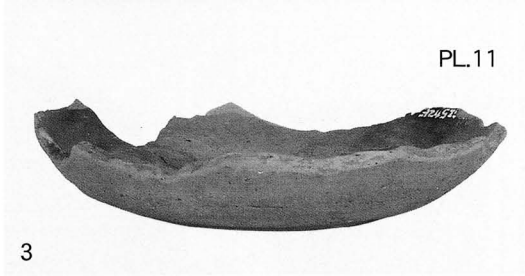


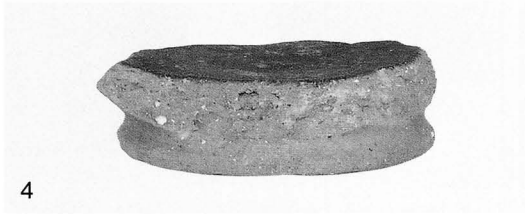


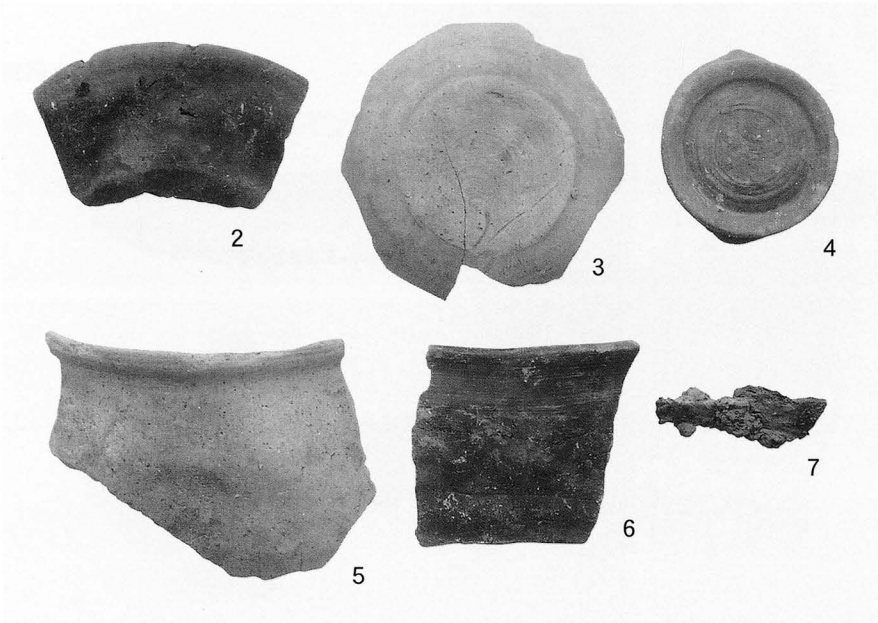




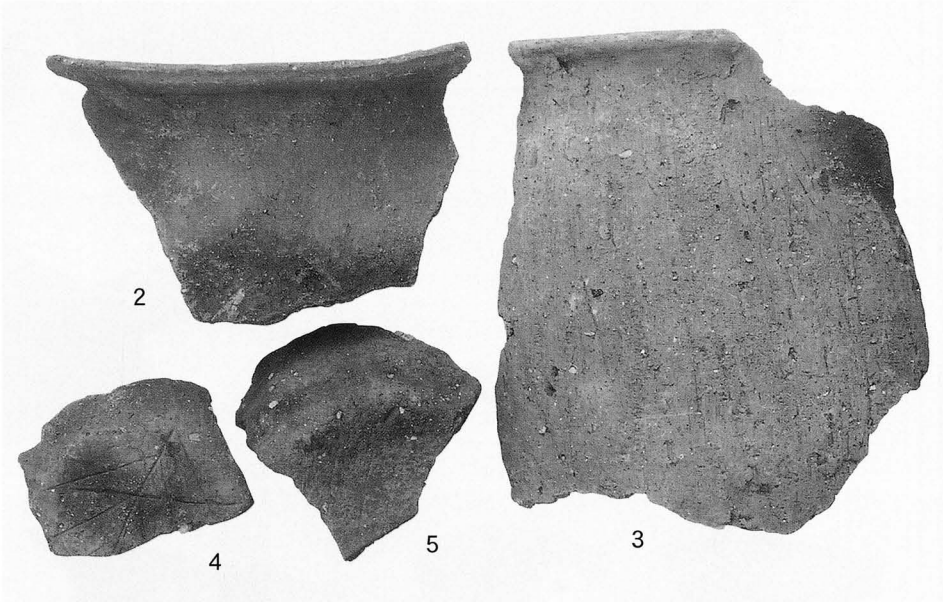
1. 住居跡ＳＩ04出土遺物

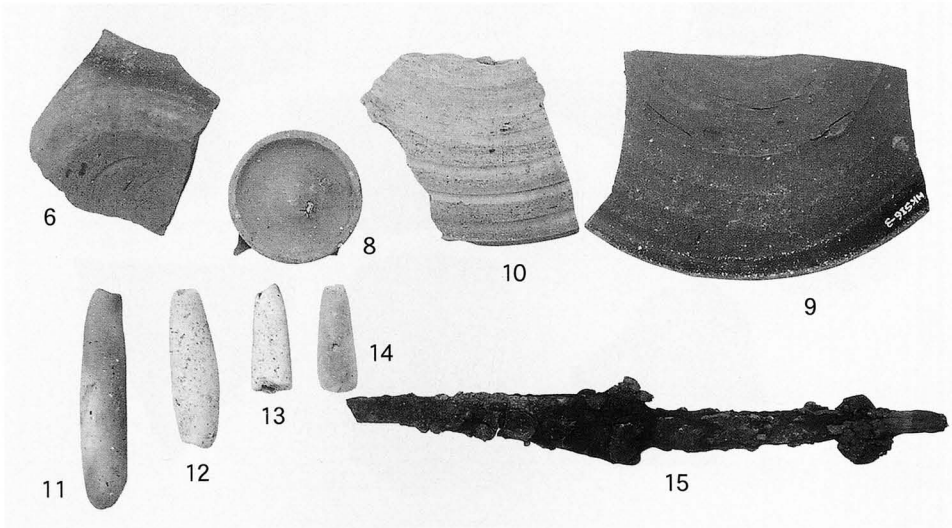




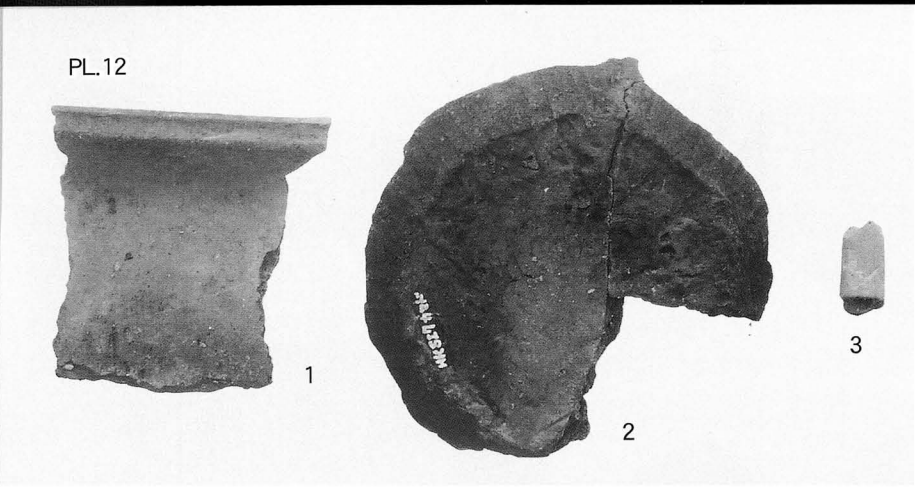


1. 住居跡ＳＩ05出土遺物

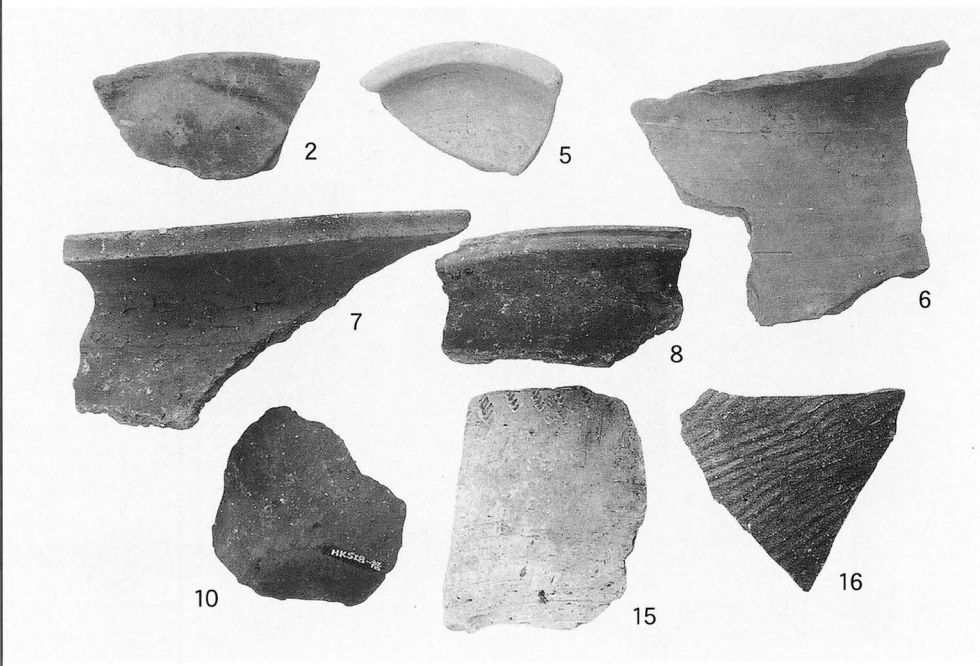




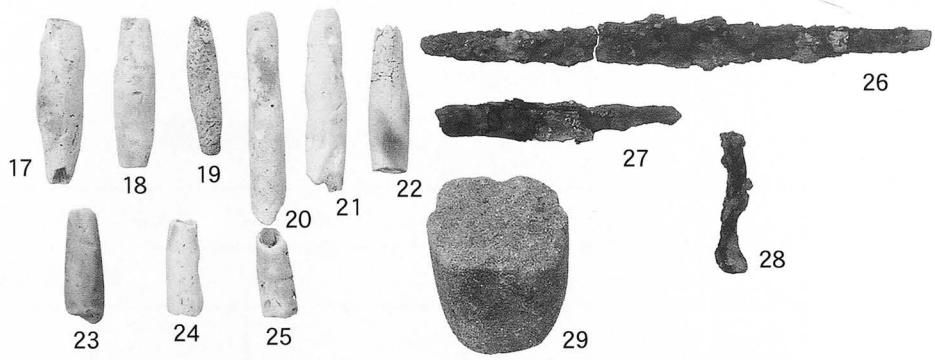
2. 住居跡ＳＩ06出土遺物



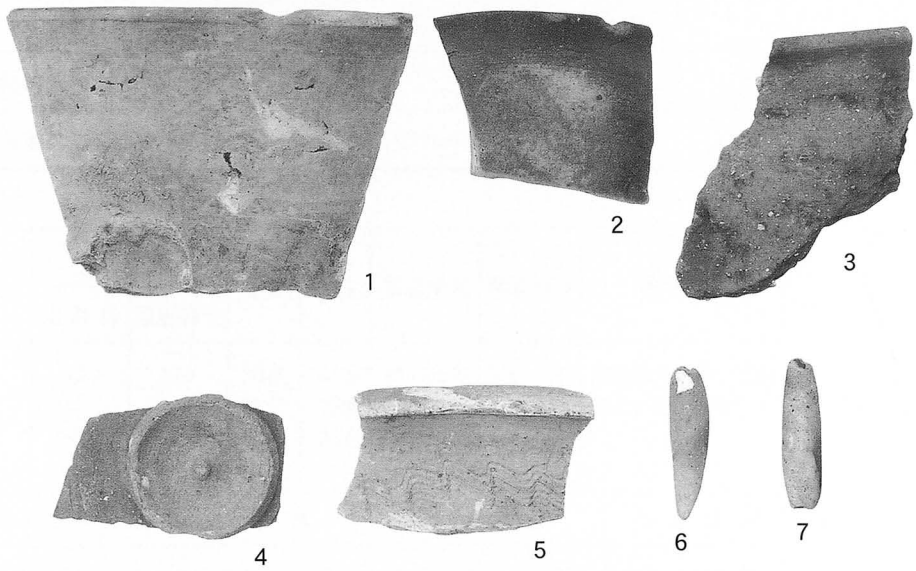
1. 住居跡ＳＩ07出土遺物



2. 住居跡ＳＩ08出土遺物（1）



1. 住居跡ＳＩ08出土遺物（2）



2. 土坑出土遺物
1：ＳＫ03
2：ＳＫ04
3～5：ＳＫ06
6・7：ＳＫ07

報告書抄録

ふりがな	かみのしゅくいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	上ノ宿遺跡　発掘調査報告書
副 書 名	
編著者名	小川和博・大渕淳志
編集機関	有限会社 日考研茨城
所 在 地	〒300－0508　茨城県稲敷市佐倉3321－1　　TEL.029－892－1112
発行機関	常陸大宮市教育委員会
所 在 地	〒319－2292　茨城県常陸大宮市中富町3135－6　　TEL.0295－52－1111
発行年月日	2008年10月31日

ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのしゅくいせき 上ノ宿遺跡	ひたちおおみやし 常陸大宮市下町 4015－1他	334	117	36度 33分 46秒 8	140度 23分 24秒 6	20060526 ～ 20060627	1,980㎡	店舗建設に伴う記録保存の為の調査

遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特記事項
上ノ宿遺跡	集落跡	縄文時代、奈良・平安、中世	竪穴住居跡8軒、柵列1条、土坑10基（奈良・平安時代）、柱穴状遺構10基（奈良・平安時代）、溝状遺構1条（中世）	縄文土器・土師器・須恵器・石鏃・銭貨・管状土錘・石製紡錘車・刀子	奈良・平安時代の集落跡である。住居跡から墨書土器が出土

要　約	本遺跡は久慈川の右岸、標高53.5mの舌状台地上で、広大な平坦面が広がる東側縁辺部に立地している奈良・平安時代の集落跡である。竪穴住居跡８軒、柵列１条、土坑10基は８世紀中葉から９世紀後葉にかけて形成されたもので、いずれの住居跡もカマドをもち、主軸方位は真北から西方15°内に収まるほど一致している。住居跡内から土師器・須恵器をはじめ紡錘形を呈した管状土錘が纏まって出土しているほか、石製紡錘車や刀子、砥石が検出されている。なお、土師器には墨書土器があり、計５点の内、「大福」「少澤」の二点が判読可能であった。当遺跡はさらに西方へ大規模に広がる可能性があり、この地域を代表する拠点的大集落跡になる可能性が大きい。

上ノ宿遺跡発掘調査報告書

発行日　平成20年（2008）10月31日

編　集　有限会社　日考研茨城
茨城県稲敷市佐倉3321－1　TEL　029-892-1112

発　行　常陸大宮市教育委員会
茨城県常陸大宮市中富町3135－6　TEL　0295-52-1111

印　刷　有限会社　田　辺　印　刷
茨城県稲敷市佐倉3321－5